

**平成30年度**

**専任教員の教育・研究業績**

**神戸薬科大学**

## 目次(専任教員の教育・研究業績)

	頁
北河 修治	1
中山 尋量	4
北川 裕之	7
小林 典裕	12
和田 昭盛	15
江本 憲昭	18
内田 吉昭	21
濱口 常男	23
沼田千賀子	27
田内 義彦	31
向 高弘	35
加藤 郁夫	40
小西 守周	43
力武 良行	45
長谷川 潤	48
坂根 稔康	51
奥田 健介	54
土反 伸和	57
松家 次朗	61
小山 豊	64
國正 淳一	67
玉巻 欣子	70
上田 昌史	74
大河原賢一	77
田中 研治	80
岡野登志夫	82
棚橋 孝雄	86
宮田 興子	89
岩川 精吾	92
畑 公也	95

	頁
小山 淳子	97
四方田千佳子	100
韓 秀妃	103
渡 雅克	105
奥川 斉	107
河本由紀子	109
高尾 宜久	111
福井 英二	114
山本 克己	116
山野由美子	119
竹内 敦子	122
赤井 朋子	125
波多江 崇	129
中川 公恵	132
池田 宏二	137
竹仲由希子	140
佐々木直人	142
八巻 耕也	145
児玉 典子	148
灘中 里美	151
安岡 由美	154
田中 将史	157
森脇 健介	160
中山 喜明	163
中島 園美	166
多河 典子	170
八木 敬子	173
上田久美子	175
三上 雅久	178
西村 克己	181

	頁
辰見 明俊	183
猪野 彩	186
西山 由美	188
都出 千里	191
沖津 貴志	193
藤波 綾	197
土生 康司	200
前田 秀子	203
河内 正二	206
竹下 治範	209
武田 紀彦	212
佐野 紘平	215
鎌尾 まや	218
泉 安彦	222
大山 浩之	225
細川 美香	227
増田 有紀	230
堀部 紗世	232
湯谷 玲子	235
山田 泰之	238
山崎 俊栄	240
高木 晃	242
内藤 裕子	244
田中 章太	247
宮川 一也	249
迎 武紘	252
宗兼 将之	255
田中 晶子	257

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 学長・教授	氏名 北河 修治
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2008年4月～2013年12月	6年制3年次の「創薬物理薬剤学」4年次の「実務実習事前教育」を分担した。薬剤学系の科目は学生の苦手な分野の一つであり、授業で補助プリントを使用し、また重要ポイントを黒板に明示し、内容の理解を図っている。また各授業の最後では、授業内容に関連した練習問題を行い、学生の理解を深める努力をしている。
	2008年4月～2014年12月	4年次の「機能性製剤学」を単独で(2011～2013年度は濱口教授と分担)担当した。DDSは薬物動態学との関連が深く、関連させながら理解を図った。
	2015年1月～2016年3月	6年制4年次の「薬剤設計学Ⅱ」を主担当(土生講師及び2名の非常勤講師が分担)した。
	2011年4月～2016年12月	6年制5,6年次選択科目の「化粧品学」を分担するとともに、取りまとめ役も担った。(2015年度は、4,6年次選択科目)
	2012年4月～2017年12月	6年制1年次の「薬学入門」を分担した。
	2012年9月～2016年3月	6年制2年次の「創薬物理薬剤学」を単独で担当した。科目が2年次に降りたことから、毎回、重要箇所の確認のため、小テスト(点数は最終評価に反映させない)を行った。
	2006年4月～2011年3月	大学院「薬剤設計学」の講義を担当した。
	2011年4月～2012年3月	大学院「製剤学特論」、「論文作成特論」の講義を分担した。
	2012年4月～2016年3月	大学院「薬剤学特論」の講義を分担した。
2013年4月～2016年3月	大学院「臨床薬剤学特論」の講義を分担した。	
2 作成した教科書、教材、参考書	2009年1月～2015年12月	「NEWパワーブック物理薬剤学・製剤学第2版」(廣川書店、2011年)を共編集、「パートナー薬剤学改訂第2版」(南江堂、2011年)、「製剤への物理化学第2版」(廣川書店、2011年)を分担執筆した。また「ベーシック薬学教科書シリーズ20、薬剤学第2版」(化学同人、2012年)を編集した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし
4 その他教育活動上特記すべき事項	2011年2月	文部科学省大学における医療人養成推進等委託事業～薬学教育における現状と課題に関する調査研究～に実行委員として参加し、2月開催のフォーラムで発表した。
	2012年4月～2013年3月	教務部長
	2013年4月～2016年12月	学長

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Yutani R., Kikuchi T., Teraoka R., Kitagawa S.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2014, 62(3), 274-280. "Efficient delivery and distribution in skin of chlorogenic acid and resveratrol induced by microemulsion using sucrose laurate"
Kitagawa S., Fujiwara M., Okinaka Y., Yutani R., Teraoka R.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2015, 63(1), 43-48. "Effects of mixing procedure itself on the structure, viscosity, and spreadability of white petrolatum and salicylic acid ointment and the skin permeation of salicylic acid"
Kitagawa S., Azuma K., Yutani R., Teraoka R.	論文	Int. J. Adv. Nanomat. 2015,1(1), 5-12. "Efficient skin delivery of resveratrol by microemulsion using pentaglycerol monolaurate as a surfactant component"
Yutani R., Komori Y., Tekeuchi A., Teraoka R., Kitagawa S.	論文	J. Pharm. Pharmacol. 2016, 68, 46-55. "Prominent efficiency in skin delivery of resveratrol by novel sucrose oleate microemulsion"
Kitagawa S., Yutani R., Kodani R.-i., Teraoka, R.	論文	Results in Pharma Sciences 2016, 6, 7-14. "Differences in the rheological properties and mixing compatibility with heparinoid cream of brand name and generic steroidal ointments: The effects of their surfactants"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
先発、後発ステロイド軟膏剤のレオロジー特性と油性クリーム剤との混合性（西垣彰人、湯谷玲子、寺岡麗子、北河修治）	2015年5月	日本薬剤学会第30回年会（長崎）
ポリグリセリンオレイン酸エステルを用いたマイクロエマルジョンによるレスベラトロールの皮膚デリバリー（小池和彦、湯谷玲子、寺岡麗子、北河修治）	2015年9月	日本油化学会第54年会（名古屋）
ポリフェノールの皮膚デリバリー改善に有用なマイクロエマルジョン成分の影響－界面活性剤が皮膚デリバリーに及ぼす影響－（信野亜由美、片岡悠、湯谷玲子、寺岡麗子、北河修治）	2015年9月	日本油化学会第54年会（名古屋）

白色ワセリンの製品間でのレオロジー特性の違いと混合操作および保存の影響（三宅真唯、湯谷玲子、寺岡麗子、北河修治）	2016年5月	日本薬剤学会第31年会(岐阜)
ジフルプレドナート含有軟膏剤の先発品、後発品ノレオリギー特性と混合操作の影響（猪原振一、湯谷玲子、寺岡麗子、北河修治）	2016年5月	日本薬剤学会第31年会(岐阜)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1976年1月～	日本薬学会会員	
1998年1月～2015年12月	日本薬物動態学会評議員	
2001年3月～2017年5月	日本薬剤学会評議員（会員としては継続中）	
2001年6月～2016年5月	日本化粧品学会評議員(会員としては継続中)	
2009年4月～2016年12月	製剤技術研究会委員(2011年9月製剤技術学会への改組に伴い評議員)	
2011年4月～2017年12月	日本医療薬学会会員	
2012年4月～2012年12月	日本薬学会奨励賞審査委員	
2012年4月～2012年12月	日本学術振興会科学研究費補助金審査員	
2013年2月～	日本薬学会代議員	
2013年6月～2014年5月	全国薬科大学長・薬学部長会議常任理事	
2014年6月～	日本私立薬科大学協会理事（2016年6月～同常務理事）	
2014年6月～	私立大学協会関西支部理事	
2014年7月～2015年12月	日本油化学会会員	
2016年4月～	日本私立大学協会理事	
2016年6月～	薬学教育協議会理事	

専任教員の教育・研究業績

所属	機能性分子化学研究室	職名	副学長・教授	氏名	中山 尋量
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
1. 薬学部学生への教育		2007年1月～現在	神戸薬科大学の6年制への学生には、基礎化学、無機錯体化学、物理化学 I、総合薬学講座の講義、基礎化学実習の指導を行っている。 また、5年次生からは卒業研究の指導を行っている。		
		2009年1月～2012年3月	物理化学 I（旧カリ）		
2 薬学研究科院生への教育		2009年～現在	神戸薬科大学薬学研究科院生に薬学演習、課題研究の指導を行っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
薬学生のための基礎化学		2015年2月28日	廣川書店		
薬学生のための基礎物理		2016年3月30日	廣川書店		
薬学用語辞典		2012年3月23日	東京化学同人		
物理系薬学 I. 物質の物理的性質（第2版）		2015年3月20日	東京化学同人		
物理系薬学 II. 化学物質の分析		2016年4月1日	東京化学同人		
物理系薬学 III. 機器分析・構造決定		2016年11月4日	東京化学同人		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
学生部長		2008年4月～2010年3月			
学生就職部長		2010年4月～2012年3月			
教務部長		2013年4月～現在			
II 研究活動					
1. 著書・論文等					

氏名	種別	内容
Maeda H., Kusuhara T., Tshako M., Nakayama H.	論文	Bull. Chem. Soc. Jpn., 2013, 86(11), 1256-1260. "Complex Formation of Etodolac with Hydrotalcite in Methano"
Hayashi A., Kubota M., Okamura M., Nakayama H.	論文	Chem Pharm Bull., 2015, 63(1), 13-17. "Complex Formation with Layered Double Hydroxides for the Remediation of Hygroscopicity"
Maeda H., Iga Y., Nakayama H.	論文	J. Inclusion Phenom., 2016, 86(3-4), 337-342. "Characterization of Inclusion Complexes of Betahistine with $\alpha$ -Cyclodextrin and Evaluation of their Antihumidity Properties"
Hayashi A., Hara N., Sugimura K., Masuda H., Oku E., Fujikake S., Noda S., Nakayama H.	論文	Clay Sci., 2016, 20(3-4) 43-48. "Intercalation Behavior of Carboxylic Acids and their Sodium Salts with Layered Double Hydroxide in Methanol"
Maeda H., Katsushiro M., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull, 2017, 32, 21-25. "Introduction of Phosphate Group into $\alpha$ -Arbutin by cyclo-Triphosphate"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
「ジホスホン酸塩によるサリシンのリン酸化反応および生成物単離法の検討」	2015年9月	第25回無機リン化学討論会
「シクロデキストリンによるベタヒスチンメシル酸塩の吸湿性改善」	2016年3月	第136回日本薬学会年会
「ヒドロタルサイト様化合物とケトプロフェンの複合体形成」	2016年3月	第136回日本薬学会年会

"Phosphorylation of Arbutin with cyclo-Triphosphate in Aqueous Solution"	2016年9月	9th International Symposium on Inorganic Phosphate Materials
「シクロデキストリンによるエトドラク の 苞 接 能 評 価 」	2017年3月	第137回日本薬学会年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2016年9月～現在	日本無機リン化学学会副会長	
2005年4月～現在	日本薬学会近畿支部委員	
2011年4月～現在	近畿化学協会代議員	
2012年9月～現在	薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂に関する調査研究チーム委員	
2016年8月～現在	医道審議会薬剤師分科会薬剤師国家試験出題基準改定部会委員	
2008年7月～現在	薬学共用試験センターCBT実施委員会委員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 副学長・教授	氏名 北川 裕之
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
<p>1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）</p> <p>(1) 本学薬学部学生への教育</p>	1997年4月-現在に至る	<p>学部学生に生化学と分子生物学の講義を行っている。</p> <p>1) 担当している分野の進歩は著しいので、下記の分担執筆した教科書を用いながら、講義に関連する内容における最近の発見や注目されている事項（新しい遺伝子医薬品の開発例や病因の解明など）についてプリントを作成し、適宜配付している。</p> <p>2) できるかぎり疾患、診断薬、治療薬に関連する事項を重点的に解説している。</p> <p>3) 薬剤師国家試験の難易度を学生に意識させるために、過去に出題された国家試験の問題を10問程度選び、講義終了10分前より配付し、数回確認テストとして実施している。また、更に知識を定着させるために、この問題の一部を定期試験に出題している。</p> <p>4) 講義中にレポート課題を与え、講義終了後に提出させ、添削を行ったものを次回の講義時に返却している（3回程度）。</p> <p>5) 学生による授業評価は、本学では2004年度より2年に一度行われているが、生化学、分子生物学ともに平均以上の評価を得ている。特に、最近10年間で行われた5回の授業評価では、いずれもベストティーチャー賞を受賞した（下記の4を参照）。</p> <p>学部学生に生物学系の実習指導を行っている。</p> <p>1) 組換え医薬品に関する理解を深めさせるために、最新の遺伝子工学に関する動向を反映するような実習内容に随時変更を行い、実習テキストも改訂している。</p> <p>2) 実習時間の最後に学生個々と教員が実習内容について質疑応答を行い、その日に行った実習を理解できるようにしている。</p> <p>3) 学生による実習評価も本学では2年に一度行われているが、平均以上の評価を得ておりおおむね好評である。</p>

		<p>学部学生に卒業研究の指導を行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 学生個々に実験に対する目的意識を持たせるよう、随時質疑応答を行っている。</li> <li>2) 論理的な考え方や表現力が身に付くように、定期的に研究内容を学生にまとめさせ、発表する機会を与えている。</li> <li>3) できるかぎり英文で書かれた論文を読むように奨励し、少なくとも年に一度はその内容をまとめて発表する機会を与えている。</li> </ol>
<p>(2) 本学薬学研究科大学院生の教育研究指導</p>	<p>1994年4月-現在に至る</p>	<p>大学院薬学研究科院生への生化学（生命科学）特論講義と演習及び研究指導を行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 講義は、最新のデータを分かりやすく解説するために、動画を用いたパワーポイントを使用している。</li> <li>2) 演習時には、研究分野の最近の動向を学生に把握させるため、学生が主体的に国際的な雑誌に発表された論文を論理的に説明でき、活発に討論に参加できるように演習日の少なくとも2日前までにはレジュメを全員に配付することを義務づけている。</li> <li>3) 学生に論理的な思考力と表現力が身に付くように、定期的に自分の研究内容を発表させ、研究室での討論を行い、そのことを通じて現在の自分の研究内容の進展状況や問題点も把握出来るように指導している。</li> <li>4) 学生には、少なくとも毎年一回は学会発表できるように指導している。</li> </ol>
<p>(3) 医学部学生への教育</p>	<p>2008年4月-現在に至る</p>	<p>神戸大学医学部2年生に生化学（糖質の構造と機能）の講義を行っている。</p>
<p>(4) 医学研究科大学院生への教育</p>	<p>2007年4月-現在に至る</p>	<p>神戸大学大学院医学研究科院生に薬物治療学の講義を行っている。</p>
<p>(5) 他の研究科の大学院生への教育</p>	<p>2006年11月 2007年6月 2008年5月 2010年2月 2016年6月</p>	<p>北海道大学大学院先端生命科学院の院生に糖鎖生物学の講義を行った。 北陸大学大学院薬学研究科院生に糖鎖生物学の講義を行った。 京都大学大学院生命科学研究科院生に糖鎖生物学の講義を行った。 九州大学大学院システム生命科学府院生に糖鎖生物学の集中講義(10時間)を行った。 名古屋大学大学院工学研究科院生に糖鎖生物学の集中講義(10時間)を行った。</p>

<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p> <p>NEW生化学第2版（廣川書店、編集：堅田利明、菅原一幸、富田基郎）</p> <p>スタンダード薬学シリーズII 4 生物系薬学 I. 生命現象の基礎（東京化学同人、日本薬学会編）</p>	<p>2006（平成18）年3月31日</p> <p>2015（平成27）年3月30日</p>	<p>「IV.4 組換えDNA技術と薬学への応用」を記述した（pp. 481-517）。</p> <p>「第5章 糖質」を記述した（pp. 28-34）。</p>
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし</p>		
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p> <p>ベストティーチャー賞（2年ごとに表彰、ただし2014年度は表彰なし）</p> <p>入試部長</p> <p>大学院主幹</p> <p>教務部長</p> <p>入試部長</p> <p>学生就職部長</p> <p>キャリア支援部長</p>	<p>2006年度、2008年度、2010年度、2012年度、2016年度</p> <p>2007年4月1日-2008年3月31日</p> <p>2008年4月1日-2010年3月31日</p> <p>2010年4月1日-2012年3月31日</p> <p>2012年4月1日-2014年3月31日</p> <p>2014年4月1日-2018年3月31日</p> <p>2018年4月1日-現在に至る</p>	<p>生化学III(2006年度)、分子生物学I(2008年度)、分子生物学I(2010年度)、分子生物学I(2012年度)、分子生物学Iおよび生化学III(2016年度)</p> <p>高大連携プログラムの構築に携わった。</p> <p>大学院薬学研究科薬科学専攻設置申請に携わった。</p> <p>薬学6年制におけるカリキュラムの改正に携わった。</p> <p>高大連携プログラムの拡充、ネット出願の設置、入試制度の改革に携わった。</p> <p>本学奨学生制度の拡充、4年時生の「キャリアデザイン講座」の発足に携わった。</p> <p>キャリア支援プログラムの改革に携わっている。</p>
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Takeuchi, K., Yoshioka, N., Higa Onaga, S., Watanabe, Y., Miyata, S., Wada, Y., Kudo, C., Okada, M., Ohko, K., Oda, K., Sato, T., Yokoyama, M., Matsushita, N., Nakamura, M., Okano, H., Sakimura, K., Kawano, H., Kitagawa, H., and Igarashi, M.	論文	Nature Commun. 2013, 4, 2740. "Chondroitin sulphate N-acetylgalactosaminyl-transferase-1 inhibits recovery from neural injury."

Koike, T., Izumikawa, T., Sato, B., and Kitagawa, H.	論文	J. Biol. Chem. 2014, 289 (10), 6695-6708. "Identification of phosphatase that dephosphorylated xylose in the glycosaminoglycan-protein linkage region of proteoglycans." (Faculty of 1000)
Nadanaka, S., Purunomo, E., Takeda, N., Tamura, J., and Kitagawa, H.	論文	J. Biol. Chem. 2014, 289 (22), 15231-15243. "Heparan sulfate containing unsubstituted glucosamine residue: Biosynthesis and heparanase-inhibitory activity." (Faculty of 1000)
Koike, T., Mikami, T., Shida, M., Habuchi, O., and Kitagawa, H.	論文	Sci. Rep. 2015, 5, 8994. "Chondroitin sulfate-E mediates estrogen-induced osteoanabolism."
Izumikawa, T., Dejima, K., Watamoto, Y., Nomura, K. H., Kanai, N., Rikitake, M., Tou, M., Murata, D., Yanagita, E., Kano, A., Mitani, S., Nomura, K., and Kitagawa, H.	論文	J. Biol. Chem. 2016, 291 (44), 23294-23304. "Chondroitin 4-O-sulfotransferase is indispensable for sulfation of chondroitin and plays an important role in maintaining normal life span and oxidative stress responses in nematodes."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
コンドロイチン硫酸プロテオグリカンの硫酸化は大脳皮質の発生における神経細胞の移動と形態形成を制御する	2015年7月	第38回日本神経科学大会Neuroscience2015
てんかんにおける6硫酸化コンドロイチン硫酸プロテオグリカンの機能	2015年7月	第38回日本神経科学大会Neuroscience2015
グリコサミノグリカン鎖と血管・腎石灰化	2015年8月	第32回 ROD-21研究会
Estrogen-induced osteoanabolism is mediated via enhanced production of chondroitin sulfate-E	2015年9月	23rd International Symposium on Glycoconjugates

Basal-like型乳がん細胞の浸潤におけるコンドロイチン硫酸鎖の役割	2015年12月	BMB2015
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2006年4月～現在に至る	日本生化学会近畿支部 幹事	
2006年4月～現在に至る	プロテオグリカンフォーラム 世話人	
2007年4月～2013年12月	FCCA:Forum Carbohydrate Coming of Age 幹事	
2007年4月～2013年12月	Trends in Glycoscience and Glycotechnology 編集委員	
2007年8月～現在に至る	日本糖質学会 評議員	
2008年1月～2011年12月	Journal of Biochemistry, Advisory Board	
2008年7月～2013年3月	神戸大学グローバル COEプログラム「次世代シグナル伝達医学の教育研究国際拠点」事業推進担当者	
2009年1月～2017年12月	Glycoconjugate Journal 編集委員	
2009年4月～現在に至る	神戸がん研究会 世話人	
2009年4月～現在に至る	日本結合組織学会 評議員	
2009年10月～2011年9月	日本生化学会 代議員	
2010年9月～2010年11月	日本薬学会学会賞第1次選考委員	
2012年4月～2017年3月	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「疾患糖鎖生物学に基づく革新的治療薬の開発」研究代表者	
2012年6月～2013年11月	科学研究費委員会専門委員	
2012年11月～現在に至る	日本糖鎖コンソーシアム(JCGG) 幹事	
2013年9月～2013年11月	日本薬学会学会賞第1次選考委員	
2014年1月～現在に至る	日本生化学会 「生化学」誌企画委員	
2015年4月～現在に至る	Scientific Reports 編集委員	
2015年11月～現在に至る	日本生化学会 代議員	
2015年11月～現在に至る	日本生化学会 評議員	
2016年1月～2017年12月	Journal of Biochemistry, Associate Editor	
2015年6月～2016年5月	第63回日本生化学会近畿支部例会長	
2016年8月～2017年7月	特別研究員等審査会専門委員、国際事業委員会書面審査員・書面評価員、及び卓越研究員候補者選考委員会書面審査員	
2016年9月～2018年8月	日本生化学会近畿支部奨励賞選考委員（2017年9月～2018年8月は委員長）	
2018年1月～現在に至る	Journal of Biochemistry, Editor	

## 専任教員の教育・研究業績

所属	生命分析化学研究室	職名	教授	氏名	小林 典裕
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2002. 4. 1～2017. 12. 31	<p>調査対象の期間にわたって、『分析化学I』（1単位，化学平衡），『分析化学II』（1単位，化学物質の検出と定量），『臨床検査学II』（1単位（50%を分担），分析技術の臨床応用），『分析化学系実習』（1単位，化学物質の検出と定量）を担当してきた。授業は，指定の教科書（次項参照）に加え，必要に応じてプリントを配付して併用した。隔年で行われる授業アンケートを参考に授業の改善を図っている。前年度は，学生の出席率と授業への集中力を高める目的で，平常点（出席と授業終了前の小テスト）の加算を初めて行った。板書を多用する授業スタイルなので，早くから蛍光色のチョークを採用し，できるだけ大きく鮮明に書くように心がけている。実習では，意欲と態度を重視している。実験開始前の講義では，標準的な実験法を教卓で自ら実演し，こまめに実験室を巡回して実技指導に努めている。</p>		
2	作成した教科書、教材、参考書	2008. 1. 1～2017. 12. 31	<p>下記の教科書の執筆に関わった。  『免疫測定法』（講談社、編著），『NEW薬品分析化学』（廣川書店、編著），『NEW薬学機器分析』（廣川書店、分担），『コアカリ対応 分析化学』（丸善、分担），『ベーシック薬学教科書シリーズ2. 分析科学』（化学同人、分担），『パートナー分析化学II』（南江堂、分担），『スタンダード薬学シリーズ2. 物理系薬学 IV. 演習編』（東京化学同人、分担），『薬学分析科学の最前線』（じほう、分担），『免疫測定法－基礎から先端まで－』（講談社、編著）。  詳細については，研究活動の欄を参照のこと。このほか，学生実習用テキスト（『分析化学系実習』），授業用テキスト（『臨床検査学II』，『分析化学III』）を作成し，活用した。</p>		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		2012. 4～2014. 3 学生就職部長		

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
小林 典裕	著書	『免疫測定法』生物化学的測定研究会編（講談社，2014）.1-40, 47-76, 124-135, 152-157.
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2017, 89(1), 988-995. "One-Shot in Vitro Evolution Generated an Antibody Fragment for Testing Urinary Cotinine with More Than 40-Fold Enhanced Affinity"
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2015, 87(24), 12387-12395. "Gaussia Luciferase as a Genetic Fusion Partner with Antibody Fragments for Sensitive Immunoassay Monitoring of Clinical Biomarkers"
Oyama H., Yamaguchi S., Nakata S., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2013, 85(10), 4930-4937. "Breeding" Diagnostic Antibodies for Higher Assay Performance: A 250-fold Affinity-matured Antibody Mutant Targeting a Small Biomarker"
Oyama H., Tanaka E., Kawanaka T., Morita I., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2013, 85(23), 11553-11559. "Anti-Idiotypic scFv-Enzyme Fusion Proteins: A Clonable Analyte-Mimicking Probe for Standardized Immunoassays Targeting Small Biomarkers"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Generation, molecular breeding, and biomedical application of antibodies specific to low molecular weight drugs	2015.1	The 2015 Annual convention of the Korean Society of Applied Pharmacology
Utility of Gaussia luciferase as a fusion partner with scFvs for bioluminescent immunoassays testing clinical biomarkers	2017.6	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine

In vitro affinity maturation of a single-chain Fv fragment for on-site testing of cannabinoids	2017.6	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
アッセイ感度の向上を目指す「抗体育種」：抗コチニン抗体を例として	2017.7	日本法中毒学会第36年会
高親和力を保持した抗エストラジオールscFv最少変異体調製の試み	2017.9	日本分析化学会第66年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2006年4月～2017年12月	日本分析化学会 近畿支部常任幹事	
2008年12月～2017年12月	日本臨床化学会 近畿支部評議員	
2007年4月～2014年6月	生物化学測定研究会 副会長	
2014年6月～2017年12月	生物化学測定研究会 会長	

## 専任教員の教育・研究業績

所属	生命有機化学研究室	職名	教授	氏名	和田 昭盛
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2004年4月～2006年7月	神戸薬科大学の学部学生に有機化学IVの講義を行った。		
		2004年4月～2007年9月	神戸薬科大学の学部学生に有機化学系IIの実習指導を行った。		
		2006年9月～現在に至る	神戸薬科大学の学部学生に有機化学IIの講義を行っている。		
		2007年4月～2010年7月	神戸薬科大学の学部学生に化学系基礎演習Iの講義を行った。		
		2007年10月～2016年1月	神戸薬科大学の学部学生に生物有機化学の講義を行った。		
		2008年4月～2013年1月	神戸薬科大学の学部学生に有機化学Vの講義を行った。		
		2008年4月～2016年7月	神戸薬科大学の学部学生に有機化学系IIIの実習指導を行った。		
		2009年4月～2012年7月	神戸薬科大学の学部学生に有機化学VIIの講義を行った。		
		2010年4月～2017年7月	神戸薬科大学の学部学生に精密有機合成の講義を行った。		
		2011年4月～2017年7月	神戸薬科大学の学部学生に医薬品開発IIの講義を行った。		
		2013年4月～現在に至る	神戸薬科大学の学部学生に構造解析学の講義を行っている		
		2017年4月～現在に至る	神戸薬科大学の学部学生に有機化学Iの講義を行っている。		
		2017年9月～現在に至る	神戸薬科大学の学部学生に機器分析学実習の講義を行っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書		2006年4月～2012年3月	薬学部生を対象にMS, NMR, IRなどスペクトル解析から構造決定を行うための初歩的なプリントを作成し、毎年更新している。		
		2012年2月	構造解析法の教科書を作成した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		2006年10月27日	高校生を対象とした薬学の講義と実習を行った。		
4 その他教育活動上特記すべき事項		2004年4月～2006年3月	大学学生寮舎監		
		2006年4月～2010年3月	薬用植物園園長		
		2010年4月～2016年3月	CBT対策委員会委員長		

	2011年4月～2013年3月	教務委員
	2014年4月～2017年3月	入試部長
	2017年4月～現在に至る	薬用植物園園長
	2017年4月～現在に至る	基礎教育センター長
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Wang, S.; Munro, R. A.; Shi, L.; Kawamura, I.; Okitsu, T.; Wada, A.; Kim, S.-Y.; Jung, K.-H.; Brown, L. S.; Ladizhansky, V.	論文	Nature Methods 2013, 10(10), 1007-1012. "Solid-state NMR spectroscopy structure determination of a lipid-embedded heptahelical membrane protein"
Okitsu, T.; Nakata, K.; Nishigaki, K.; Michioka, N.; Karatani, M.; Wada, A.	論文	J. Org. Chem. 2014, 79(12), 5914-5920. "Iodocyclization of Ethoxyethyl Ethers to Ynamides: An Immediate Construction to Benzo[b]furans"
Yanagawa, M.; Kojima, K.; Yamashita, T.; Iwamoto, Y.; Matsuyama, T.; Nakanishi, K.; Yamano, Y.; Wada, A.; Sako, Y.; Shichida, Y.	論文	Sci. Rep. 2015, 5, 11081. "Origin of the low thermal isomerization rate of rhodopsin chromophore"
Luk, H. L.; Bhattacharyya, N.; Montisci, F.; Morrow, J. M.; Melaccio, F.; Wada, A.; Sheves, M.; Fanelli, F.; Chang, B. S. W.; Olivucci, M	論文	Sci. Rep. 2016, 6, 38425. "Modulation of thermal noise and spectral sensitivity in Lake Baikal cottoid fish rhodopsins"
Okitsu, T.; Matsuyama, T.; Yamashita, T.; Ishizuka, T.; Yawo, H.; Imamoto, Y.; Shichida, Y.; Wada, A.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2017, 65(4), 356-358. "Alternative Formation of Red-Shifted Channelrhodopsins: Noncovalent Incorporation with Retinal-Based Enamine-Type Schiff Bases and Mutated Channelopsin"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
エナミン型シッフ塩基を発色団とする新規チャンネルロドプシンの開発	2015年・5月	"日本ビタミン学会第67回大会" 和田昭盛、沖津貴志、二村直行、新見由香、石塚徹、八尾寛、松山武、山下高廣、七田芳則
Preparation of New ChR with One Double Bond-elongated 3,4-Dehydroretinal	2015年・10月	"The 3rd International Conference of Retinoid" Wada, A., Okitsu, T., Yamano, Y., Kobayashi, Y., Ishizuka, T., Yawo, H., Matsuyama, T., Yamashita, T., Imamoto, Y., Shichida, Y.

共役したクロメン環を有するレチナールアナログの合成研究	2016年・6月	“日本ビタミン学会第68回大会” 神崎 さくら子、石井 菜紬子、沖津 貴志、和田 昭盛
レチナール環構造に共役系を導入したアナログの合成とタンパク質オプシンの相互作用	2016年・10月	“日本レチノイド研究会第27回学術集会” 和田 昭盛、山野 由美子、沖津 貴志、山下 高廣、今本 泰、七田 芳則
13位13C-レチニルパルミテートの効率的な合成法の開発	2017年・9月	“第61回香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会” 和田 昭盛、平岡 敬子、柏原 理香、山野 由美子、松浦 知和
3. その他		
演題	講演日	内容
1. レチノイドの立体選択的合成とその応用 2. ビタミンA誘導体を用いた生物有機化学的研究	2015年2月27日	帝京大学 一薬学最前線一
III 学会等および社会における主な活動		
1997年4月～現在	日本ビタミン学会トピックス担当委員	
2000年4月～2013年5月	日本ビタミン学会ビタミン誌編集委員	
2000年4月～2009年6月	日本ビタミン学会評議委員	
2009年6月～2013年5月	日本ビタミン学会幹事	
1991年4月～現在	日本ビタミン学会会員	
1978年4月～現在	日本薬学会会員	
1982年4月～現在	有機合成化学協会会員	
1991年4月～現在	日本カロテノイド学会会員	
1999年4月～現在	日本レチノイド学会会員	
2009年11月～現在	日本レチノイド学会幹事	
2013年6月～2017年5月	日本ビタミン学会理事、ビタミン誌編集委員長	
2017年6月～現在	日本ビタミン学会会長	

## 専任教員の教育・研究業績

所属	臨床薬学研究室	職名	教授	氏名	江本 憲昭
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2008年4月1日	「生理学」6年制課程3年次		
		2009年4月1日	「薬物治療学Ⅲ」6年制課程4年次		
		2009年4月1日	「実務実習事前教育」6年制課程4年次		
		2011年4月1日	「処方解析」6年制課程6年次		
		2013年4月1日	「機能形態生理学」6年制課程2年次		
			講義では視覚的な理解を促すために図表や写真を含めたパワーポイントファイルを提示しながら進めている。講義前にパワーポイントファイルの内容をプリントし、一部穴埋め形式にして配布している。講義内容については、臨床医としての経験に基づき、具体的な疾患や症例を提示しながら最近の臨床エビデンスなどを交えるなど、学生の学習意欲を高める工夫を行っている。また、知識を定着させる目的で、国家試験の問題を改変したものを講義終了前に提示し、その内容を解説している。		
2 作成した教科書、教材、参考書		2008年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2009年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2010年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2011年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2012年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2013年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2014年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2015年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2016年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2017年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項		2015年4月～2017年3月	大学院主幹		

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Taniguchi Y, Miyagawa K, Nakayama K, Kinutani H, Shinke T, Okada K, Okita Y, Hirata KI, Emoto N.	論文	Balloon Pulmonary Angioplasty can be an Additional Treatment Option to Improve the Prognosis of Patients with Chronic Thromboembolic Pulmonary Hypertension. EuroIntervention. (2014) 10: 518-525
Miyagawa K, Emoto N.	論文	Current State of Endothelin Receptor Antagonism in Hypertension and Pulmonary Hypertension. Ther Adv Cardiovasc Dis. (2014) 8: 202-216
Heiden S, Vignon-Zellweger N, Masuda S, Yagi K, Nakayama K, Yanagisawa M, Emoto N.	論文	Vascular endothelium derived endothelin-1 is required for normal heart function after chronic pressure overload in mice. PLoS One. (2014) 9, e88730.
Satwiko MG, Ikeda K, Nakayama K, Yagi K, Hocher B, Hirata KI, Emoto N. Targeted activation of endothelin-1 exacerbates hypoxia-induced pulmonary hypertension.	論文	Targeted activation of endothelin-1 exacerbates hypoxia-induced pulmonary hypertension. Biochem Biophys Res Commun. (2015) 465: 356-362.
Emoto N.	著書	Endothelin Receptor Antagonist. Diagnosis and Treatment of Pulmonary Hypertension, Springer (2016) 153-169.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Pulmonary Hypertension in Congenital Heart Diseases: Treat and Repair Approach.	2016年・10月	The 15th Vietnam National Congress of Cardiology
肺高血圧症の治療戦略：新薬をどう生かすか	2017年・3月	第81回日本循環器学会総会学術総会

肺動脈性肺高血圧の分子機序：これまでの知見と今後の課題	2017年・6月	第2回日本肺高血圧・肺循環学会学術集会
Pharmacological Interventions Targeting the Endothelin Pathway: the Status Quo and Future Perspective	2017年・10月	The Fifteenth International Conference on Endothelin
肺高血圧症Update：病態を踏まえた治療の考え方	2017年・10月	第21回日本心不全学会学術集会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1987年6月～現在	日本内科学会 (2002年9月～現在：日本内科学会認定内科医、2014年12月～現在：日本内科学会総合内科専門医)	
1987年4月～現在	日本循環器学会 (2004年3月～現在：日本循環器学会認定循環器専門医、2015年4月～現在：日本循環器学会評議員)	
2000年10月～現在	日本高血圧学会 (2009年10月～現在：日本高血圧学会評議員、2010年10月～現在：日本高血圧学会専門医)	
2004年4月～現在	日本医学教育学会	
2012年10月～現在	医薬品医療機器総合機構専門委員	
2012年11月～現在	国際心臓研究学会日本部 (2012年11月～現在：国際心臓研究学会 日本部会 評議員)	
2013年9月～現在	International Conference on Endothelin International Advisory Board	
2016年4月～現在	日本肺高血圧・肺循環学会 (2016年4月～現在：日本肺高血圧・肺循環学会理事)	

内田

専任教員の教育・研究業績

所属 数学研究室	職名 教授	氏名 内田 吉昭
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
数学 I と数学IIにおいて，習熟度別クラスの導入	2008年4月～現在に至る	入学してきた学生の数学における学力(高等学校での数学IIIおよびCの履修の有無など)に差があるので，習熟度別の授業を行っている。
統計学 I とIIにおいて，サブノートの作成	2009年4月～現在に至る	統計学をなるべく視覚を使って理解してもらうために，グラフ等を多く使用したサブノートを作成して，授業の補助として使っている。
2 作成した教科書、教材、参考書 『あっ』と驚く統計学I・IIサブノート 薬学系学生のための微分積分 熊澤美裕紀共著 ムイスリ出版	2009年4月～ 2016年3月	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Y.Uchida	論文	Delta-unknotted operations and ordinary unknotted operations Topology and its Applications 196 (2015) 1019-1022
Y. Uchida	論文	The detour crossing changes Kobe J. Math. 31 (2014) 1-7
Toshiyuki Sasaki, Yoko Ida1, Dr. Ichiro Hisaki, Dr. Tetsuharu Yuge, Prof. Dr. Yoshiaki Uchida, Dr. Norimitsu Tohnai and Prof. Dr. Mikiji Miyata	論文	Characterization of Supramolecular Hidden Chirality of Hydrogen-Bonded Networks by Advanced Graph Set Analysis Chemistry - A European Journal Volume 20, Issue 9, pages 2478-2487, February 24, 2014
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
$\Delta$ -unknotting number one knot without ribbon singularity is prime	2015・8	拡大KOOKセミナー
$\Delta$ -unknotting number one knot without ribbon singularity is prime	2015・9	瀬戸内結び目セミナー
III 学会等および社会における主な活動		
1988年4月～現在に至る	日本数学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 濱口 常男
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年4月～現在に至る	4年次生の薬事関係法規・薬事制度の講義を担当している。毎回配布するプリント並びに適時パワーポイントを利用している。
	2010年4月～現在に至る	4年次生の実務実習事前教育実習を担当している。実習開始時での講義では、実習テキスト及びパワーポイントを利用し、医療人として醸成すべき態度、実習の目的及びその内容を説明している。SDGを組み入れた実習では、病院・薬局の指導薬剤師をタスクとして参加させて、医療における薬剤師業務の重要性の理解を深めさせるようにしている。また、調剤実習では、調剤技能の習得の徹底を図るため、病院・薬局の指導薬剤師に参加してもらい、医療現場の臨場感と緊張性のある実習を目指している。また、各調剤台を頻繁に見回り、調剤の手技が正しく適正に行われるように点検している。調剤技能の評価については、実習生2人ずつのグループで実習を行い、互いに相手の調剤技能を評価させることにより、調剤技能の確実な習得を目指している。
	2010年4月～現在に至る	5年次生の病院実務実習、薬局実務実習を担当している。実習前の学生説明会では、医療人の心構え、諸注意を講義している。実習受入施設には実習前、実習中および実習終了時に施設訪問を行い、大学と施設の連携を図ると共に実習生の実習状況を確認している。実習終了後、実務実習報告会・意見交換会を開催し、全学生にポスター発表を行わせて、プレゼンテーション技能の醸成を図っている。
	2010年10月～現在に至る	4年次生の安全管理医療の講義を担当している。プリントを配布し、適時パワーポイント及びDVDを利用している。
	2011年1月～現在に至る	5年次の卒業研究Ⅰ並びに6年次の卒業研究Ⅱを担当している。現場の病院（7施設）あるいは薬局（4施設）において臨床研究を実施している。臨床研究施設での実際の課題を研究することにより、問題発見能力及びその解決能力の醸成を図っている。加えて、社会人としてのコミュニケーション能力の養成も併せて育成できる。
	2011年4月～2014年7月	4年次生の機能性製剤学における実際の調剤学の講義を担当している。毎回配布するプリント並びにパワーポイントを利用している。
	2011年4月～現在に至る	6年次生の処方解析学、処方解析演習を担当している。処方解析学では配布するプリント並びに適時パワーポイントを利用している。処方解析演習では演習問題を配布し、その解説はパワーポイントを利用している。

	2011年10月～現在に至る 2012年4月～現在に至る 2014年10月～現在に至る	6年次生の薬学総合講座を担当している。薬学総合講座では法規・制度の講義を担当し、教科書および薬剤師国家試験過去問題のプリントを利用している。 6年次生の薬学総合講座（再履修生）を担当している。薬学総合講座では法規・制度の講義を担当し、教科書および薬剤師国家試験過去問題のプリントを利用している。 3年次生の調剤学Ⅱを担当している。調剤学Ⅱではプリントを配布し、又は適時パワーポイントを利用している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
病院・薬局実務実習Ⅰ 病院・薬局に共通な薬剤師業務	2007年4月	医薬品情報の収集、分析、評価、加工及び提供について解説した。 （東京化学同人, 日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会・日本医療薬学会 編）
計算実践トレーニング帳	2009年1月	OSCEおよび臨床実習に対応した計算能力の向上について解説書した。 化学同人, 前田初男 編）
わかりやすい薬事関係法規・制度第3版	2015年3月	薬事関係法規・制度について解説した。 （廣川書店, 木方正, 安田一郎, 佐藤拓夫, 神村英利 編）
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
一般市民講座	2010年4月24日	神戸薬科大学市民公開講座
一般市民講座	2012年3月6日	神戸市老眼大学
4 その他教育活動上特記すべき事項		
なし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kawauchi S., Nakamura T., Yasui H, Miki I., Inoue J., Horibe S, Hamaguchi T., Tanahashi T., Mizuno S.	論文	Int. J. Med. Sci., 2014, 11, 1208-1217. "Intestinal and hepatic expression of Cytochrome P450s and mdr 1a in Rats with indomethacin-induced small intestinal ulcers."
Kawauchi S., Nakamura T., Yasui H, Miki I., Inoue J., Horibe S, Hamaguchi T., Tanahashi T., Mizuno S.	論文	Int. J. Med. Sci., 11, 1208-1217, 2014. "Intestinal and hepatic expression of Cytochrome P450s and mdr 1a in Rats with indomethacin-induced small intestinal ulcers."

合田俊一, 高瀬尚武, 中田日早枝, 三木育子, 吉田沢子, 田淵誠子, 井上知美, 佐々木信子, 上野隼平, 近藤亜美, 波多江崇, 濱口常男, 室井延之	論文	医薬品相互作用研究, 2017, 41, 29-33. 「CS分析を用いた病棟薬剤業務の評価と今後の課題」
竹下治範, 井上知美, 高瀬尚武, 波多江 崇, 室井延之, 濱口常男	論文	医薬品情報学, 2017, 18, 270-276. 「副腎皮質ステロイド軟膏剤の適正使用に向けたFinger-tip unitによる服薬指導の実態調査と製剤学的使用性の評価」
濱口常男	著書	廣川書店, 2015, 3-5. 「わかりやすい薬事関係法規・制度第3版 (神村英利, 木方正, 佐藤拓夫, 安田一郎 編)」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
心不全患者に対するEPA製剤の拡張機能に及ぼす影響	2015年11月	第25回日本医療薬学会年会
循環器系疾患及びその治療薬の転倒に及ぼす影響に関する検討	2015年11月	第25回日本医療薬学会年会
エルロチニブによる間質性肺疾患発症メカニズムの解明	2016年3月	日本薬学会第136年会
PTP 包装からの錠剤の押し出し方法の調査	2016年3月	日本薬学会第136年会
有害事象自発報告データベースを用いた非アルコール性脂肪肝炎 (NASH) の原因薬剤の探索	2016年3月	日本薬学会第136年会
III 学会等および社会における主な活動		
2002年4月～2004年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2004年4月～2010年3月	兵庫県病院薬剤師会常任理事	
2006年4月～2012年3月	兵庫県薬剤師会理事	
2006年4月～2010年1月	日本病院薬剤師会代議員	
2008年4月～2010年1月	日本病院薬剤師会代議員会議事運営委員	

濱口

2008年4月～2010年3月	日本病院薬剤師会近畿ブロック薬剤業務委員会委員
2008年4月～2012年6月	日本病院薬剤師会近畿ブロック事務局庶務
2010年3月～現在に至る	薬学教育協議会病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員会委員
2010年4月～2012年3月	兵庫県病院薬剤師会理事
2012年4月～現在に至る	兵庫県病院薬剤師会監事
2012年4月～現在に至る	兵庫県薬剤師会薬学教育部委員
2016年4月～現在に至る	兵庫県薬剤師会大学支部長

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 沼田 千賀子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年10月～現在	大学院修士課程医療薬科学研修特論においては、緩和医療を中心に薬物療法と患者心理についての講義、ワークを行っている。ワークでは「死生観」について2～3人でのディスカッションを行い、「死」から見えてくる患者心理を感じられるように工夫している。
	2010年4月～現在	実務実習事前教育においては、5年次に行われる長期実務実習（病院・薬局）にスムーズに取り組めるよう、臨床現場で求められる知識・技能・態度の指導を行っている。また自己の到達度合いが分かるように「ルーブリック評価」を導入している。
	2011年4月～現在	薬害に関する講義および薬害被害者の体験談を聞く授業を実施し、学生が薬害について深く考え討議する機会となっている。
	2013年4月～現在	大学院がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン「地域・職種間連携を担うがん専門医療者養成」において、がん医療に従事する薬剤師の養成を行っている。「がん医療薬学特論」の講義・演習で模擬患者を使った服薬指導や海外から多職種連携の研究を行っている専門の先生を招聘し、ワークショップ形式での症例検討を行うなど、実践的な教育に取り組んでいる。
2 作成した教科書、教材、参考書	2016年～現在	1～3年次生対象の「アクティブラボ」の科目では、本学の地域連携サテライトセンター隔月で開催している「メディカル・カフェ」に学生が参加し、がん患者やそのご家族、医療従事者と直接話をする機会を設けている。この経験が、医療者としての意識や資質の向上につながっている。
	2012年3月15日	薬学生のための基礎シリーズ1 ヒューマニズム薬学入門（共著）
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2011年3月～現在	実務実習事前教育用テキストの作成
	2014年4月26日	一般社団法人 がん哲学外来「がん哲学外来とは」（大阪）講演
	2015年5月23日	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会 ルーブリック作成ワークショップ（星薬科大学）講演

	2016年2月14日	第10回がんプロシンポジウム「がん患者の立場から、薬剤師教育を考える」 (大阪) 講演
	2016年10月23日	がんプロ連携7大学合同研修会「神戸薬科大学における「がん哲学学校 メディカル・カフェ」の取り組みと参加者および学生の意識変化について」 (大阪) 講演
	2016年11月1日	レギュラトリーサイエンスエキスパート研修会「薬学部における薬害教育の取り組み」(東京) 講演
4 その他教育活動上特記すべき事項	2010年4月～現在	OSCE実施委員長
	2010年1月～現在	薬学教育者・薬剤師へのFD活動として、タスクフォースとして、薬剤師のためのワークショップin近畿に協力
	2012年4月～現在	がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン「地域・職種間連携を担うがん専門医療者養成」担当
	2014年4月～2016年3月	学生就職委員会 委員
	2015年4月～現在	がん哲学学校 in 神戸 メディカルカフェを開催し、地域のがん教育を推進
	2015年6月～現在	甲南女子大学との連携教育プログラムワーキンググループ委員
	2015年6月～2017年3月	地域連携教育推進ワーキンググループ委員
	2017年4月～現在	地域連携サテライトセンター運営委員
	2018年4月～現在	学生委員会 委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
波多江 崇, 池浦 奈穂, 河原 宏, 河内 正二, 長谷川 豊, 杉山 正敏, 沼田 千賀子, 國正 淳一, 濱口 常男	論文	腎機能に着目した入院時持参薬チェックの重要性, 医薬品相互作用研究, 36 (3), 33-37(2013)

沼田千賀子	著書	薬学生のための基礎シリーズ1 ヒューマニズム薬学入門 (共著)
寺岡麗子、中山みずえ、湯谷玲子、沼田千賀子、岡本禎晃、平野剛、富田猛、平井みどり、北河修治	論文	1日1回張り替え型フェンタニルクエン酸塩貼付剤（フェントステープ）の薬物残存量に影響を与える要因，日本緩和医療薬学会，9，25-32(2016)
寺岡麗子，三宅真衣，伊藤真依，塩野朋香，沼田千賀子，中山みずえ，岡本禎晃，平井みどり，湯谷玲子，北河修治，坂根稔康	論文	フィルムドレッシング材による1日1回型フェンタニルクエン酸塩経皮吸収型製剤の半量投与，日本医療薬学会，43（12），671-679（2017）
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
被覆材を用いたフェントステープ2mg貼付剤の用量調節Ⅱ	2015年10月	第9回緩和医療薬学会（横浜）
終末期がん患者におけるコルチコステロイドの使用目的と効果・副作用の調査研究	2016年6月	第10回緩和医療薬学会（浜松）
Adhesion Levels of Fentanyl Transdermal Products	2016年6月	9th World Research Congress of the European Association for Palliative Care
がん哲学外来メディカル・カフェ参加による本学学生のがん患者に対する意識変化	2016年9月	第26回日本医療薬学会（京都）
中学1年生を対象としたがん教育による意識変化	2017年6月	第11回緩和医療薬学会（札幌）

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2002年5月～現在	日本医療薬学会会員
2005年8月～現在	(社)兵庫県薬剤師会認定 禁煙指導認定薬剤師
2006年4月～現在	兵庫県病院薬剤師会 理事
2006年4月～現在	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会員
2007年3月～現在	日本緩和医療薬学会会員
2007年4月～現在	日本ホリスティック医学協会会員
2007年11月～現在	日本メンタルヘルス協会公認 心理カウンセラー
2009年4月～2017年3月	6年制認定実務実習指導薬剤師
2009年8月～現在	日病薬認定指導薬剤師
2009年10月～2014年10月	がん薬物療法認定薬剤師
2011年4月～現在	ブザン教育協会マインドマップ®アドバイザー
2014年3月～現在	(社)がん哲学外来関西支部 学術委員長
2015年1月～現在	(財)レギュラトリーサイエンスエキスパート認定
2015年4月～2017年3月	日本緩和医療薬学会 広報副委員長
2015年7月～現在	(社)がん哲学外来 監事
2016年6月～現在	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会 理事

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 田内 義彦
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 薬学部学生への教育	2010年8月～現在	実務実習事前教育実習にて、実務家教員として調剤薬局における接遇や患者対応を中心に、臨床現場に対応できる学生の育成に従事するとともに、指導薬剤師の確保やスケジュール作成に努めている。
	2011年4月～現在	社会薬学Ⅰ及びⅡの講義において、薬剤師の歴史、社会的役割、医薬分業について講義を行い、薬剤師の義務と責任について学部1年生に認識してもらえよう、臨床経験を活かした解説を行っている。
	2011年2月～現在	「海外薬学研修」担当者として、ボストンで研修を行う学生に、より理解力を高めるために事前講義を行う。研修に同行し、アメリカにおける薬学教育と薬剤師業務を深く理解させるための補足説明や質疑応答を行い研修の成果向上に努めている。また研修終了後の報告会を催し、参加者への意識付けと後進の参加意欲の向上に努めている。
	2012年4月～現在	漢方医学の講義において、漢方薬の臨床で用いる上で注意すべき点や調剤方法をビデオ等を活用し、理解してもらい、臨床上での漢方薬の活用に関し、臨床経験に基づいた指導をしている。
	2014年4月～現在	調剤学Ⅰの講義において、薬剤師の責務に関し、倫理規定等を中心に身につけるべき倫理観や使命感について講義すると共に、医薬分業やチーム医療において薬剤師が担うべき責務に関し、実戦での経験を交え指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書	2011年3月～現在	実務実習事前教育用テキストの作成
	2015年3月～現在	「薬剤師になる人のための生命倫理と社会薬学」（法律文化社）共著

<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p>	<p>2013年2月16日 2013年4月20日 2014年2月15日 2014年9月13日 2014年10月10日 2015年2月14日 2015年2月21日 2015年10月4日 2016年1月31日 2016年2月20日</p>	<p>平成25年度登録販売者の資質向上のための外部研修（兵庫県薬剤師会） 講演 神戸薬科大学 第14回公開市民講座 講演 平成26年度登録販売者の資質向上のための外部研修（兵庫県薬剤師会） 講演 株式会社祥漢堂 社内研修講演会 講演 区民健康講座 講演（東灘区医師会） 平成27年度登録販売者の資質向上のための外部研修（兵庫県薬剤師会） 講演 株式会社祥漢堂 社内研修講演会 講演 日本東洋医学会関西支部 兵庫県部会 講演 平成27年度 兵庫県薬剤師会・兵庫県病院薬剤師会 共催講演会 講演 平成28年度登録販売者の資質向上のための外部研修（兵庫県薬剤師会） 講演</p>
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p>	<p>2009年1月～現在</p>	<p>東灘区薬剤師会理事として、学生教育部門を担当。実務実習及び早期体験実習の受入や指導薬剤師の教育に従事。</p>
<p>II 研究活動</p>		
<p>1. 著書・論文等</p>		
<p>氏名</p>	<p>種別</p>	<p>内容</p>
<p>波多江崇，斎藤三知代，石澤洋史，金子俊幸，田内義彦，濱口常男</p>	<p>論文</p>	<p>保険薬局での患者への減塩指導に対するステージ理論の考え方を応用した評価，日本地域薬局薬学会誌，2（1）：1-7，2014.</p>
<p>三木有咲，波多江 崇，長谷川由佳，辻華子，上野隼平，中川素子，米谷理沙，仲村佳奈，田村直之，園田薫，井上伸子，手塚尚子，山本章仁，佐川みはる，島川大見，竹下治範，田内義彦，濱口常男</p>	<p>論文</p>	<p>保険薬局での継続可能なブラウンバッグ運動の試み - 調査票を用いた薬剤師の介入が必要な患者の選択 - ，日本地域薬局薬学会誌，2（2）：49-61，2014.</p>
<p>三木有咲，波多江 崇，猪野 彩，井上知美，上野隼平，笠谷君代，近藤亜美，坂口知子，佐々木信子，田内義彦，竹下治範，辻華子，中川素子，野口 栄，長谷川由佳，水田恵美，矢羽野早代，山根雅子，濱口常男</p>	<p>論文</p>	<p>子育て中の母親を対象とした調査にみる薬局薬剤師の職能認知と薬局薬剤師の課題，社会薬学，34（1）：24-33，2015.</p>

波多江 崇, 長谷川由佳, 白川晶一, 内海美保, 猪野 彩, 竹下治範, 辰見明俊, 田内義彦, 濱口常男	論文	フィジカルアセスメントに対する薬局薬剤師の意識および活用状況に関する実態調査, 医薬品相互作用研究, 39 (1) : 37-43, 2015
波多江 崇, 石田好宏, 伊東真知, 大島沙紀, 藤森可純, 猪野 彩, 田内義彦, 竹下治範, 辰見昭俊, 森口紗里, 濱口常男	論文	日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩基塩およびN-アセチルグルコサミンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス, 日本地域薬局薬学会誌, 4 (1) : 16-22, 2016.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
兵庫県播磨薬剤師会および神戸薬科大学の協働による 出前講座型子育て支援活動	2013年6月30日	第17回日本地域薬局薬学会年会
English as a Preparatory Program for the Overseas Pharmaceutical Training	2013年8月30日	JACET CONVENTION 2013
高齢者向け施設職員に対する薬剤師業務への満足度調査	2014年6月29日	第18回日本地域薬局薬学会年会
海外薬学研修における学生の英語理解度の検証および 効果的な英語事前教育についての考察	2015年7月25日	日本社会薬学会第34年会
薬学における漢方の現状	2015年10月4日	日本東洋医学会関西支部 平成27年度兵庫県部会
III 学会等および社会における主な活動		
1988年4月～現在	日本薬学会 会員	
1998年4月～現在	日本医療薬学会 会員	
2003年1月～現在	日本医療薬学会 認定薬剤師	
2008年1月～現在	日本医療薬学会 指導薬剤師	
2003年4月～現在	日本薬剤師会 会員	
2013年6月～現在	日本地域薬局薬学会 会員	

田内

2013年6月～現在	日本地域薬局薬学会 編集委員
2014年6月～現在	日本地域薬局薬学会 理事

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬品物理化学研究室	職名 教授	氏名 向 高弘
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1) 本学薬学部学生への教育（講義、実習） 物理化学II 放射化学 物理化学系実習	2011年4月～現在	物理化学IIの授業についてデジタル教材化し、DVDラーニング、e-ラーニングを実施している。また添削アルバイトを活用し、問題演習の添削を実施している。 物理化学系実習では視聴覚教材を使用している。
(2) 本学薬学部学生への教育（卒業研究指導）	2011年4月～現在	生命・自然現象の解明と疾患の新たな診断法・治療法の開発を目指した研究を指導している。 指導学部学生が以下の学会賞を受賞した(2013-2017年分)。
	2013年3月30日	・日本薬学会第133年会 優秀発表賞
	2013年6月24日	・日本保健物理学会 平成24年度学生研究優秀賞
	2013年6月25日	・日本保健物理学会 第46回研究発表会 優秀ポスター賞
	2013年10月12日	・第63回日本薬学会近畿支部大会 優秀ポスター賞
	2014年7月7日	・RADIOISOTOPES誌 論文奨励賞
	2015年3月31日	・日本薬学会第135年会 優秀発表賞(2名)
	2016年3月31日	・日本薬学会第136年会 優秀発表賞
	2016年10月15日	・第66回日本薬学会近畿支部大会 優秀ポスター賞
	2017年10月14日	・第67回日本薬学会近畿支部大会 優秀ポスター賞(2名)
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育 物理系基礎創薬学特論、物理系創薬学特論	2011年4月～現在	大学院生への講義と研究指導を行っている。 指導大学院生が以下の学会賞を受賞した(2013-2017年分)。
	2013年9月12日	・第86回日本生化学会大会 鈴木紘一メモリアル賞
	2015年8月21日	・第3回日本アミロイドーシス研究会学術集会 学術奨励賞

(4) 他大学での講義	2016年6月	京都大学大学院薬学研究科の大学院生に基盤物理化学特論の講義を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書 放射化学・放射薬品学（第2版）	2011年12月30日	廣川書店(佐治英郎編集)の第2版の「第5章 原子核反応と放射性同位元素の製造」を執筆した。
新 放射化学・放射医薬品学（改訂第4版）	2016年8月15日	南江堂(佐治英郎ら編集)の改訂第4版の「第1章 原子核と放射能」を執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 国家試験対策委員会委員	2013年4月～2016年3月	物理系担当として、国家試験対策を実施した。
CBT実施委員会委員	2013年4月～現在	CBT体験受験、本試験、追再試験を実施した。
核医学専門医教育セミナー	2013年4月28日	第13回日本核医学会春季大会にて講義「放射性医薬品の基礎知識」を行った。
神戸市消防局員への放射線実習	2013年7月17日	神戸市消防局員11名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
神戸市消防局員への放射線実習	2014年7月16日	神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
神戸市消防局員への放射線実習	2015年7月13日	神戸市消防局員16名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
神戸市消防局員への放射線実習	2016年7月21日	神戸市消防局員16名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
大学院主幹	2017年4月～現在	大学院教授会、学位論文審査会の運営を担当した。
神戸市消防局員への放射線実習	2017年7月20日	神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kohei Sano, Mayumi Okada, Hayato Hisada, Kenta Shimokawa, Hideo Saji, Minoru Maeda and Takahiro Mukai	論文	<i>Biological &amp; Pharmaceutical Bulletin</i> , <b>36</b> (4), 602-608 (2013) "In vivo evaluation of a radiogallium-labeled bifunctional radiopharmaceutical, Ga-DOTA-MN2, for hypoxic tumor imaging"

Kohei Sano, Yuriko Iwamiya, Tomoaki Kurosaki, Mikako Ogawa, Yasuhiro Magata, Hitoshi Sasaki, Takashi Ohshima, Minoru Maeda and Takahiro Mukai	論文	<i>Journal of Controlled Release</i> , <b>194</b> , 310–315 (2014) "Radiolabeled $\gamma$ -polyglutamic acid complex as a nano-platform for sentinel lymph node imaging"
Junichi Sasaki, Kohei Sano, Masayori Hagimori, Mai Yoshikawa, Minoru Maeda and Takahiro Mukai	論文	<i>Bioorganic &amp; Medicinal Chemistry</i> , <b>22</b> (21), 6039–6046 (2014) "Synthesis and in vitro evaluation of radioiodinated indolequinones targeting NAD(P)H: quinone oxidoreductase 1 for internal radiation therapy"
Masayori Hagimori, Takahiro Murakami, Kinue Shimizu, Motohiro Nishida, Takashi Ohshima and Takahiro Mukai	論文	<i>Medicinal Chemical Communications</i> , <b>7</b> (5), 1003–1006 (2016) "Synthesis of radioiodinated probes to evaluate the biodistribution of a potent TRPC3 inhibitor"
Masayori Hagimori, Eri Hatabe, Kohei Sano, Hirotaka Miyazaki, Hitoshi Sasaki, Hideo Saji and Takahiro Mukai	論文	<i>Biological &amp; Pharmaceutical Bulletin</i> , <b>40</b> (3), 297–302 (2017) "An activatable fluorescent $\gamma$ -polyglutamic acid complex for sentinel lymph node imaging" <b>(Highlighted Paper Selected by Editor-in-Chief)</b> <b>(Featured Article in J-STAGE)</b>
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
生体イメージングを目指した $\gamma$ -ポリグルタミン酸被覆蛍光ナノ粒子の作製 (優秀ポスター賞受賞)	2013年10月	第63回日本薬学会近畿支部大会
NAD(P)H:quinone oxidoreductase 1(NQO1)標的放射性薬剤-安定性の向上を目指した電子供与基の導入 (優秀発表賞受賞)	2015年3月	日本薬学会第135年会
合成高分子を用いたディスク型脂質ナノ粒子の作製と物性評価 (優秀発表賞受賞)	2016年3月	日本薬学会第136年会
細胞内遊離亜鉛イオンの検出を目的とした蛍光プローブの開発 (優秀演題賞受賞)	2016年7月	第27回日本微量元素学会学術集会
がんの核医学診断を目的としたコンドロイチン硫酸被覆自己組織化ナノ粒子の開発 (優秀ポスター賞受賞)	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部大会

3. その他		
演題名	発表年・月	講演
ナノ粒子による分子イメージング	2017年2月	第14回OMIC事業推進セミナー
III 学会等および社会における主な活動		
1992年～現在	日本薬学会会員	
1997年～現在	日本薬物動態学会会員	
1997年～現在	日本核医学会会員	
2000年～現在	Society of Nuclear Medicine会員	
2005年4月～2010年3月	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 薬剤師国家試験における放射薬学関連問題に対する検討WG 九州・中国・四国支部担当委員	
2006年～現在	日本分子イメージング学会会員	
2007年～現在	日本癌学会会員	
2008年10月～2009年9月	日本核医学会 専門医・教育審査委員会 専門医試験小委員会委員	
2009年～現在	Society of Radiopharmaceutical Sciences会員	
2009年10月～2013年9月	日本核医学会 専門医・教育審査委員会委員	
2011年～現在	日本アイソトープ協会会員	
2011年5月～現在	日本薬学会近畿支部委員	
2012年～現在	日本DDS学会会員	
2013年1月～2015年3月	日本薬学会物理系薬学部会世話人	
2013年2月～現在	日本薬学会代議員	
2013年4月～現在	日本薬剤学会会員	
2014年9月～現在	日本がん分子標的治療学会会員	

向

2015年5月～現在	金属の関与する生体関連反応シンポジウム (SRM) 評議員
2016年4月～現在	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 薬剤師国家試験問題WG委員
2016年11月～現在	日本核医学会分科会 放射性薬品科学研究会 運営委員
2017年10月～現在	日本核医学会評議員

## 専任教員の教育・研究業績

所属	病態生化学研究室	職名	教授	氏名	加藤 郁夫
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1)薬学部学生に対する教育		2013年4月～現在	神戸薬科大学3年次生の「内分泌学」、「薬物治療学 I」、「薬物治療学 II」および「臨床生化学実習」を担当した。		
(2)大学院修士課程学生に対する教育		2013年4月～現在	神戸薬科大学大学院薬学研究科修士課程学生（社会人、聴講生を含む）に対して、「病態解析治療学特論」を、また博士課程学生（社会人、聴講生を含む）に対しては、「病態薬理生化学特論」を担当：プリントを配布しパワーポイントを用いて解説を行っている。また、最終時間には、共通のテーマを与えて各学生に考察・発表を行わせ討論を行った。		
2 作成した教科書、教材、参考書			「内分泌学」、「薬物治療学 I」および「薬物治療学 II」では、独自のプリントを作成、学生に配布して、基礎から臨床に至る内容を講義した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
(1) CBT対策委員会委員		2013年4月～2014年3月	CBT対策の実施。		
(2) 実務実習運営委員会委員		2013年4月～2016年3月	実務実習の円滑なる実施。		
(3) 学生就職委員会委員		2014年4月～2016年3月	学生生活や就職活動の支援。		
(4) 国家試験対策委員会委員		2014年4月～2016年3月	国家試験対策の実施。		
(5) 共同研究委員会委員		2015年4月～現在	共同研究の円滑なる実施。		
(6) 教務委員会委員		2016年4月～2018年3月	教務運営の円滑なる実施。		
(7) 研究設備等充実委員会委員		2017年4月～現在	研究設備等の整備・充実。		
(8) 入試委員会委員		2018年4月～現在	入学試験等の円滑なる実施。		

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Li YX, Cheng KC, Asakawa A, Kato I, Sato Y, Amitani H, Kawamura N, Cheng JT, Inui A.	論文	PLoS One. 8(8), e72004 (2013); Role of musclin in the pathogenesis of hypertension in rat.
S. Sugiura, M. Tazuke, S. Ueno, Y. Sugiura, I. Kato, Y. Miyahira, Y. Yamamoto, H. Sato, J. Udagawa, M. Uehara and H. Sugiura.	論文	J. Invest. Dermatol. 135(3), 776-786 (2015); Effect of prolactin-induced protein on human skin: new insight into the digestive action of this aspartic peptidase on the stratum corneum and its induction of keratinocyte proliferation.
Antushevich H, Bierła J, Pawlina B, Kapica M, Krawczyńska A, Herman AP, Kato I, Kuwahara A, Zabielski R.	論文	Peptides 65, 1-5 (2015); Apelin's effects on young rat gastrointestinal tract maturation.
H. Antushevich, M. Kapica, A. Krawczyńska, A. Herman, I. Kato, A. Kuwahara, R. Zabielski.	論文	J. Physiol. Pharmacol. 67, 403-409 (2016); The role of apelin in the modulation of gastric and pancreatic enzymes activity in adult rats.
I. Kaji, Y. Akiba, I. Kato, K. Maruta, A. Kuwahara and J. D. Kaunitz.	論文	J. Pharmacol. Exp. Ther. 361, 151-161 (2017); Xenin augments duodenal anion secretion via activation of afferent neural pathways.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
肥満モデルマウス脂肪細胞での新規エネルギー代謝関連ペプチド遺伝子 <i>Enho</i> の発現について	平成27年10月	第36回日本肥満学会； 多河典子，浅川明弘，藤波綾，乾明夫，加藤郁夫。
Secretory effects of Xenin on colonic epithelia.	平成27年3月	第120回日本解剖学会総会・全国学術集会、第92回日本生理学会大会 合同大会； A. Kuwahara, S-I Karaki, K. Shiomda, Y. Tomizawa, Y. Kuwahara and I. Kato.
Effects of Xenin on spontaneous circular muscle contractions in rat distal colon.	平成27年11月	8th Federation of the Asian and Oceanian Physiological Societies Congress； Y. Kuwahara, S-I Karaki, Y. Tomizawa, I. Kato and A. Kuwahara.

アディポネクチン受容体 1 シグナルアッセイ法の確立と新規アディポネクチン様リガンドのスクリーニング	平成28年3月	第89回日本薬理学会年会； 西村瞳，宮野加奈子，山川央，横山明信，須藤結香，白石成二，樋上賀一，長瀬隆弘，吉崎由美子，加藤郁夫，浅川明弘，乾明夫，上園保仁。
Xenin evokes anion secretion through non-cholinergic secretomotor neurons in rat ileum	平成28年3月	第95回日本生理学会大会； Y. Kuwahara, I.Kato, A. Kuwahara and Y.Marunaka.
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1984年1月～現在	日本薬学会会員	
1986年8月～現在	日本ペプチド学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 微生物化学研究室	職名 教授	氏名 小西 守周
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	微生物学ⅠⅡ 2009年～ 免疫学ⅠⅡ 2012年と2013年度 免疫学 2014年～ 生物学系Ⅲ実習 2009年～2013年度 生物学系Ⅱ実習 2014年～2016年度 微生物学実習 2016年～	学生アンケートによる授業評価は良好であるが、使用教科書に工夫が求められていたため、2014年度、2015年度と微生物学Ⅰ、Ⅱでは教科書の変更を行った。講義に関するアンケート結果に基づき、板書と教科書の併用により講義を行うようにしている。免疫学は、カリキュラム改訂にともない2014年度より講義時間が半分になったため、板書による講義ではなくスライドとプリントによる講義を行った。いずれの講義に関しても平易な表現ができる場合は、できるだけ平易な表現を用いることで、理解しやすい授業を心がけた。さらに生物系その他講義との関わりがある内容に関しては、復習を兼ねて質問を行い、学生の集中力を維持できるようにした。講義内容に関しては、最新の知見を取り入れつつ、限られた講義時間の中に多くの内容を含むように無駄の無い授業を心がけている。また、いずれの講義も対象とする学生の知識レベルを把握しながら、それに合わせた講義を行うように努めている。担当する実習は、内2016年に生物系Ⅱ実習から微生物学実習に名称が変更された。名称は変更されたものの、微生物の取り扱いに関する実習内容は大きく変更していない。実習では、できるだけ学生に考えることを推奨しており、知識や技術の習得だけでなく実験結果から導きだされる考察に関して、時間をかけて説明している。
2 作成した教科書、教材、参考書	2015年	下記の教科書の執筆に関わった。 『薬学領域の微生物学・免疫学第2版』（廣川書店）
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Nakayama Y., Masuda Y., Ohta H., Tanaka T., Washida M., Nabeshima Y., Miyake A., Itho N, Konishi M.	論文	Sci. Rep. 2017, 7:330. doi: 10.1038/s41598-017-00349-8. "Fgf21 regulates T-cell development in the neonatal and juvenile thymus."
Kuroda M., Muramatsu R., Maedera N., Hamaguchi M., Fujimura H., Yoshida M., Konishi M., Itoh N., Mochizuki H., Yamashita T.	論文	J. Clin. Invest. 2017, 127(9) 3496-3509. "Peripherally derived FGF21 promotes remyelination in the central nervous system."
Ohta H., Konishi M., Kobayashi Y., Kashio A., Mochiyama T., Matsumura S., Inoue K., Fushiki T., Nakao K., Kimura I., Itoh N.	論文	Sci. Rep. 2015, 5:10049. doi: 10.1038/srep10049. "Deletion of the Neurotrophic Factor neudesin Prevents Diet-induced Obesity by Increased Sympathetic Activity."
Masuda Y., Nawa D., Nakayama Y., Konishi M., Nanba	論文	J. Leukoc. Biol. 2015, 98(6), 1015-1025. "Soluble $\beta$ -glucan from <i>Grifola frondosa</i> induces tumor regression in synergy with TLR9 agonist via dendritic cell-mediated immunity."
Masuda Y., Ohta Y, Morita Y, Nakayama Y, Miyake A, Itoh N, Konishi M.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2015, 38(5) 687-693. "Expression of Fgf23 in activated dendritic cells and macrophages in response to immunological stimuli in mice."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
胸腺におけるFgf21の役割	2015年12月	BMB2015
神経栄養因子neudesinの遺伝子欠損マウスは高脂肪食誘導性肥満に耐性を示した	2016年8月	日本肥満学会アディポサイエンス・シンポジウム
不飽和脂肪酸負荷より誘導されるFgf21の脂質代謝調節機構の解析	2016年5月	第63回日本生化学会近畿支部例会
III 学会等および社会における主な活動		
1999年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2006年4月～現在に至る	日本肥満学会会員	
2006年4月～現在に至る	日本薬学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 医療薬学研究室	職名 教授	氏名 力武 良行
教育実践上の主な業績		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	年月日	概 要
総合薬学講座	2015年11月	国家試験対策のポイントを示しながら、分かりやすく講義した。
実務実習事前教育	2015年9月～	医師としての視点からの内容も含めた実習とした。
処方解析学・処方解析演習	2016年4月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。
薬物治療学Ⅰ	2017年4月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。
薬物治療学Ⅲ	2017年9月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。
医療コミュニケーション演習	2016年9月～	医師としての実臨床に携わる立場からの内容も含めた演習とした。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）養成プラン	2017年4月～	実習コーディネーターとして、事業遂行に参画した。
Ⅱ 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Fukuda T, Kominami K, Wang S, Togashi H, Hirata KI, Rikitake Y, Takai Y.	論文	<i>Development</i> 2014, 141(2), 399-409. "Aberrant cochlear hair cell attachments caused by Nectin-3 deficiency result in hair bundle abnormalities."

Sato J, Kinugasa M, Satomi-Kobayashi S, Hatakeyama K, Knox AJ, Asada Y, Wierman ME, Hirata K, Rikitake Y.	論文	<i>PLoS ONE</i> 2014, 9(9), e107236. "Family with sequence similarity 5, member C (FAM5C) increases leukocyte adhesion molecules in vascular endothelial cells: Implication in vascular inflammation."
Yamana S, Tokiyama A, Mizutani K, Hirata K, Takai Y, Rikitake Y.	論文	<i>PLoS ONE</i> 2015, 10(4), e0124259. "The cell adhesion molecule Necl-4/CADM4 serves as a novel regulator for contact inhibition of cell movement and proliferation."
Terao Y, Satomi-Kobayashi S, Hirata K, Rikitake Y.	論文	<i>Cardiovasc Diabetol</i> 2015, 14, 104. "Involvement of Rho-associated protein kinase (ROCK) and bone morphogenetic protein-binding endothelial cell precursor-derived regulator (BMPER) in high glucose-increased alkaline phosphatase expression and activity in human coronary artery smooth muscle cells."
Miyata M, Mandai K, Maruo T, Sato J, Shiotani H, Kaito A, Itoh Y, Wang S, Fujiwara T, Mizoguchi A, Takai Y, Rikitake Y.	論文	<i>Brain Res</i> 2016, 1649(Pt A), 90-101. "Localization of nectin-2 $\delta$ at perivascular astrocytic endfoot processes and degeneration of astrocytes and neurons in nectin-2 knockout mouse brain."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Nectin and heterotypic cell-cell adhesion	2014年5月	the 2014 Annual Meeting of Korean Society for Biochemistry and Molecular Biology (Seoul, Korea)
A Dual Role of Cell Adhesion Molecule Necl-4 in Endothelial Cells: Promotion of Migration Under Sparse Conditions and Inhibition of Proliferation Under Confluent Conditions	2014年11月	Scientific Sessions 2014, American Heart Association (Chicago, USA)
Regulation of Angiogenesis by the Immunoglobulin-like Molecule Necl-5	2015年12月	BMB2015 (第38回日本分子生物学会年会・第88回日本生化学会大会 合同大会) (神戸)

Inactivation of ROCK by Afadin through ArhGAP29 Facilitates VEGF-induced Network Formation and Migration of Cultured Vascular Endothelial Cells	2016年10月	The 19th International Vascular Biology Meeting (Boston, USA)
Localization and functions of nectin-2 in the brain	2017年7月	第40年日本神経科学会 (千葉)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1992年5月～	日本内科学会 (総合内科専門医、認定内科医)	
1992年5月～	日本循環器学会 (循環器専門医)	
2010年9月～	日本血管生物医学会 (評議員)	
2011年6月～	日本分子生物学会	
2011年7月～	日本動脈硬化学会	
2011年9月～	日本生化学会	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 衛生化学研究室	職名 教授	氏名 長谷川 潤
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
衛生薬学 I, II	2016年4月～	講義科目については、教科書の副次教材として独自のプリントを作成し、配布した。穴埋め形式にすることで重要なポイントが明確になるように工夫するとともに、章末にまとめ問題を載せることで定期試験に向けた勉強をやりやすくするとともに、国家試験の過去問（抜粋）を掲載することで、早いうちから国家試験を意識できるようにした。 授業評価は、衛生薬学IIに関して2017年度に行われ、おおむね良好な評価を得ている。 実習に関しては、講義との関連を意識させるような実習講義を行うとともに、最終日に討論とプレゼンテーションのコマを設け、思考力の育成と統合的／実質的な知識の醸成を試みている。
環境衛生学	2017年4月～	
衛生薬学実習	2016年4月～	
2 作成した教科書、教材、参考書		
メディカルサイエンス臨床化学検査学	2014年1月	近代出版
MY衛生薬学	2017年11月	株式会社テコム
授業用プリント	2016年4月～10月	衛生薬学 I, II, 環境衛生学で用いる授業の補助プリントを自作した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Akiyama M, Hasegawa H, Hongu T, Frohman MA, Harada A, Sakagami H, Kanaho Y.	論文	Nat Commun. 2014, 5, 4744 "Trans-regulation of oligodendrocyte myelination by neurons through small GTPase Arf6-regulated secretion of fibroblast growth factor-2."
Hongu T, Funakoshi Y, Fukuhara S, Suzuki T, Sakimoto S, Takakura N, Ema M, Takahashi S, Itoh S, Kato M, Hasegawa H, Mochizuki N, Kanaho Y.	論文	Nat Commun. 2015, 6, 7925 "Arf6 regulates tumour angiogenesis and growth through HGF-induced endothelial $\beta$ 1 integrin recycling."
Okada R, Yamauchi Y, Hongu T, Funakoshi Y, Ohbayashi N, Hasegawa H, Kanaho Y.	論文	Sci Rep. 2015, 5, 14919 "Activation of the Small G Protein Arf6 by Dynamin2 through Guanine Nucleotide Exchange Factors in Endocytosis."
Miura Y, Ngo Thai Bich V, Furuya M, Hasegawa H, Takahashi S, Katagiri N, Hongu T, Funakoshi Y, Ohbayashi N, Kanaho Y.	論文	Sci Rep. 2017, 7, 46649 "The small G protein Arf6 expressed in keratinocytes by HGF stimulation is a regulator for skin wound healing."
Kamao M, Hirota Y, Suhara Y, Tsugawa N, Nakagawa K, Okano T, Hasegawa H.	論文	Anal Sci. 2017, 33, 863 "Determination of Menadione by Liquid Chromatography-Tandem Mass Spectrometry Using Pseudo Multiple Reaction Monitoring."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Functional significance of blood vessel endothelial cells in peripheral nerve injury	2015年1月	2nd International symposium of neurovascular wiring
神経突起伸長における細胞膜ダイナミクスによる細胞骨格制御機構	2016年5月	第63回 日本生化学会 近畿支部例会
末梢神経損傷の損傷部位における血管内皮細胞の集積と役割	2016年9月	フォーラム2016 衛生薬学・環境トキシコロジー

フタル酸エステルを投与した妊娠マウスにおける骨形成因子の発現	2017年7月	第44回 日本毒性学会学術年会
組織の老化に伴う血管新生とその制御	2017年12月	2017年度生命科学系学会合同年次大会 (ConBio2017)
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>		
1995年10月～現在	日本薬学会会員 (2017年～ 環境・衛生部会 研究戦略委員, 財務委員)	
1995年12月～現在	日本生化学会会員 (2013年 関東支部例会 実行委員)	
2002年2月～現在	日本神経科学学会会員	
2008年2月～現在	日本細胞生物学会会員	
2008年3月～現在	日本脂質生化学会会員	
2017年1月～現在	老化促進モデルマウス (SAM) 学会会員	
2017年5月～現在	日本毒性学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属	製剤学研究室	職名	教授	氏名	坂根 稔康
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）  学部学生に対する教育	2016年4月～	3年次生「創薬物理薬剤学」、4年次生「薬剤設計学Ⅱ」、「香粧学」を担当している。教科書のポイントをまとめ、重要単語を記入できるようにしたプリント、国家試験過去問題をまとめたプリントを作製して、学生に配布している。また、授業で説明する製剤の中で、入手可能なものに関しては購入し、製剤の実物を学生に見せている。		
2	作成した教科書、教材、参考書				
	(1) 「演習で理解する生物薬剤学」（廣川書店）	2009年2月15日	第2章 薬物の分布（pp.73 - pp.96）、第5章 薬物動態の解析（pp.189 - pp.240）を執筆した。		
	(2) ベーシック薬学教科書シリーズ18 「薬物動態学」（化学同人）	2010年4月1日	第3章 薬物の分布（pp.55 - pp.80）を執筆した。		
	(3) 「物理薬剤学・製剤学－計算の解法－」（廣川書店）	2012年1月10日	共同編集するとともに、第6章 粉体の性質（pp.29 - pp.53）、第9章 製剤試験法（pp.79 - pp.87）を執筆した。		
	(4) 「製剤学（改訂第7版）」（南江堂）	2017年4月10日	第6章 薬物の生体内動態 6-2 薬物の分布（pp.290 - pp.308）を執筆した。		
	(5) 「製剤学・物理薬剤学」（廣川書店）	2017年5月10日	共同編集するとともに、第4章「粉体」（pp.53-pp.74）、第5章「界面現象と分散系」（pp.75 - pp.97）、第6章「レオロジーと高分子」（pp.99-pp.113）を執筆した。		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし				
4	その他教育活動上特記すべき事項	2008年6月～2012年8月  2016年4月～  2017年4月～	「認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ in 近畿」に、タスクフォースとして参加した。  国家試験対策委員会、CBT対策委員会委員  教務委員会委員		

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tomotaka Shingaki, Yumiko Katayama, Takashi Okauchi, Emi Hayashinaka, Masataka Yamaguchi, Nobuyoshi Tanki, Takayuki Ose, Takuya Hayashi, Yasuhiro Wada, Tomoyuki Furubayashi, Yilong Cui, Toshiyasu Sakane, and Yasuyoshi Watanabe	論文	Eur. J. Pharm. Biopharm., 2016, 99, 45-53. "Visualization of drug translocation in the nasal cavity and pharmacokinetic analysis on nasal drug absorption using positron emission tomography in the rat"
Shunsuke Kimura, Sachika Kasatani, Megumi Tanaka, Kaeko Araki, Masakazu Enomura, Kei Moriyama, Tomoyuki Furubayashi, Akiko Tanaka, Kousuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Mol. Pharm., 2016, 13, 493-499. "Importance of the direct contact of amorphous solid particles with the surface of monolayer for the transepithelial permeation of curcumin"
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Akifumi Matsushita, Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	PLoS One, 2016, 11 (9), e0159150. Nasal absorption of macromolecules from powder formulations and effects of sodium carboxymethyl cellulose on their absorption.
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Manami Tomisaki, Mayuko Kawakami, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Eur. J. Pharm. Sci., 2017, 96, 284-289. "Nasal drug absorption from powder formulations: The effect of three types of hydroxypropyl cellulose (HPC)"
Kentaro Takayama, Kenji Mori, Akiko Tanaka, Erina Nomura, Yuko Sohma, Miwa Mori, Akihiro Taguchi, Atsuhiko Taniguchi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto, Naoto Minamino, Mikiya Miyazato, Kenji Kangawa, Yoshio Hayashi	論文	J. Med. Chem., 2017, 60, 5228-5234. "Discovery of a human neuromedin U receptor 1-selective hexapeptide agonist with enhanced serum stability"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
鼻腔内投与によるCPN-116の脳内送達	2017年3月	日本薬学会第137年会
Oxytocinの鼻腔内投与:直接移行経路を介した脳内送達の可能性	2017年5月	日本薬剤学会第32年会
鼻腔内投与による脳への薬物送達II: Glymphatic Systemの影響	2017年7月	第33回日本DDS学会学術集会

薬物の鼻腔内投与:薬物の吸収と投与後の分布の特徴	2017年11月	第27回日本医療薬学会年会
Transnasal delivery of peptide agonist specific to neuromedin U receptor 2 to the brain for the treatment of obesity	2017年11月	日本薬物動態学会第32回年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1985年2月～	日本薬学会会委員（現在に至る）	
1989年4月～	日本DDS学会会員（現在に至る）	
1992年4月～	日本薬剤学会会員（現在に至る）	
2016年4月～	日本薬学会近畿支部委員	
2016年5月～	日本薬剤学会評議員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属	薬化学研究室	職名	教授	氏名	奥田 健介
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）  有機化学I 有機化学III 生薬化学 有機化学IV 合成化学I 有機化学実習 基礎薬学演習 総合薬学講座 卒業研究 総合医薬品化学特論 化学系創薬学特論		2016年4月－ 2016年4月－7月 2017年4月－ 2017年9月－ 2017年4月－ 2016年4月－ 2017年1月－ 2016年9月－ 2016年4月－ 2017年4月－ 2016年4月－		<p>有機化学・合成化学の講義においては板書を中心として講義にめりはりをつけ、適宜学生の応答により理解度を確認し、また、講義を録画して教材化している。有機化学Iにおいては教室後方からも見やすいように大型の分子模型も活用して立体化学の理解を促す工夫を行っている。</p> <p>生薬化学においては、生合成も有機化学反応で説明できることを強調して講義を行っている。こちらはパワーポイントファイルを提示しながら進めており、同様に講義を録画して教材化している。また、補助プリントを作成して活用している。</p> <p>有機化学実習においては、こまめに実習室を巡回して実技指導を行っている。また、ディスカッションを行って学生の理解を深めている。</p> <p>総合薬学講座・基礎薬学演習（強化セミナー）においては、有機化学・生薬学系の内容を分担し、ポイントを踏まえた国家試験対策・CBT対策の講義を行っている。</p> <p>卒業研究においては、学生個々の目的意識を涵養するべく、実験研究に対して責任を持って取り組めるように工夫している。また研究に関連する原著論文を選んで批判的に読解し、その内容を発表する機会を設けている。</p> <p>総合医薬品化学特論・化学系創薬学特論においては最新の創薬化学・ケミカルバイオロジー研究を踏まえた内容を盛り込んで、必ずしも本分野を専門としない学生にもこれら領域の最先端に触れられるように工夫している。</p>	
2 作成した教科書、教材、参考書  有機化学実習書		2017年4月－		2017年度より新しく生薬化学の内容を取り入れた有機化学実習書の作成を行った。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等  特になし					
4 その他教育活動上特記すべき事項  他大学学生への教育		2016年4月－6月		岐阜薬科大学にて「薬学英语II」講義および「創薬合成化学」演習を行った。	

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
T. Hirayama, K. Okuda, H. Nagasawa	論文	<i>Chem. Sci.</i> <b>4</b> (3), 1250-1256 (2013). “A Highly Selective Turn-on Fluorescent Probe for Detection of Iron(II) to Visualize Labile Iron in Living Cells”
K. Narise, K. Okuda, Y. Enomoto, T. Hirayama, H. Nagasawa	論文	<i>Drug Des. Dev. Ther.</i> <b>8</b> , 701-717 (2014). “Optimization of biguanide derivatives as selective antitumor agents blocking adaptive stress responses in the tumor microenvironment”
K. Hattori, K. Koike, K. Okuda, T. Hirayama, M. Ebihara, M. Takenaka, H. Nagasawa	論文	<i>Org. Biomol. Chem.</i> <b>14</b> (6), 2090-2111 (2016). “Solution-Phase Synthesis and Biological Evaluation of Triostin A and its Analogues”
S. Fukuda, K. Okuda, G. Kishino, S. Hoshi, I. Kawano, M. Fukuda, T. Yamashita, S. Beheregaray, M. Nagano, O. Ohneda, H. Nagasawa, T. Oshika	論文	<i>Graefes Arch. Clin. Exp. Ophthalmol.</i> <b>254</b> (12), 2373-2385 (2016). “In vivo Retinal and Choroidal Hypoxia Imaging Using a Novel Activatable Hypoxia-Selective Near-Infrared Fluorescent Probe”
M. Shimoji, H. Hara, T. Kamiya, K. Okuda, T. Adachi	論文	<i>Free Radical Res.</i> <b>51</b> (11-12), 978-985 (2017). “Hydrogen sulfide ameliorates zinc-induced cell death in neuroblastoma SH-SY5Y cells”
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
近赤外蛍光プローブからみた癌増感のターゲット～低酸素～	2013年2月	第15回癌治療増感研究シンポジウム
The development study of hypoxia responsive chemiluminescent probe for tumor hypoxia imaging	2014年4月	American Association for Cancer Research Annual Meeting 2014

Truce-Smiles転位反応を利用したヘテロ五員環縮合[2,3-c]isoquinoline類の合成	2015年3月	日本薬学会第135年会
がんのストレス応答系に関するケミカルバイオロジー研究	2016年7月	第22回癌治療増感研究会
生体内硫化水素検出を目指した <sup>19</sup> F-MRIプローブの開発	2017年2月	第19回癌治療増感研究シンポジウム
3. その他		
演題名	発表年・月	行事名
くすりを創る	2013年10月	岐阜薬科大学市民公開講座
糖尿病網膜症、黄斑変性症の治療効果を可視化する網膜低酸素イメージング	2015年5月	第12回アカデミックフォーラム
糖尿病網膜症、黄斑変性症の治療効果を可視化する網膜低酸素イメージング	2015年10月	中部公立3大学新技術説明会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1995年12月～現在	日本薬学会会員	
2009年2月～現在	日本がん分子標的治療学会会員	
2009年4月～現在	日本癌学会会員	
2011年10月～現在	日本分子イメージング学会会員	
2012年1月～現在	国際癌治療増感研究協会会員	
2016年5月～現在	日本薬学会近畿支部委員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属	医薬細胞生物学研究室	職名	教授	氏名	士反 伸和
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2009年～2016年	2年次生に対し「生薬化学実習」の授業を担当し、天然物の抽出や分析、生薬の確認試験や純度試験など、生薬に関する基礎的な事柄を実際に作業・習得させることを行った。実習での手技などについてパワーポイントで解説するとともに、実験作業について各学生に細やかに指導した。さらに、得られた結果から考察に至る部分については、教卓で各学生ごとに説明させ、適宜指導を行うことで考察力を高めるよう工夫を行った。		
		2010年～2015年	1年次生に対し「薬用資源学」を担当し、それぞれの植物の器官から得られる医薬品原料についてなど、薬用となる資源の講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや前回の復習問題で適宜復習を促すなどの工夫を行った。		
		2014年～2016年	2年次生に対し「生薬化学」を担当し、薬用植物から得られる化合物の構造、薬効、その生合成経路などの講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや前回の復習問題で適宜復習を促すなどの工夫を行った。		
		2015年～2016年	4年次生に対し「漢方医学」を担当し、漢方の基礎となる概念などについて、講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、概念のわかりにくい部分などについて教科書を中心として読み進めることで理解を促すなどの工夫を行った。		
		2017年～2018年	1年次生に対し「基礎生命科学」を担当し、細胞内小器官やアポトーシスなど細胞に関する基礎的な内容の理解と定着とを目指して講義を行っている。パワーポイントでイラストを使用するとともに、Youtubeなどのムービーも用いて視覚的にわかりやすくすることを心がけて取り組んでいる。また、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや前回の復習問題で適宜復習を促すなどの工夫を行っている。		

	2017年～2018年	3年次生に対し選択科目として「薬用資源学」を前半の6回、担当している。薬用成分の生合成について、反応機構や生合成に関係する細胞生物学など、また遺伝子組み換え植物と医薬品生産などを、パワーポイントでイラストを使用しつつ講義をしている。
	2017年～2018年	2年次生に対し「細胞生物学実習」を担当し、細胞分裂や植物組織、動物組織の観察などの修得を目指して行っている。マウスの解剖などではムービーをiPadで見せるなどして個別指導もしつつ、顕微鏡観察では重要な点を説明しつつスケッチを促すなどの工夫を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Shitan N.	総説	Biosci. Biotechnol. Biochem. 2016, 80(7):1283-93 "Secondary metabolites in plants: transport and self-tolerance mechanisms."
Shitan N., Hayashida M., Yazaki K.	論文	Plant Signal. Behav. 2015, 10(7): e1035852 "Translocation and accumulation of nicotine via distinct spatio-temporal regulation of nicotine transporters in <i>Nicotiana tabacum</i> ."
Shitan N., Minami S., Morita M., Hayashida M., Ito S., Takanashi K., Omote H., Moriyama Y., Sugiyama A., Goossens A., Moriyasu M., Yazaki K.	論文	PLoS One 2014, 9(9):e108789 "Involvement of the leaf-specific multidrug and toxic compound extrusion (MATE) transporter Nt-JAT2 in vacuolar sequestration of nicotine in <i>Nicotiana tabacum</i> ."
Shitan N., Yazaki K.	著書	Int. Rev. Cell Mol. Biol. 2013, 305, 383-433 "New insights into the transport mechanisms in plant vacuoles."

Shitan N., Sugiyama A., Yazaki K.	論文	Methods in Mol. Biol. 2013, 1011: 241-250 "Functional Analysis of Jasmonic Acid-Responsive Secondary Metabolite Transporters"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Nicotine translocation and accumulation via distinct spatio-temporal regulation of nicotine transporters in <i>Nicotiana tabacum</i>	2016年6月	17th International Workshop on Plant Membrane Biology
タバコ毛状根を用いた Nt-NCS1 輸送体の解析	2016年7月	第11回トランスポーター研究会
香気成分の生産細胞で高発現する輸送体遺伝子の時空間的な発現解析	2016年11月	第39回日本分子生物学会
ペチュニア花卉で高発現する輸送体遺伝子の組織・時期特異的な発現解析	2017年3月	日本農芸化学会2017年度大会
ジャスモン酸で誘導されるタバコNCS1型輸送体T408の機能解析	2017年3月	日本農芸化学会2017年度大会
III 学会等および社会における主な活動		
1999年4月～現在に至る	日本農芸化学会会員	
2000年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2000年4月～現在に至る	日本植物細胞生物学会会員	
2003年4月～現在に至る	日本植物生理学会会員	
2007年4月～現在に至る	トランスポーター研究会会員	
2011年4月～2016年7月	トランスポーター研究会世話人	
2016年7月～現在に至る	トランスポーター研究会顧問	

士反

2009年4月～現在に至る	日本生薬学会会員
2014年4月～現在に至る	日本生薬学会 代議員、関西支部委員
2009年4月～現在に至る	日本薬学会会員
2017年4月～現在に至る	ファルマシア 編集委員

専任教員の教育・研究業績

所属 社会科学研究室	職名 教授	氏名 松家 次朗
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2002年4月～2010年3月	大学院の前期課程において「医療倫理学特論」を担当し、生命倫理学の成立背景と考え方を論ずるとともに医療専門職の倫理についても講義を行う。（ただし開講年度は隔年である）
	2002年4月～	神戸大学医学系大学院において「保健倫理学特論」を担当し、主に医療専門職の倫理学を講義する。（オムニバス形式）
	2006年4月～	「社会薬学」Ⅰ・Ⅱでは、生命倫理学の成立背景と基本的な事例を参考に、生命倫理学の基本的な考え方を論じ、さらに、医療専門職としての薬剤師の倫理について講義を行う。（ただし、2013年4月より「社会薬学」Ⅱのみの講義。2015年度より新カリに移行し、廃止）「現代社会論」では、民主主義社会における行動規範の基本的構造を具体的問題（2015年度からは、定常化社会における社会保障の問題）を取り上げながら講義する。「医療と人間」では、終末期をめぐる種々の倫理的・社会的問題（2015年度からは、生命倫理学の砂金の主要問題）を取り上げながら講義を行う。「総合文化演習」Ⅰ（平成25年度より「総合文化演習」に名称変更）では、現代医療の問題をテーマとし、学生の資料調査、発表、及びレポート作成の指導を行う。
	2008年4月～	「生命倫理学」と「医療倫理学」において各倫理における主要問題と課題をとりあげ、ケーススタディーも援用しながら講義を行う。「総合文化演習」Ⅱ（平成26年度より廃止）では、医療における倫理的問題をテーマとして、学生の資料調査、発表、レポート作成の指導を行う。
	2010年4月～	大学院修士課程において医薬品研究開発特論共同担当し、講義を行う。
	2012年4月～	大学院薬学研究科薬学専攻博士課程において「薬学研究基盤形成」（オムニバス形式）で生命倫理について講義を行う。
	2013年4月～	「教養リテラシー」において発表、調査、レポートの書き方（2015年度からは主に本の読み方、論点のまとめ、キーワード探索等の）指導を行う。神戸大学医学部（医学科・保健学科）との合同初期体験実習の指導を行う。

	2016年4月～ 2016年9月～	社会科学研究室ゼミ(卒業研究Ⅰ:4年生担当)の指導を始める。 2年生後期科目として医療コミュニケーション演習を始める。
2 作成した教科書、教材、参考書	2015年3月	共著 『薬剤師になる人のための生命倫理と社会薬学』 (法律文化社)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2005年4月～2007年4月 2013年4月～	早期体験学習の担当委員の一人となり新入生全員を対象とした早期体験学習を指導する。 (同上)
	2015年3月17日	新カリに早期体験の一環として救命救急講習が組み込まれたため、神戸市の応急手当普及員(救急インストラクター)の認定を受ける。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
松家次朗	翻訳	ジョン・グレゴリー(1724-1773)の業績紹介(神戸薬科大学研究論集Libra第12号, 2012年3月)
松家次朗	翻訳	ジョン・グレゴリー「医師の義務と資格に関する講義(承前)」(神戸薬科大学研究論集Libra第13号, 2013年3月)

松家次朗	翻訳	ジョン・グレゴリー「医師の義務と資格に関する講義（承前）」（神戸薬科大学研究論集Libra第14号, 2014年3月）
松家次朗	翻訳	ジョン・グレゴリー「医師の義務と資格に関する講義（承前）」（神戸薬科大学研究論集Libra第15号、2015年3月）
松家次朗	翻訳	ジョン・グレゴリー「医師の義務と資格にかんする講義（承前）」（神戸薬科大学研究論集Libra第16号、2016年3月）
松家次朗	翻訳	改訳：クリスティアン・ヴォルフ「哲学一般についての予備的叙説」山本道雄著『ドイツ啓蒙の哲学者クリスティアン・ヴォルフのハレ追放顛末記—ドイツ啓蒙思想の一潮流 2—』所収。Pp. 129-255.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

専任教員の教育・研究業績

所属 薬理学研究室	職名 教授	氏名 小山 豊
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	薬理学Ⅲ 2017年～ 薬理学Ⅳ 2018年～ 総合薬学講座2017年～	
2 作成した教科書、教材、参考書	2015年 10月	『日本薬学会編 スタンダード薬学シリーズⅡ医療薬学Ⅰ - 薬の作用と体の変化および 薬理・病態・薬物治療』 東京化学同人 赤池昭紀、小澤孝一郎、小山 豊 望月眞弓、山元俊憲 編集
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Koyama Y, Kotani M, Sawamura T, Kuribayashi M, Konishi R, Michinaga S.	論文	Different actions of endothelin-1 on chemokine production in rat cultured astrocytes: reduction of CX3CL1/fractalkine and an increase in CCL2/MCP-1 and CXCL1/CINC-1. J Neuroinflammation. 2013 30:10:51

Koyama Y	論文	Signaling molecules regulating phenotypic conversions of astrocytes and glial scar formation in damaged nerve tissues. Neurochem Int. 2014 78:35-42
Koyama Y, Hayashi M, Nagae R, Tokuyama S, Konishi T.	論文	Endothelin-1 increases the expression of VEGF-R1/Flt-1 receptors in rat cultured astrocytes through ETB receptors. J Neurochem. 2014 130:759-769
Koyama Y	論文	Functional alterations of astrocytes in mental disorders: pharmacological significance as a drug target. Front Cell Neurosci. 2015 9:261
Koyama Y, Ukita A, Abe K, Iwamae K, Tokuyama S, Tanaka K, Kotake Y.	著書	Dexamethasone downregulates endothelin receptors and reduces endothelin-induced production of matrix metalloproteinases in cultured rat astrocytes Mol Pharmacol. 2017, 92, 57-66.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Regulation of animal behaviors through brain reward	2015年 9月27日	The 5th International Symposium of Itch
The effects of selective endothelin ET <sub>B</sub> receptor antagonists on cold injury-induced down-regulation of aquaporin 4 expressions in mice	2015年 7月28日	第38回日本神経科学大会
Effects of endothelin ET <sub>B</sub> receptor antagonist on acceleration of cerebral microvascular permeability and brain edema formation after fluid percussion injury in mice	2016年 7月20日	第39回日本神経科学大会
Amelioration of BBB disruption and brain edema by BQ788, an endothelin ETB receptor antagonist through attenuation of matrix metalloproteinase-9 in cerebral contusion mice	2017年 7月20日	第40回日本神経科学大会

脳挫傷後の脳血管障害に対するエンドセリンETB受容体拮抗薬の効果	2017年 9月15日	第19回応用薬理シンポジウム
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010年12月～2014年12月	公益社団法人 日本薬学会代議員	
2011年 ～現在	Neurochemistry International誌 Editorial Advisory Board	
2011年4月～2017年3月	厚生労働省 薬剤師国家試験委員	
2012年 ～現在	The Journal of Pharmacological Sciences誌 Advisory Board	
2012年3月～2018年2月	厚生労働省 医道審議会薬剤師分科会 薬剤師国家試験K・V部会委員	
2012年4月～2014年3月	公益社団法人 日本薬理学会企画教育委員	
2014年1月～現在	文部科学省 科学技術動向研究センター専門調査員	
2016年1月～2017年12月	公益社団法人 薬学教育協議会 薬理学関連教科担当教員会議 副委員長	
2015年10月～現在	公益社団法人 日本薬理学会代議員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬学臨床教育・研究センター	職名	教授	氏名	國正 淳一
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2018年4月～現在に至る	4年次生の地域医療・プライマリケア論の講義を担当している。毎回配布するプリント並びにパワーポイントを利用している。		
		2017年7月～現在に至る	5年次の卒業研究Ⅰ並びに6年次の卒業研究Ⅱを担当している。現場の病院（7施設）あるいは薬局（1施設）において臨床研究を実施している。臨床研究施設での実際の課題を研究することにより、問題発見能力及びその解決能力の醸成を図っている。加えて、社会人としてのコミュニケーション能力の養成も併せて育成できる。		
		2017年9月～現在に至る	6年次生の処方解析学、処方解析演習を担当している。処方解析学では配布するプリント並びにパワーポイントを利用している。処方解析演習では演習問題を配布し、その解説はパワーポイントを利用している。		
2 作成した教科書、教材、参考書 薬学生のための病院・薬局実務実習テキスト2018年版		2018年3月	実務実習用のテキストに関して作成・編集に加わった。 （じほう, 日本病院薬剤師会近畿ブロック・日本薬剤師会近畿ブロック 編）		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項		2017年7月～現在に至る	神戸薬科大学 生涯研修企画・運営委員会委員		

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
波多江 崇, 池浦 奈穂, 河原 宏之, 河内 正二, 長谷川 豊, 杉山 正敏, 沼田 千賀子, 國正 淳一, 濱口 常男	論文	腎機能に着目した入院時持参薬チェックの重要性, 医薬品相互作用研究 2013, 36, 33-37
浦野公彦, 巽 康彰, 恒川由巳, 長田孝司, 上井優一, 服部重衣, 曾田 翠, 堺 陽子, 岩本喜久生, 國正淳一, 脇屋義文	論文	薬局早期体験学習における一般用医薬品についての愛知学院大学薬学生への認識・理解度調査, 愛知学院大学薬学会誌, 2013, 6, 7-14
中村一仁, 浦野公彦, 田中万祐子, 西口加那子, 堺 陽子, 片野貴大, 鍋倉智裕, 山村恵子, 國正淳一	論文	保険薬局における残薬の確認に伴う疑義照会が及ぼす調剤医療費削減効果の検討, 医療薬学, 2014, 40, 522-529
堺陽子, 岩尾岳洋, 國正淳一, 松永民秀	論文	薬物動態および毒性試験への応用を目指したヒトiPS細胞由来肝細胞の作製とその培養技術, 愛知学院大学薬学会誌, 2015, 8, 7-14
國正淳一, 堺陽子, 浦野公彦	論文	国内における危険ドラッグの実態と対策, 愛知学院大学薬学会誌, 2016, 9, 8-14
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
DPP-4阻害薬の他剤併用投与の有効性	2013年5月	第56回日本糖尿病学会年次学術集会
頭頸部癌放射線療法による口腔粘膜炎の疼痛管理の現状と課題	2013年6月	第18回日本緩和医療学会学術大会
薬局における残薬確認に伴う処方薬削除による医療経済効果	2013年11月	日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会
手術室における医薬品の安全管理向上を目指した取り組み	2014年2月	第35回日本病院薬剤師会近畿学術大会

有毒植物の誤食による食中毒の調査研究	2016年3月	日本薬学会第136年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003年4月～現在に至る	日本医療薬学会認定指導薬剤師	
2005年4月～現在に至る	日本医療薬学会評議員	
2014年6月～現在に至る	日本中毒学会評議員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 英語第二研究室	職名 教授	氏名 玉巻 欣子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2014年4月～現在に至る	【1年次必修英語】「英語I・III」において、大学生として知っておくべき英文法を基礎から学ばせる授業を実施している。パワーポイントのスライド等を利用して、単調にならず分かりやすい文法授業を心がけている。
	2012年4月～現在に至る	【1年次必修】教養教員として、1年次必修科目「早期体験学習」を担当している。病院・薬局訪問のサポート、第三施設訪問の付添、発表会のサポート、また実習先病院・薬局への挨拶など、円滑な授業運営を目指している。「救命救急インストラクター」として学生の救急救命講習の指導も行っている。
	2012年4月～現在に至る	【2年次必修英語】「英語V・VI」において、薬学生が最低限知っておくべき医学英語語彙・表現の習得、医療系英文読解・速読力の向上を目指す授業を実施している。2013年度からは、eラーニングを取り入れた授業を開始し、教員による対面授業とeラーニングを融合した授業を展開している。
	2013年4月～現在に至る	【2年次選択英語】「実用英語」において、eラーニング自己学習と対面授業によるTOEIC対策に重点を置いた授業を実施している。
	2015年4月～現在に至る	【2年次必修】「総合文化演習」において、「患者体験記・闘病記から医療を考える」というテーマでゼミを展開している。ナラティブ・メディスンの枠組みに基づいて闘病記を読み、テーマを設定し、SGD、プレゼンテーション、レポートを通して様々な角度から医療についての考察を深めさせている。
	2012年4月～現在に至る	【4年次選択英語】「実用薬学英語」において、外国人患者に対する英語での服薬指導に必要な医学・薬学英語の語彙・表現を学ぶ授業を実施している。学生同士のロールプレイ、英文での家庭医学書読解、薬剤師会話のリスニングなど、多角的な方法で医療系英語力増強に努めている。2012年度学生評価によるベストティーチャー賞受賞。
	2013年4月～現在に至る	【海外薬学研修】当該研修の事前講義と現地での指導を担当している。リスニング力、英語でのプレゼンテーション指導に重点を置いている。研修先のポストンでは、マサチューセッツ薬科健康科学大学との交流、学生を伴って市内の薬局でのフィールドワークなど、積極的な研修活動をサポートしている。

2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2013年8月31日	‘English as a Preparatory Program for the Overseas Pharmaceutical Training’ 「海外薬学研修事前教育としての英語教育の取り組み」 Kinko Tamamaki, Yoshihiko Tauchi. The JACET 52nd (2013) International Convention. Global Poster Session. (Kyoto) Proceeding p. 23
4 その他教育活動上特記すべき事項  平成24年度私立大学教育研究活性化設備整備事業申請担当  平成24年度ベストティーチャー賞受賞  神戸大学医学部医学科での医学英語教育  日本薬学会平成27年度文部科学省委託事業「薬学教育の改善・充実に係る調査研究」	2012年  2013年6月  1999年4月～2018年3月  2016年1月～2018年3月	「e-ラーニング教材利用による薬学生の総合的英語力向上」というプロジェクトにて文科省への申請を行い、採択された。PC51台が導入され、e-ラーニング教材ソフトであるALC NetAcademy2 「医学英語<基礎>コース」、「スーパースタンダードコース」等を導入し、英語授業で活用している。  2012年度「実用薬学英語I」学生評価によるベストティーチャー賞受賞。  神戸大学医学部医学科5年次「臨床英語」担当（非常勤講師）  「海外の薬学教育との比較調査委員会 改訂コアカリ英訳作業部会」メンバーとして改訂コアカリ英訳を行っている。文部科学省 平成28年度 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業「薬学教育の改善・充実に係る調査研究」報告書（平成29年3月） p. 156
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tamamaki, K. & Nishio, H.	論文	‘Study Abroad Experience Is Related to Japanese Doctors’ Behavior to See Foreign Patients’ (2013) Kobe Journal of Medical Sciences. Vol. 59. No. 1. pp. E10-E16. (査読有)
玉巻欣子、安達和美、宮本純子	著書	『英語で学ぶ災害看護—基礎とコミュニケーション』（2014）（看護の科学社）

金子利雄、河野円、Eric M. Skier、竹内典子、 <u>玉巻欣子</u> (50音順33名中23番目) 堀内正子、中村明弘、他	著書	日本薬学会編『実用薬学英語』 Unit 14 (pp.91-95). (2015) (東京化学同人)
入交重雄、川越栄子、相見良成、濱西和子、長谷川仁志、岩田淳、守屋利佳、平野美津子、黒住和彦、Baoul Breugelmanns、高田淳、 <u>玉巻欣子</u> 、福沢嘉孝、森茂、五十嵐裕章、服部しのぶ、陰山幾男、James Hobbs、平孝臣、鈴木光代、一杉正仁、安藤千春、塩田充、芦田ルリ (掲載順)	著書	日本医学英語教育学会編『医学・医療系学生のための総合医学英語テキストStep 1』 6. Chest Pain (pp.60-71). (2016) (メジカルビュー社)
平井清子、金子利雄、堀内正子 (責任者)、齋藤弘明、板垣正、河野享子、金澤洋子、 <u>玉巻欣子</u> (編著者)、田沢恭子、山田恵、井原久美子、和治元義博. 日本薬学英語研究会編	著書	『薬学生のための英語1』Unit 8, Unit 14 (pp. 55-62, 102-109). Listening & Speaking. Unit 1~16. (2017) (成美堂)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
<u>玉巻欣子</u> 、田内義彦「海外薬学研修における学生の英語理解度の検証および効果的な英語事前教育についての考察」	平成27年7月25日	日本社会薬学会第34年会 (熊本) 『社会薬学 (Jpn. j. Soc. Pharm.)』 Vol. 34 Suppl. 2015 p. 46 (ポスター発表)
<u>玉巻欣子</u> 「外国人模擬患者を利用した薬学英語教育—4年次「実用医療英語」実践報告—」	平成28年8月27-28日	第1回日本薬学教育学会 (京都) 講演要旨集 p. 138 (ポスター発表)
<u>玉巻欣子</u> 、田内義彦「発信型海外薬学研修に向けた取り組み—米国の薬科大学での英語プレゼンテーション実践報告—」	平成28年9月10-11日	日本社会薬学会第35年会 (札幌) 『社会薬学 (Jpn. j. Soc. Pharm.)』 Vol. 35 Suppl. 2016 p. 45 (ポスター発表)
<u>玉巻欣子</u> 「ナラティブ・メディスンを意識した薬学部教養教育の試み—神戸薬科大学2年次『総合文化演習』玉巻ゼミでの取り組み—」	平成29年9月2-3日	第2回日本薬学教育学会 (名古屋) 講演要旨集p. 123. (ポスター発表)
<u>玉巻欣子</u> 、田内義彦「米国の薬局でのフィールドワーク実践報告—アクティブラーニングを取り入れた海外薬学研修に向けた試み—」	平成29年9月23-24日	日本社会薬学会第36年会 (大阪) 『社会薬学 (Jpn. j. Soc. Pharm.)』 Vol. 36. Suppl. 2017. p. 51.
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2008年4月～2012年3月	大学英語教育学会研究企画委員	
2010年4月～2015年3月	大学英語教育学会社員	
2015年4月～現在	大学英語教育学会会員	
2014年7月～2018年6月	日本医学英語教育学会評議員、医学英語検定試験制度委員	

玉巻

2009年7月～2014年6月 2018年7月～現在	日本医学英語教育学会理事、医学英語検定試験制度委員
2014年7月～現在	外国語教育メディア学会会員
2015年6月～現在	日本社会薬学会会員
2016年～現在	日本薬学会会員

## 専任教員の教育・研究業績

所属	薬品化学研究室	職名	教授	氏名	上田 昌史
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
薬学入門、有機化学系の実習、演習および講義を担当した		2001年4月～現在		3年次配当(2013年度から2年次)の有機化学系II実習では、医薬品を実際に合成する実習を実施した。また、未知検体の構造決定を化学反応や確認試験を利用して行った。医薬品の性質を深く理解させるために、スモールグループディスカッションを通して使える有機化学について教育した。	
		2009年9月～2015年12月		2年次配当の有機化学演習では、復習を兼ねた小テストを毎回行い、学生の理解度の状況を把握した上で、問題解答解説を行った。	
		2010年10月～2013年2月		神戸大学医学部保健学科の学生に、基礎有機化学の講義を行った。高校で学んだ有機化学の内容を大学レベルの視点から解説し、有機化合物の性質に影響を及ぼす官能基について概説した。さらに、習熟度を考慮しながら、医薬品の開発過程や最新の医薬品事情について説明した。	
		2012年4月～2014年7月		1年次の薬学入門の講義を担当した。解熱鎮痛薬を化学系薬学の観点から講義し、有機化学が生命現象の理解に重要であることを概説した。また、スモールグループディスカッションを実施し、薬学関連科目の密なつながりについて説いた。	
		2012年9月～現在		3年次配当の医薬品化学(旧有機化学VI)の講義では、医薬品構造と薬理作用の関連性について解説し、薬学における有機化学の重要性について説いた。また、高学年になっても忘れない覚える有機化学ではなく考える有機化学を徹底して説いた。	
		2014年9月～2016年11月		2年次配当の有機化学IVの講義では、カルボン酸誘導体の反応について講義した。医薬品に多く含まれるカルボニル基の反応を、生体内での反応や医薬品の反応を例に挙げて、学生が興味をもつように心掛けた。	
		2017年4月～現在		2年次配当の有機化学IIIの講義では、アルケンおよびアルキンの性質や反応について講義した。有機化学の基礎であるので、反応機構を丁寧に何度も繰り返し説明し、学生全体の理解度の向上を目指した。	
2 作成した教科書、教材、参考書		2001年（毎年改訂）		有機化学系II実習書	
		2015年		スタンダード薬学シリーズII 3 日本薬学会編 化学系薬学 I. 化学物質の性質と反応、東京化学同人、SB023	

	2015年	化学構造と薬理作用 医薬品を化学的に読む 廣川書店、中枢神経興奮薬、脳循環・代謝改善薬
	2017年	パートナー医薬品化学 南江堂、第3章 複素環化合物、複素環関連医薬品
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Ueda M., Ito Y., Ichii Y., Kakiuchi M., Shono H. Miyata O.	論文	Chem. Eur. J., 2014, 20(22), 6763-6770. "Direct Synthesis of Benzofuro[2,3-b]pyrroles through a Radical Addition/[3,3]-Sigmatropic Rearrangement/Cyclization/Lactamization Cascade"
Ueda M., Doi N., Miyagawa H., Sugita S., Takeda N., Shinada T., Miyata O.	論文	Chem. Commun., 2015, 51(20), 4204-4207. "Reaction of Cyclopropenes with a Trichloromethyl Radical: Unprecedented Ring-opening Reaction of Cyclopropanes with Migration"
Doi N., Takeda N., Miyata O., Ueda M.	論文	J. Org. Chem., 2016, 81 (17), 7855-7861. "Regiodivergent Ring-Opening Reaction of Trichloromethylcyclopropane Carboxylates"
Ito Y., Ueda M., Takeda N., Miyata O.	論文	Chem. Eur. J., 2016, 22(8), 2616 - 2619. "tert-Butyl Iodide-Mediated Reductive Fischer Indolization of Conjugated Hydrazones"
Sugita S., Takeda N., Tohnai N., Miyata M., Miyata O. Ueda M.	論文	Angew. Chem. Int. Ed., 2017, 56(9), 2469-2472. "Gold-Catalyzed [3+2]/Retro-[3+2]/[3+2] Cycloaddition Cascade Reaction of N-Alkoxyazomethine Ylides"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
$\beta$ -イミノエステルの触媒的C(sp <sup>3</sup> )-H酸化反応の開発	平成29年・3月	日本薬学会第137年会

Aminocarbonylation of homoallylic amine with chloroform	平成29年・7月	18th Tetrahedron Symposium Asia Edition
共役ヒドラゾンの求核性を利用したインドール類およびピラゾール類の合成	平成29年・10月	第47回複素環化学討論会
トリクロロメチルシクロプロパンの還元的ラジカル開環反応によるPermethrinの合成	平成29年・10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会
金触媒による閉環-転位反応を鍵反応とした生物活性を有するイソキサゾール誘導体の合成	平成29年・10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
連続的結合形成反応の開発と複素環構築への展開	平成26年・3月	日本薬学会第134年会
共役イミン類への付加反応を基盤とするドミノ型反応の開発	平成26年・8月	第34回有機合成若手セミナー
共役イミン類のドミノ型反応	平成27年・2月	立命館大学創薬基盤化学研究 第10回若手セミナー
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1999年～現在に至る	日本薬学会会員	
2000年～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2011年～現在に至る	近畿化学協会会員	
2011年2月～現在に至る	有機合成化学協会関西支部幹事	
2009年4月～2011年3月	日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員	
2011年5月～2016年5月	次世代を担う有機化学シンポジウム世話人	
2017年5月～現在に至る	日本薬学会広報委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬剤学研究室	職名 教授	氏名 大河原 賢一
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1) 学部学生への教育	2018年4月～	毎回の講義内容に関連する演習問題を宿題として課し、翌週の講義の冒頭で解答・解説を行うことで、復習を促すと共に、遅刻の抑止力となることを期待している。
(2) 大学院生への教育	2018年10月～（予定）	最新のトピックを取り入れると共に、自分自身の研究生活で経験した様々な事柄（主に失敗談）を披露することで、受講生のモチベーション上昇に繋がればと期待している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
『実験薬理学：創薬研究のストラテジー』（金芳堂，2011）	2011年	DDS技術による消化管吸収の制御（pp. 129-136）を執筆
『非経口投与製剤の開発と応用』（シーエムシー出版，2013）	2013年	ナノDDS製剤を用いたがん治療の最適化（pp. 184-189）を執筆
『創薬科学-ゲノム創薬が拓く未来-』（裳華房，2017）	2017年	薬物の送達システム（pp. 242-268）を執筆
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	該当なし	
4 その他教育活動上特記すべき事項	該当なし	

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
K. Ogawara, S. Abe, K. Un, Y. Yoshizawa, T. Kimura and K. Higaki	原著論文	J. Pharm. Sci., 103, 2014, 2464-2469. "Determinants for in vivo antitumor effect of angiogenesis inhibitor SU5416 formulated in PEGylated emulsion"
T. Araki#, K. Ogawara#, H. Suzuki, R. Kawai, T. Watanabe, T. Ono and K. Higaki (#, equally contributed)	原著論文	J. Controlled Release, 2015, 200, 106-114. "Augmented EPR effect by photo-triggered tumor vascular treatment improved therapeutic efficacy of liposomal paclitaxel in mice bearing tumors with low permeable vasculature"
K. Ogawara, T. Shiraishi, T. Araki, T. Watanabe, T. Ono and K. Higaki	原著論文	Eur. J. Pharm. Sci., 2015, 82, 154-160. "Efficient anti-tumor effect of photodynamic treatment with polymeric nanoparticles composed of polyethylene glycol and polylactic acid block copolymer encapsulating hydrophobic porphyrin derivative"
T. Shehata, T. Kimura, K. Higaki and K. Ogawara	原著論文	Int. J. Pharm., 2016, 512, 322-328. "In-vivo disposition characteristics of PEG niosome and its interaction with serum proteins"
K. Ogawara, Y. Fukuoka, Y. Yoshizawa, T. Kimura, and K. Higaki	原著論文	J. Pharm. Sci., 2017, 106, 1143-1148. "Development of safe and potent O/W emulsion of paclitaxel to treat peritoneal dissemination"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
(シンポジウム) 腫瘍組織の特性に基づいたナノDDS製剤によるがん治療の最適化	2012年11月	創剤フォーラム第18回若手研究会 (徳島大学、徳島)
(シンポジウム) 耐性克服を目指した新戦略：敵の弱点を突く	2013年3月	第133回日本薬学会 (パシフィコ横浜、横浜)
Augmented EPR effect by photo-triggered tumor vascular treatment improved therapeutic efficacy of liposomal paclitaxel in mice bearing tumors with low permeable vasculature	2014年11月	第8回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム (熊本大学薬学部、熊本)

(シンポジウム) Optimization of cancer treatment with nano-DDS formulations: Knowledge of tumor vasculatures to make things work	2016年9月	International seminar on pharmacology and clinical pharmacy: Current trend of molecular pharmacology in the drug development and clinical use (Hotel Harris, Bandung, Indonesia)
光増感剤内封ポリマーナノ粒子を用いた光線力学療法における抗腫瘍効果決定因子の解析	2017年7月	第33回日本DDS学会 (みやこめっせ、京都)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2011年4月～	日本薬剤学会 FG世話人 (2015年より副リーダー)	
2011年4月～	日本薬剤学会 代議員	
2014年4月～	日本DDS学会 評議員	
2017年4月～	日本薬物動態学会 評議員	
2018年4月～	日本薬学会 近畿支部委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 田中 研治
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年4月～現在に至る	[英語]「読解力」、「語彙力」、「文法力」を養成するため、総合教材を使用し、英文読解のスキルだけでなく、発信（表現）用スキルにも重点を置いた授業を行っている。薬学英语への橋渡しの授業を常に心がけ、理系英語の教材を使用し、特に語彙力をつけるための小テストなどを併用している。一部の授業では、習熟度別クラスを設け、特に英文法力の強化を行っている（1年生のクラス）。 [総合文化演習]現代社会における日本人の非言語コミュニケーション行動とヨーロッパ文化論の諸問題を扱う演習を行っている。 学生中心の文献調査、要約、発表、及びレポート作成を指導している。
	2012年4月～現在に至る	[英語の歴史]1500年以上にわたる英語の歴史のうち、特に印欧語、ゲルマン語を経た古英語への分岐、中英語への発達を講義している。
	2009年4月～現在に至る	[早期体験学習]1年次生のための医療施設訪問学習。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2009年4月～2014年12月	クラス担任及び学年主任として、種々の関係業務に従事。
	2009年4月～2012年3月	図書館長の業務に従事。

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
田中 研治	注解	Libra 2010, 10, 75-91. 「ラトヴィア語童話注解：Balta Pasaka～イマ ンツ・ジェドアニスの作品Visadas Pasakasより抜粋～」
田中 研治	翻訳	関西学院史紀要2011, 17, 7-50. 「ヤーニス・オアゾアリンシュ～日本（神 戸、1920～21年）でラトヴィアの外交官と領事を務めた人物（シルヴィ ア・クリジェヴィツァ著）」
田中 研治	研究ノート	Libra 2015, 15, 1-40. 「英語史関連文献等における「ウェッドモア協 定」の扱いについて」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
III 学会等および社会における主な活動		
1989年7月～現在に至る	バルト学研究促進学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 岡野 登志夫
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 学部 衛生薬学系講義・実習	1976年4月～2015年3月	神戸薬科大学の学部学生に衛生薬学Ⅰ、衛生薬学Ⅱ、衛生薬学Ⅲ、衛生薬学Ⅳ、環境衛生学、臨床栄養学、総合薬学講座の講義と衛生薬学系実習の指導を行った。上記のうち、総合薬学講座を除く講義の授業評価を実施し、概ね良好な評価を受けた。衛生化学研究室ゼミの指導を行った。
	2015年4月～現在に至る	神戸薬科大学の学部学生に環境衛生学、臨床栄養学、総合文化演習（2017年4月より）、総合薬学講座の講義と衛生薬学系実習（2015年度のみ）の指導を行っている。担当教科及び実習内容に理解の不十分な学生に対して、随時質問に答えるようにしている。
大学院 薬学研究科特論講義・研究指導	1976年4月～2015年3月	神戸薬科大学大学院薬学研究科修士課程学生に対する特論講義と研究指導を行った。また、博士後期課程学生に対する特論講義と研究指導を行った。
2 他の研究科の大学院生への教育	2000年 2000年 2001年, 2005年 2004年 2005年 2007年 2015年	東京工業大学大学院工学研究科の学生に対して講義を行った。 金沢大学大学院自然科学研究科の学生に対して講義を行った。 大阪大学大学院医学研究科の学生に対して講義を行った。 新潟大学大学院医歯学総合研究科の学生に対して講義を行った。 熊本大学大学院薬学研究科の学生に対して講義を行った。 大阪薬科大学大学院薬学研究科の学生に対して講義を行った。 北里大学薬学部大学院薬学研究科の学生に対して講義を行った。
3 作成した教科書、教材、参考書		
(1) 生物系薬学(Ⅱ.生命をミクロに理解する)(初版)	2005年	ビタミンについて記載し、衛生薬学講義用教材として用いている。(東京化学同人、編集:日本薬学会、分担執筆:岡野登志夫、他)
生物系薬学(Ⅱ.生命をミクロに理解する)(第2版)	2010年	
生物系薬学(Ⅰ.生命現象の基礎)(第1版)	2015年	ビタミンについて記載。(東京化学同人、編集:日本薬学会、分担執筆:岡野登志夫、他)

(2) 健康と環境(初版) 健康と環境(第2版)	2006年 2012年	栄養と健康・栄養素について記載し、衛生薬学系講義用教材として用いている。(東京化学同人、編集:日本薬学会、分担執筆:岡野登志夫、他)
(3) 衛生薬学サブノート	2009年	衛生薬学について記載し、衛生薬学講義用教材として用いている。(廣川書店、編集:岡野登志夫、他、分担執筆:岡野登志夫、他)
(4) 公衆栄養学	2010年	日本人の食事摂取基準(2005年版)について記載し、衛生薬学系講義用教材として用いている。(南江堂、編集:田中平三、伊藤ちぐさ、佐々木敏、分担執筆:岡野登志夫、他)
(5) 衛生試験法・注解2010	2010年	ビタミンについて記載および編集し、衛生薬学系講義用教材として用いている。(金原出版、編集:日本薬学会、分担執筆:岡野登志夫、他)
(6) New衛生薬学(初版) New衛生薬学(第2版) New衛生薬学(第3版)	2009年 2010年 2011年	衛生薬学について記載し、衛生薬学講義用教材として用いている。(廣川書店、編集:岡野登志夫、他、分担執筆:岡野登志夫、他)
(7) 生物系薬学 IV 演習編	2011年	ビタミンについて記載し、生物系薬学講義用教材として用いている。(東京化学同人、編集:日本薬学会、分担執筆:岡野登志夫、他)
(8) 臨床栄養学II 各論	2015年	臨床栄養学について記載し、臨床栄養学講義用教材として用いている。(中山書店、編集:本田佳子、分担執筆:岡野登志夫、他)
4 その他教育活動上特記すべき事項	2004年4月～2006年3月 2008年4月～2010年3月 2005年5月～2009年3月 2010年4月～2012年3月	就職部長 薬剤師国家試験対策委員長 入試部長
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Hirota Y, Tsugawa N, Nakagawa K, Suhara Y, Tanaka K, Uchino Y, Takeuchi A, Sawada N, Kamao M, Wada A, Okitsu T, Okano T	論文	J Biol Chem 2013; <b>288</b> (46): 33071-33080. "Menadione (vitamin K <sub>3</sub> ) is a catabolic product of oral phylloquinone (vitamin K <sub>1</sub> ) in the intestine and a circulating precursor of tissue menaquinone-4 (vitamin K <sub>2</sub> ) in rats. "

Nakagawa K, Sawada N, Hirota Y, Uchino Y, Suhara Y, Hasegawa T, Amizuka N, Okamoto T, Tsugawa N, Kamao M, Funahashi N, Okano T	論文	PLoS One 2014; <b>9</b> : e104078. "Vitamin K <sub>2</sub> biosynthetic enzyme, UBIAD1 is essential for embryonic development of mice."
Hirota Y, Nakagawa K, Sawada N, Okuda N, Suhara Y, Uchino Y, Kimoto T, Funahashi N, Kamao M, Tsugawa N, Okano T	論文	PLoS One 2015; <b>10</b> : e0125737. "Functional characterization of the vitamin K <sub>2</sub> biosynthetic enzyme UBIAD1."
Funahashi N, Hirota Y, Nakagawa K, Sawada N, Watanabe M, Suhara Y, Okano T	論文	Biochem Biophys Res Commun 2015; <b>460</b> : 238-244. "YY1 positively regulates human UBIAD1 expression"
Shearer M, Okano T	論文	Annu Rev Nutr 2018; <b>38</b> : 18.1-18.25. "Key pathways and regulators of vitamin K function and intermediary metabolism"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ビタミンDの新たな分子標的と作用メカニズム	2015年・3月	第95回日本栄養食糧学会関東支部大会
ビタミンK研究の新展開ー栄養素からホルモンへのパラダイムシフト	2016年・3月	日本薬学会第136年会
III 学会等および社会における主な活動		
1976年～現在	日本薬学会会員	
1976年～2014年	日本栄養・食糧学会会員	
1976年～2014年	日本生化学会会員	
2003年～現在	日本骨代謝学会評議員	
2003年～2014年	国際骨代謝学会 (IBMS) 会員	
2003年～2014年	米国骨代謝学会 (ASBMR) 会員	

2003年～2014年	日本癌学会会員
2006年～2014年	脂溶性ビタミン総合研究委員会副委員長
2007年～現在	日本ビタミン学会理事
2007年～現在	日本骨粗鬆症学会評議員
2010年～2014年	神戸薬科大学理事

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 棚橋 孝雄
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
有機化学の講義	1984年4月～2016年3月	理解を助けるために補助プリントを作成、また視覚教材を利用している。
有機化学実習	1984年4月～2007年3月、 2013年4月～2016年3月	ディスカッションを通して、理解の深化をはかる。
薬学入門の講義	2007年4月～2013年3月	視覚教材を利用している。
有機化学演習の講義	2013年4月～現在に至る	毎回提出させた問題プリントを添削し、返却している。
総合文化演習	2016年4月～現在に至る	ディスカッションを通して、思考力、表現力の深化をはかる。
「くすりと科学」の講義	2016年4月～現在に至る	プリント、視覚教材を利用している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特になし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
卒後研修講座で講演	2007年4月～2013年3月	神戸薬科大学同窓会の各地区支部が主催する公開卒後研修講座で、6年制薬学教育に関する講演を行った。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
教務部長	2002年4月～2006年3月	教務部長として、教育内容と教育システムの改善と新カリキュラムの編成を行った。
薬学教育者・薬剤師へのFD活動	2002年4月～2013年3月	タスクフォースやチーフタスクフォースとして。薬剤師のためのワークショップin近畿に協力。
副学長	2005年10月～2007年3月	副学長として学長を補佐し、大学の運営に協力。
学長	2007年4月～2013年3月	学長として、教育全般を統括し、他大学や各種機関との教育連携を推進。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Duy Hoang Le, Yukiko Takenaka, Nobuo Hamada, Takao Tanahashi	論文	Phytochemistry 2013, 91, 242-248. "Eremophilane-type Sesquiterpenes from the Cultured Lichen Mycobionts of <i>Sarcographa tricosia</i> "
Katsumi Nishimura, Shinji Horii, Takao Tanahashi, Yumi Sugimoto, Jun Yamada	論文	Chem. Pharm. Bull. 2013, 61 (1), 59-68. "Synthesis and Pharmacological Activity of Alkaloids from Embryo of Lotus, <i>Nelumbo nucifera</i> "
Duy Hoang Le, Yukiko Takenaka, Nobuo Hamada, Yoshiyuki Mizushina, Takao Tanahashi	論文	J. Nat. Prod. 2014, 77(6), 1404-1412. "Polyketides from the Cultured Lichen Mycobiont of a Vietnamese <i>Pyrenula</i> sp."
Duy Hoang Le, Katsumi Nishimura, Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Takao Tanahashi	論文	J. Nat. Prod. 2016, 79 (7), 1798-1807. "Polyprenylated Benzoylphloroglucinols with DNA Polymerase Inhibitory Activity from the Fruits of <i>Garcinia schomburgkiana</i> "
棚橋孝雄	総説	薬学雑誌 2017, 137(12), 1443-1482. 「薬用植物および単離培養地衣菌の二次代謝物の多様性」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Diversity of Metabolites from Cultured Mycobionts of Vietnamese Lichens	2013年8月	52nd Annual Meeting of the Phytochemical Society of North America
<i>Garcinia mangostana</i> の葉部と果皮のキサントン類のDNAポリメラーゼ阻害活性	2015年3月	日本薬学会第135年会
Sesquiterpene derivatives from cultured lichen mycobionts of <i>Diorygma</i> sp.	2015年8月	63rd International Congress and Annual Meeting of the Society for Medicinal Plant and Natural Product Research
DNA polymerases inhibitory polyprenylated benzoylphloroglucinols from the fruits of <i>Garcinia schomburgkiana</i>	2015年8月	Inaugural Sumposium of the Phytochemical Society of Asia (ISPSA) 2015 Tokushima

<i>Garcinia oblongifolia</i> の樹皮に含まれるキサントン類について	2015年9月	日本生薬学会第62回年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2001年4月～2016年3月	日本薬学会近畿支部委員	
2002年2月～2005年12月	日本地衣学会評議員	
2002年2月～2013年12月	日本地衣学会誌編集委員	
2007年6月～2013年5月	兵庫県公衆衛生協会理事	
2007年10月～2013年3月	日本私立大学協会本部理事	
2008年6月～2010年5月 2010年11月～2013年3月	日本私立薬科大学協会理事	
2012年6月～2013年3月	全国薬科大学長・薬学部長会議常任理事	
2012年6月～2014年5月	一般社団法人薬学教育協議会理事	
2014年1月～2018年12月	日本地衣学会会長	
2016年4月～現在にいたる	日本薬学会近畿支部顧問	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 宮田 興子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2006年～	医薬品の化学的性質を理解するための講義である有機化学，医薬品化学，医薬品合成化学，医薬品開発を担当。更に，医薬品合成，医薬品化学の分野に相当する有機化学系 II実習を担当。いずれの場合もオフィスアワーを設けて質問に対応。講義は，板書することを心がけている。さらに，有機化学が苦手な学生には，土曜日を使用して，積極的に補講を行っている。卒業研究の学生には，実験と共に学術論文の読み方，問題解決能力の養成を心がけて指導。更に論文作成の指導。さらに、臨床の現場で役に立つ有機化学を教示するために薬理学、処方解析学とのコラボレーションも常に考えながら教えている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
(1) パートナー医薬品化学（改訂第3版）	2017年2月	官能基別にまとめた医薬品の化学的性質と生物活性との関連を記載した教科書
(2) 化学構造と薬理作用（第2版）	2015/4/1	6年制薬学教育に必須である医薬品を化学で理解するために作成された教科書 化学系薬学で学ぶ基本的な有機化合物の性質と反応を記載した教科書
(3) スタンダード薬学シリーズ 化学系薬学I化学物質の性質と反応	2015/2/20	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2016/8/1 2015/11 2016/3	薬学統合学習の構築～臨床薬学－薬理学－有機化学の橋渡し教育を目指して～ 第1回薬学教育学会 京都 第25回日本医療薬学会のシンポジウム「基礎と臨床の橋渡し教育を考える」 日本薬学会第136年会 一般シンポジウムS15「今何を考えるべきか－基礎がにつながる薬剤師を育てるために」
4 その他教育活動上特記すべき事項		2017年に十数名の先生方と臨床医薬品化学研究会を立ち上げ、現在、臨床から基礎薬学までをつなぐ新しい教育システムの考案中である。

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Masafumi Ueda, Yuta Ito, Yuki Ichii, Maiko Kakiuchi, Hiroko Shono, and Okiko Miyata	論文	Chem. Eur. J., 2014, 20, 6763-6770. "Direct Synthesis of Benzofuro[2,3-b]pyrroles through a Radical Addition/[3,3]-Sigmatropic Rearrangement/Cyclization/Lactamization Cascade"
Masafumi Ueda, Yuta Ito, Yuki Ichii, Maiko Kakiuchi, Hiroko Shono, and Okiko Miyata	論文	Chem. Eur. J. 2014, 20, 6763-6770. "Direct Synthesis of Benzofuro[2,3-b]pyrroles through a Radical Addition/[3,3]-Sigmatropic Rearrangement/Cyclization/Lactamization Cascade"
Yuta Ito, Masafumi Ueda, Norihiko Takeda and Okiko Miyata	論文	Chem. Eur. J. 2016, 22, 2616-2619. "tert-Butyl Iodide-Mediated Reductive Fischer Indolization of Conjugated Hydrazones"
Shoichi Sugita, Norihiko Takeda, Norimitsu Tohnai, Mikiji Miyata, Okiko Miyata and Masafumi Ueda	論文	Angew. Chem. Int. Ed. 2017, 56, 2469-2472. "Gold-Catalyzed [3+2]/Retro-[3+2]/[3+2] Cycloaddition Cascade Reaction of N-Alkoxyazomethine Ylides"
Takeda, Norihiko; Futaki, Erika; Kobori, Yukiko; Ueda, Masafumi; Miyata, Okiko	論文	Angew. Chem. Int. Ed. 2017, 56, 16342-163462. "Nucleophilic Arylation of N,O-Ketene Acetals with Triaryl Aluminum Reagents: Access to $\alpha$ -Aryl Amides through an Umpolung Process"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
N-アルコキシアゾメチンイリドを経由する新規連続的環化付加反応の開発	2015. 5. 22	第13回次世代を担う有機化学シンポジウム
Synthesis of Benzofuro[2,3-b]pyrroles through Domino Type of Reaction involving Radical Addition Reaction	2015. 7. 18	7th Pacific Symposium on Radical Chemistry (PSRC-7)

N-ベンゾイルオキシエナミドを基質とした新規連続反応の開発	2015. 8. 1.	第35回有機合成若手セミナー
カルボニル基の・位での立体選択的極性転換反応の開発	2015. 10. 26	第41回反応と合成の進歩シンポジウム
ホモアリルアミン類とクロロホルムによる新規ラクタム化反応の開発	2015. 11. 19	第45回複素環化学討論会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2015年～	神戸薬科大学理事	
2010年4月～2013年3月	日本薬学会化学系薬学部会役員	
2009年4月～	薬剤師国家試験出題基準改定部会委員	
2010年4月～	有機合成化学協会評議委員	
2011年4月～2012年3月	近畿化学協会事業企画委員	
2012年1月～2013年12月	有機合成化学協会関西支部副支部長	
2014年1月～2015年3月	長井記念薬学研究奨励支援準備委員会委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 岩川 精吾
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 実習テキスト（実務実習事前教育、薬剤学・製剤学実習）の改訂 大学院特論プリントの毎年の改訂	2009年～2017年 2006年～2017年	実務実習事前教育（-13年まで）、薬剤学・製剤学実習（14年-）実習書の毎年改訂 最新の学術知見を盛り込んで講義用プリントを毎年更新
2 作成した教科書、教材、参考書 『わかりやすい調剤学第6版』（廣川書店、2010） 『わかりやすい生物薬剤学第5版』（廣川書店、2014）	2010年3月 2014年3月	薬学教育コアカリキュラムでの調剤学での重要事項を踏まえた改訂と編集 薬物の腎排泄について執筆
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 日本薬学会第131年会シンポジウム「新しい大学教育と大学連携」で発表	2011年3月	「医薬共同による創薬・育薬を担う医療人の育成を通じた私立・国立大学間の連携」について発表
4 その他教育活動上特記すべき事項 神戸薬科大学教務部長 神戸薬科大学大学院薬学研究科主幹 神戸薬科大学副学長 兵庫県立大学看護学部で臨床薬理学を講義	2006年4月～2010年3月 2010年4月～2013年3月 2013年4月～2017年12月 2006年～2017年	看護学専攻学生に薬物治療について安全性面を含めて講義
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Ueda K., Masuda A., Fukuda M., Tanaka S., Hosokawa M., Iwakawa S.	論文	Drug Metab. Pharmacokinet. 2017, 32(6), 301-310, "Monophosphorylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells"

Tatsumi A., Okada M., Inagaki Y., Inoue S., Hamaguchi T., Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2016, 39 (8) ,1364-9, "Differences in esterase activity to aspirin and p-nitrophenyl acetate among human serum albumin preparations
Tanaka S., Hosokawa .M, Yonezawa T., Hayashi Y., Ueda K., Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2015, 38 (3) , 435-440 . "Induction of epithelial-mesenchymal transition and down-regulation of miR-200c and miR-141 in oxaliplatin-resistant colorectal cancer cells."
Hosokawa M., Saito M., Nakano A., Iwashita S., Ishizuka A., Ueda K., Iwakawa S.	論文	Oncol. Lett.2015 10(2), 761-7 Acquired resistance to decitabine and cross-resistance to gemcitabine during the long-term treatment of human colorectal cancer HCT116 cells with decitabine."
Ueda K., Hosokawa M., Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull.2015,38(8), 1113-97 Cellular uptake of decitabine by equilibrative nucleoside transporters in HCT116 cells"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ヒト大腸がん細胞株HCT116細胞における浸潤能及び遊走能に及ぼすニトロベンジルチオイノシンの影響	2017年3月	日本薬学会第137年会
ヒト大腸がん細胞株SW620細胞におけるオキサリプラチン耐性とシスプラチン耐性	2016年3月	日本薬学会第136年会
シタグリプチン服用開始2型糖尿病患者におけるスタチンの併用とBMIに着目したHbA1cとLDL-Cコレステロールの変動比較	2015年11月	第25回日本医療薬学会年会
大腸がん細胞におけるデシタビンの効果へのdeoxycytidine kinaseの関与	2015年11月	第25回日本医療薬学会年会
ヒト大腸がん細胞株HCT116細胞におけるデオキシチジン取り込みに対するデオキシチジンキナーゼノックダウンの影響	2015年11月	第25回日本医療薬学会年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

岩川

2000年4月～2017年12月	日本薬学会近畿支部委員
2005年4月～2013年4月	日本医療薬学会評議員
2005年4月～2017年12月	日本医療薬学会委嘱指導薬剤師
2007年4月～2013年12月	日本高等教育評価機構評価員
2014年4月～2015年12月	日本薬学会近畿支部幹事

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 畑 公也
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ドイツ語	1981年～現在に至る	「読む」「書く」「聞く」「話す」の総合的なドイツ語運用能力の養成を目指す。授業中にできるだけ多くの口頭、筆記による練習を行うことによって技能の定着を図っている。
教養リテラシー	2006年～現在に至る	総合文化演習のプレトレーニングとして、日本語の読み書き能力の涵養とスモールグループによるディスカッションとプレゼンテーションの訓練を行っている。
総合文化演習	1995年～現在に至る	「現代の音楽」と「ドイツの歴史と文化」をテーマに小グループによる演習を行っている。テーマ設定や発表、レポート作成に際し、学生の自発性を尊重し、積極性を引き出すことを目指している。
講義「現代の音楽」	2006年～現在に至る	アンケートやインタビューによって学生の意見を聞き、その結果を授業に反映させることにより、双方向的な教育を行っている。
早期体験学習	2008年～現在に至る	新入生の薬学学習に対するモチベーションを高めるための実習を指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書		

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		小山淳子、中平典子、畑公也、児玉典子「神戸薬科大学図書館における学習支援に向けた活動について」(Libra 2015, 15, 95-107)
4 その他教育活動上特記すべき事項	2012年～2016年	図書館長の業務に従事。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
畑 公也	研究ノート	Libra 2016, 16, 1-17(3月発行) 「『環境音楽』、または『環境』と『音楽』」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
III 学会等および社会における主な活動		
1978年～現在に至る	日本独文学会会員	
1978年～現在に至る	阪神ドイツ文学会会員	
1978年～現在に至る	大阪大学ドイツ文学会会員	
1978年～現在に至る	オーストリア文学会会員	
2007年～現在に至る	日本ポピュラー音楽学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬学基礎教育センター	職名	教授	氏名	小山 淳子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） （1）薬学部学生への教育		2009年～2011年後期 2016年～現在に至る 2013年4月～現在に至る 2010年4月～現在に至る	総合文化演習 I 或いはIIはSGD方式で、基礎教科の大切さや薬学への個々の興味を持たせるように指導している。 1年生前期の基礎化学により、高校化学の復習と大学化学への橋渡しの学習を行う。一部TBLを取り入れ、グループ学習による知識の均等化を図る。 薬学基礎教育センターにおいて、分析化学、有機化学などの基礎をしっかりと身につけるための講義を希望学生に行う。また、留年生の学習、生活指導を行う。 薬学基礎教育センターにおいて、WebやDVDを用いたデジタルラーニング制度を企画し、実施する。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		2013年3月 2013年5月 2013年9月 2014年3月 2014年10月 2016年9月 2017年9月	日本薬学会第133年会 発表 関西地区FD連絡協議会第6回総会，FD活動報告会2013 発表 日本生化学会内86回大会 発表 日本薬学会第134年会 発表 日本生化学会内87回大会 発表 第1回日本薬学教育学会 発表 第2回日本薬学教育学会 発表		
4 その他教育活動上特記すべき事項		2011年3月 2014年11月	メンタルケアカウンセラー®修了資格認定 薬学教育懇話会による教育ピアレビューを神戸薬科大学において開催した。		

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Koyama J., Sinoki M., Moriyasu M., Kamigauchi M., Kodama N.	研究ノート	Libra 2013, 13, 27-46. "Recent Trial of Learning Ability Improvement in the Basic Education Center for Pharmacy at Kobe Pharmaceutical University"
Koyama J., Kodama N.	論文	YAKUGAKU ZAASHI 2014, 12, 1357-1366. "Trial and evaluation of a remedial education program in Kobe Pharmaceutical University"
Kodama N., Koyama J.	研究ノート	Libra 2015, 15, 41-48. "神戸薬科大学初年次教育における生命科学の理解を目指した知識構成型ジグソー法の試み"
Kodama N., Tanaka M., Tatumi T., Mizutani N., Hujinami A., Hosokawa M., Koyama J., Hogue W.R., Takeuti A.	論文	Libra 2016, 16, 1-15. "チーム基盤学習 (TBL) 法と学生の学習動機に及ぼす影響"
Kodama N., Koyama J.	総説	YAKUGAKUZASSHI, 2016, 136 (3), 381-388. "初年次教育における統合教科の学習を促進するファクターとしてのジグソー法の試み"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
神戸薬科大学におけるプレースメントテストと1年次教科との関連性について	2015年3月	日本薬学会 (第135年会) ポスター発表
神戸薬科大学におけるIR(Institutional Research)について	2016年3月	日本薬学会 (第136年会) ポスター発表
神戸薬科大学における入口 (入学後) と中間点 (CBT) における学生の成績の相関性について	2016年9月	日本薬学教育学会 (第1年会) ポスター発表

神戸薬科大学におけるプレースメントテストの評価とその適用について	2017年9月	日本薬学教育学会（第2年会）ポスター発表
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2006年1月～現在に至る	Editorial Advisory Board of "Recent Patents on Anti-Infective Drug Discovery"	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 四方田 千佳子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 薬学部学生への教育	2017年4月～現在	神戸薬科大学薬学部6年制の1年生の社会薬学Ⅰ及び4年生の医薬品開発Ⅰの講義を分担して行っている。ジェネリック医薬品，バイオシミラー，薬価，オーファンドラッグ，市販後対策，国際ハーモナイゼーション，レギュラトリーサイエンスの概念等について講義を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2011年 2017年4月～現在	薬学が語るDDSの世界，京都広川書店，共同執筆 各講義のプレゼン資料を作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2017年4月 2018年2月 2018年7月	神戸薬科大学エクステンションセンターリカレントセミナーにおいてジェネリック医薬品の品質確保に関する研修講演を行った。 大学同窓会京都支部研修会 で後発医薬品に関する情報と品質について講演 大学同窓会東海支部研修会 で後発医薬品に関する情報と品質について講演
4 その他教育活動上特記すべき事項		前職にて，分析化学会主催の分析実技講習会講師，JAICA食品分析コース講師として教育活動に参加
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
H. Shibata, H. Saito, C. Yomota, T. Kawanishi, H. Okuda,	論文	Chem Pharm Bull. 60, 1105-11(2012), Alterations in the Detergent-Induced Membrane Permeability and Solubilization of Saturated Phosphatidylcholine/Cholesterol Liposomes:

Izutsu K, Yomota C, Okuda H, Kawanishi T, Yamaki T, Ohdate R, Yu Z, Yonemochi E	論文	J. Pharm. Sci., 103, 2347-55(2014), Effects of formulation and process factors on the crystal structure of Freeze-dried Myo-Inositol.
Shibata H, Izutsu K, Yomota C, Okuda H, Goda H	論文	Drug Dev. Ind. Pharm., 41, 1276-86(2015), Investigation of factors affecting in vitro doxorubicin release from PEGylated liposomal doxorubicin for the development of in vitro release testing conditions.
四方田千佳子	総説	製剤設計と添加物の影響, 薬局, 63, 3511(2012)
四方田千佳子	総説	ジェネリック医薬品品質情報検討会ではどのような検証を行ってきたか, 月刊薬事, 55, 37 (2013)
四方田千佳子	総説	バイオ医薬品とバイオシミラーについて, 日本薬剤師会雑誌, 70, 265 (2018)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
逆相HPLC-蒸発光散乱検出器を用いたリポソーム製剤中の脂質成分定量法の検討	2012年3月	日本薬学会第132年会
吸入ステロイド製剤の溶出性に与える乳糖の影響の評価.	2013年3月	日本薬学会第133年会
Characterization of multi-solute frozen solutions for the development of protein and DDS formulations.	2012年8月	International Congress of Thermal Analysis and Calorimetry
マイクロスフェア型徐放性製剤の薬物放出性評価: フロースルーセル法溶出試験装置の利用.	2013年5月	日本薬剤学会第28年会
Effect of lactose hydrate on the dissolution and permeation profiles of inhaled steroids.	2013年11月	AAPS Annual Meeting 2013
III 学会等および社会における主な活動		
2010月4月 ~	日本ジェネリック医薬品・バイオシミラー学会理事	
2008年5月~	日本薬剤学会評議員	
1976年3月~	日本薬学会会員	
1978年4月~	日本分析化学会会員	

四方田

1978年5月～	日本薬剤学会会員
2005年5月～	厚生労働省後発医薬品の生物学的同等性ガイドライン検討会委員
2010年1月～	薬事・食品衛生審議会臨時委員
2015年9月～	内閣府食品安全委員会研究・調査企画事後評価部会委員

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 韓 秀 妃
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		学外臨床教育・研究にかかわっている。 実務実習事前教育にかかわっている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2013年7月28日 2013年9月22日～23日 2014年6月8日 2015年6月7日 2015年7月5日 2015年11月8日 2016年4月24日 2017年11月12日	1. let's try! 簡易懸濁法、2. 添付文書・I F 活用していますか？（神戸薬科大学エクステンション事業-南九州） Facebookを利用した健康食品指導薬剤師のスキルアップ研修（第46回日本薬剤師会学術大会） 添付文書・I F 活用していますか？（神戸薬科大学エクステンション事業-福岡） let's try! 簡易懸濁法（神戸薬科大学エクステンション事業-山口） 添付文書・I F 活用していますか？（神戸薬科大学エクステンション事業-関東） 添付文書を活用しよう（神戸薬科大学エクステンション事業-山口） let's try! 簡易懸濁法（神戸薬科大学エクステンション事業） 添付文書を活用しよう（神戸薬科大学エクステンション事業-兵庫）
4 その他教育活動上特記すべき事項 エクステンションセンター生涯教育企画委員	2007年～現在	リカレントセミナー、卒後研修講座の企画、運営にかかわっている。
II 研究活動		

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
韓 秀妃	著書	薬効別 服薬指導マニュアル 第9版 じほう 2018 執筆
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1999年4月～2006年3月	和歌山県病院薬剤師会理事	
2001年～2003年	和歌山労災病院看護専門学校非常勤講師	
2004年4月～2006年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2006年～2010年	関西労災病院看護専門学校非常勤講師	
2006年4月～2010年3月	兵庫県病院薬剤師会常任理事	
2010年4月～2011年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2000年1月～現在	日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師	
2007年4月～2010年9月	阪神がん治療専門薬剤研究会幹事	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 渡 雅克
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2013年4月～現在	4年次の実務実習事前学習，処方解析1を分担 5年次の学外実務実習 6年次の総合薬学講座，処方解析学，処方解析演習を分担
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項 京都薬科大学 非常勤講師 宝塚市立看護学校 非常勤講師 神戸学院大学 非常勤講師 武庫川女子大学 非常勤講師 神戸薬科大学 非常勤講師 兵庫医療大学 教育教授	1999～2007 2001～2008 2006～2008 2006～2008 2006～2008 2010～2012	大学院病院薬学特論 薬理学 病院実習導入講義 病院実習導入講義 病院実習導入講義 実務実習事前学習講義
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
新康憲，吉岡睦展，石津智司，杉生雅和，春藤和代，折田環， 小林敦子，渡雅克，竹中雅彦	論文	トラフ値 $15\mu\text{g}/\text{mL}$ 以上を目標としたテイコプラニン負荷投与量設計 に関する検討，TDM研究，29(3)：192-192，2012.

吉岡睦展, 山本哲久, 新康憲, 山田美和, 石津智司, 杉生雅和, 折田環, 小林敦子, 春藤和代, 渡雅克, 竹中雅彦	論文	Tsukamurella手指骨髄炎にバンコマイシンおよびリネゾリドを使用した一症例, TDM研究, 29(3): 185-185, 2012.
新康憲, 吉岡睦展, 小林敦子, 石津智司, 杉生雅和, 折田環, 春藤和代, 渡雅克, 飯田健二郎, 竹中雅彦	論文	一側腎摘後のMRSAカテーテル関連血流感染に対しバンコマイシンおよびリネゾリドを投与した一症例, TDM研究, 29(1): 21-24, 2012.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1976年4月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
1990年4月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2004年4月～2008年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2008年4月～2012年3月	兵庫県病院薬剤師会常任理事	
2008年4月～2010年3月	日本病院薬剤師会 編集委員会 地域編集委員	
2008年4月～2012年3月	日本病院薬剤師会 予備代議員	
2008年4月～2010年3月	兵庫県病院薬剤師会西宮支部長	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 奥川 斉
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		4年次の実務実習事前学習 漢方医学 5年次の学外実務実習 6年次の総合薬学講座
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2016年6月27日 2016年10月23日 2017年1月24日 2017年2月12日 2017年7月2日 2017年7月23日	自然と漢方 健康サポートセミナー（神戸）講演 漢方 up to date 東洋医学会関西支部例会（神戸）講演 漢方の不思議であたりまえのこと シニアカレッジ（西宮）講演 高齢者と漢方 神戸薬科大学同窓会京都支部講演会（京都）講演 がん医療と漢方 神戸薬科大学同窓会徳島支部講演会（徳島）講演 高齢者と漢方 京都女子薬剤師会講演会（京都）講演
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年4月～現在	エクステンションセンター 健康食品講座企画委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
柴田直子, 渡邊小百合, 濱谷安希子, 塚本早百合, 伊勢原祐子, 菰淵利香, 藤原正幸, 佐野隆太, 柴田直子, 村田和歌子, 大前隆広, 川高菜緒, 見上千昭, 西尾 孝, 奥川 斉	学会報告	医師主導臨床試験非盲験薬剤師として関わった事例, 第51回日本癌治療学会, 京都, 2013.

大谷祐子, 見上千昭, 西尾 孝, 奥川 齊, 根來俊一	学会報告	デノスマブ皮下注の使用状況調査, 第51回日本癌治療学会, 京都, 2013.
濱谷安希子, 渡邊小百合, 塚本早百合, 伊勢原祐子, 菰渕利香, 藤原正幸, 佐野隆太, 柴田直子, 村田和歌子, 大前隆広, 川高菜緒, 見上千昭, 西尾 孝, 奥川 齊	学会報告	注射薬鑑査支援システム (C-WAVE) の導入について 第35回日本病院薬剤師会近畿学術大会, 京都, 2014.
伊勢原祐子, 渡邊小百合, 塚本早百合, 濱谷安希子, 菰渕利香, 藤原正幸, 佐野隆太, 柴田直子, 大前隆広, 川高菜緒, 大谷祐子, 見上千昭, 西尾 孝, 奥川 齊	学会報告	脂肪乳剤の適正使用に関する啓発について, 第35回日本病院薬剤師会近畿学術大会, 京都, 2014.
大谷祐子, 塚本早百合, 安達嘉織, 見上千昭, 吉田直恵, 奥川 齊	学会報告	メサドン塩酸塩錠の適正使用状況調査, 第8回日本緩和医療薬学会, 愛媛, 2014.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1973年4月～現在	日本東洋医学会会員	
1980年4月～現在	日本薬学会会員	
1973年5月～現在	日本生薬学会会員	
2011年3月～現在	日本臨床腫瘍学会会員	

河本

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 臨床特命教授	氏名 河本 由紀子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年4月～  2018年4月～	実務実習事前学習 学外実務実習 総合薬学講座 早期体験学習
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
河本由紀子	論文	低血糖リスクを軽減する新たなインスリンアナログ製剤に期待, 薬局 64(8):2232-2232, 2013

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
兵庫県下の病院における院内感染対策としてのワクチン接種に関する実態調査	2015. 1	第36回日本病院薬剤師会近畿学術大会
兵庫県中小病診対策部活動報告	2016. 1	第37回日本病院薬剤師会近畿学術大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2000年4月～2016年3月	日本病院薬剤師会代議員	
2004年4月～2016年3月	兵庫県薬剤師会病診支部長	
2004年4月～現在に至る	兵庫県病院薬剤師会副会長	
2012年4月～2016年3月	日本病院薬剤師会療養病床委員会委員	
2012年4月～現在に至る	兵庫県薬事協会理事	
2014年4月～現在に至る	日本病院薬剤師会近畿ブロック中小病診委員会委員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 地域連携サテライトセンター	職名 教授	氏名 高尾 宜久
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2018年4月～現在 2018年4月～現在	4年生を対象に「地域医療・プライマリケア論」を担当している。 4年生を対象に「在宅医療」を担当している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2007年6月～2013年7月	認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップタスクフォース
	2017年4月～現在に至る	エクステンションセンター事業統括委員会委員
	2017年4月～2018年3月	生涯教育企画委員会委員
	2017年4月～現在に至る	生涯研修事業委員会委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
高尾宜久、麻生美樹、増本憲生、南幸栄、岩川精吾	論文	日本医療マネジメント学会雑誌第17巻第3号，2016. 「転倒転落危険度の新たな予測指標としての夜間12時間活動量と日中歩数との比率検討」

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
転倒・転落防止のための新しい指標を求めて－入院患者の24時間身体活動量測定と転倒要因の解析－	2014. 3	日本医療マネジメント学会 第8回兵庫支部学術集会
神戸薬科大学地域連携サテライトセンターにおける健康サポートセミナー	2018. 3	日本薬学会 第138年会
III 学会等および社会における主な活動		
1995年6月～2012年3月	日本病院薬剤師会 生涯教育認定薬剤師	
1999年4月～現在に至る	日本薬剤師研修センター 認定薬剤師	
1999年5月～現在に至る	神戸市応急手当普及員（救急インストラクター）	
2003年12月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2004年5月～2006年5月	兵庫県病院薬剤師会評議員	
2004年12月～現在に至る	日本医療マネジメント学会会員	
2007年10月～2010年5月	兵庫県病院薬剤師会伊丹支部支部長	
2008年11月～2016年3月	日本病院薬剤師会 実務実習指導薬剤師認定	
2008年4月～2010年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2010年3月～現在に至る	日本薬剤師研修センター 認定実務実習指導薬剤師	
2010年4月～2016年3月	兵庫県病院薬剤師会常任理事	
2010年4月～2016年3月	兵庫県薬剤師会 医療保険部委員	
2010年4月～2017年3月	武庫川女子大学非常勤講師	
2012年3月～現在に至る	スポーツファーマシスト	

2014年4月～現在に至る	一般社団法人薬学教育評価機構 評価実施員
2015年12月～現在に至る	日本アンガーマネジメントファシリテーター
2016年2月～現在に至る	日本老年薬学会会員
2016年2月～現在に至る	キャラバンメイト・認知症サポーター
2016年3月～現在に至る	ユマニチュード入門研修終了者
2017年4月～現在に至る	東灘区薬剤師会理事
2017年2月～現在に至る	日本アンガーマネジメントキッズトレーナー
2017年9月～現在に至る	禁煙指導認定薬剤師
2018年5月～現在に至る	神戸市薬剤師会理事
2018年5月～現在に至る	コグニサイズ指導者

専任教員の教育・研究業績

所属	薬学臨床教育・研究センター	職名	教授	氏名	福井 英二
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年4月～現在に至る	4年次生の実務実習事前教育 5年次生の学外実務実習 6年次生の総合薬学講座		
		2018年4月～現在に至る	1年次生の早期体験学習		
2	作成した教科書、教材、参考書				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4	その他教育活動上特記すべき事項				
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
薬剤師が入院前常用薬の有害事象を検討する重要性	2016年・5月	第19回日本臨床救急医学会総会・学術集会2016
認知症・せん妄サポートチームの現状と薬剤師の取り組みについて	2016年・9月	第26回日本医療薬学会年会
Successful management of treatment-related toxicity with Daikenchuto during the anti-cancer treatment in a patient with Down syndrome	2016年・12月	第58回日本小児血液・がん学会学術集会
ニボルマブの糖尿病・内分泌系疾患検査状況に関する単施設調査(後視的コホート研究)	2016年・12月	第57回日本肺癌学会学術集会
直接作用型経口抗凝固薬(DOAC)の適正使用状況調査	2017年・3月	第81回日本循環器学会学術集会
III 学会等および社会における主な活動		
1981年5月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
1998年9月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2000年2月～現在に至る	日本静脈経腸栄養学会会員	
2003年3月～現在に至る	日本クリニカルパス学会会員	
2004年11月～現在に至る	日本臨床腫瘍学会会員	
2005年8月～現在に至る	日本癌治療学会会員	
2012年4月～2016年5月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2013年5月～現在に至る	日本薬剤師会会員	
2014年4月～2016年3月	日本病院薬剤師近畿ブロック薬事制度委員会委員	
2014年6月～2016年5月	兵庫県薬剤師会薬局経営部委員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属	薬学臨床教育・研究センター	職名	教授	氏名	山本 克己
I 教育活動					
教育実践上の主な業績			年月日		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2017年4月～現在 2017年4月～現在	4年次の実務実習事前教育を分担 6年次の総合薬学講座を分担	
2	作成した教科書、教材、参考書 薬学生のための病院・薬局実務実習テキスト 2010年版～2017年版（各年）（じほう）		2010年～2017年	「計数・計量調剤」の項を執筆	
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等 平成25年度武庫川女子大学薬学部第3期長期実務実習 総括発表会 講師		2013年8月	演題名：「大阪警察病院における病院実務実習」	
4	その他教育活動上特記すべき事項 大阪薬科大学 特任・招聘教授 近畿大学薬学部 実務実習評価連絡会議 委員		2009年4月～2015年3月 2010年4月～2016年3月	病院実習導入講義（注射剤混合調製） 病院・薬局実務実習指導者による評価の妥当性の検証	
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
村田久枝，寺本有里，川下麻記子，大井美和，北口剛吉， 笹平絵美，益田敦美，佐竹佑美，榎本幸子，駒井千穂， 有働みどり，小牟田 清，山本克己		論文		抗癌剤治療に伴う悪心・嘔吐に対する評価方法の検討，癌と化学療法，41（3），341-345（2014）査読あり	

村田久枝, 寺本有里, 秋田幸子, 北口剛吉, 大井美和, 藤尾みどり, 山本克己	論文	新しい注射剤調剤・供給システムにおける調剤済み注射剤の返却減少 効果の評価, 大阪警察病院医学雑誌, 32, 26-34 (2016) 査読あり
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
シスプラチンshort hydrationレジメン導入について	2014年11月	第55回日本肺癌学会学術集会
病棟薬剤業務の取り組みと効果 ～配薬準備業務への関わり～	2015年1月	第36回日本病院薬剤師会 近畿学術大会
タブレット端末を活用した薬剤業務支援システムの構築	2015年11月	第25回日本医療薬学会年会
“間違わせない仕組み”の導入による医療安全強化と業務の 効率化	2017年2月	第38回日本病院薬剤師会 近畿学術大会
高齢者の睡眠導入剤投与における転倒・転落事故対策とクリ ニカルパス活用効果	2017年3月	第10回日本医療マネジメント学会 大阪支部学術集会
3. その他		
講演名	発表年・月	会の名称
医薬品マネジメントと組織間連携	2015年7月	滋慶医療科学大学 医療マネジメントセミナー
ポリファーマシーへの取り組み ～臨床現場での薬剤師の役割 ～	2016年7月	アジア・ハート・ハウス大阪2016年度夏季セミナー (JECCS)
チーム医療をコーディネートする薬剤師の総合力	2016年9月	第26回日本医療薬学会年会 ランチョンセミナー
大阪府薬剤師会における学術研究倫理審査委員会設置につい て	2017年3月	平成28年度 日本薬剤師会研究倫理に関する全国会議
CKDおよび糖尿病性腎症患者への薬物治療のポイント	2017年4月	田辺三菱製薬 薬剤師のためのWEB講演会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

2008年4月～2010年3月、 2016年7月～現在	一般社団法人 大阪府薬剤師会 理事
2018年6月～現在	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 顧問
2017年6月～現在	公益社団法人 臨床心臓病学教育研究会(JECCS) 理事
2017年6月～現在	大阪府社会保険診療報酬請求書審査委員会 審査委員
2011年7月～現在	大阪府献血推進協議会 適正使用対策部会 委員
2016年9月～現在	公益社団法人 日本薬剤師会 臨床・疫学研究推進委員会 委員
2017年3月～現在	一般社団法人 大阪府薬剤師会 学術研究倫理審査委員会 委員長
2009年7月～現在	薬剤師研修センター 認定実務実習指導薬剤師
2008年4月～2010年3月	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 理事
2010年4月～2016年6月	一般社団法人 大阪府薬剤師会 副会長
2010年4月～2016年6月	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 副会長
2016年7月～2018年6月	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 監事
2008年4月～2018年3月	公益社団法人 日本薬剤師会 代議員
2010年4月～2014年3月	一般社団法人 日本病院薬剤師会 代議員
2011年5月～2017年3月	大阪府社会保険診療報酬請求書審査委員会学識経験者審査委員選考協議会選考協議会 委員
2015年8月～2018年5月	大阪府地域職域連携推進協議会 NCD対策検討部会 委員
1980年～現在	日本薬学会 会員
2006年～現在	日本医療薬学会 会員
2012年～現在	日本糖尿病学会 会員
2006年～現在	日本臨床医学リスクマネジメント学会 会員

専任教員の教育・研究業績

所属	生命有機化学研究室	職名	准教授	氏名	山野 由美子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		1985年4月～現在に至る	「器機分析学実習」（以前は有機化学系Ⅲ実習と称した）を指導している。学生がより理解を深められるよう討議を活発に行い、また、関連した国家試験問題も紹介して解説している。		
		1985年4月～現在に至る	研究室に配属された学生の研究指導を行っている。実験操作法、実験ノート作成の仕方、研究の進め方、文献の読み方など、基本からの指導を行っている。また、定期的に報告書を作成させ、卒業前にはパワーポイントを用いて口頭発表を行わせている。		
		2004年4月～現在に至る	「有機化学演習」を受け持ち、有機化学の演習を行っている。電子の動きにより化学反応が説明できることを理解させるために、電子の動きを中心に冊子にまとめて教材とした。2018年度からは習熟度の高いクラスを受け持っているため、応用問題も用意して、解説を行っている。		
		2007年10月～現在に至る	「有機化学Ⅳ」では、最も重要で少し難解なカルボニル基の化学を解説している。教科書の重要な説明文には赤線を引かせ、また、黒板にできるだけ反応機構をカーブした矢印で書き、復習がしやすくなるように努めている。また、授業時間内に練習問題をいくつか解かせ、本人が理解度をチェックできるよう工夫している。		
		2017年10月～現在に至る	「合成化学Ⅰ」では、有機化学Ⅰ～Ⅳまでで教えきれていない重要と思われる所を教科書から抜き出し、プリントに要点をまとめて、講義を行っている。		
		2009年10月～2017年3月	4年次生に対する授業科目として、「精密有機合成化学」（2016年度まで有機化学Ⅶと称した）の講義を行っていた。医薬品合成を例として、これまでに習った有機化学がどのように応用されているか解説した。CBT受験前であることを意識し、基本的な反応を復習できるよう努めた。また、教材冊子の中には問題を掲載し、自主学習がしやすいよう工夫した。		

	2009年10月～2015年3月	2年次生に対する授業科目として、「生物有機化学」の講義を行っていた。生体成分の性質と反応を有機化学的に理解できるよう、黒板にできるだけ構造式を書き、どの官能基がどのように反応するのか解説した。また、要点をまとめた冊子を作成し、教科書のページ数も記載して、自主学習しやすいよう工夫した。
2 作成した教科書、教材、参考書	2009年～2015年 2009年～現在 2009年～現在	「生物有機化学」の教材作成：生体成分の性質と反応を有機化学的に理解できるよう要点にまとめた。 「精密有機合成化学」の教材作成：これまでに習った有機化学の知識で理解できる医薬品合成例と、スペクトルを冊子にまとめた。 「有機化学系Ⅲ実習書」の作成
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 なし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Yamano Y., Chary M. V., Wada A.	論文	Org. Lett. 2013, 15, 5310-5313. "Stereocontrolled First Total Syntheses of Amarouciaxanthin A and B"
Yamano Y., Maoka T., Wada A.	論文	Marine Drugs 2014, 12, 2623-2632. "Synthesis of (3S, 3'S)- and meso-Stereoisomers of Alloxanthin and Determination of Absolute Configuration of Alloxanthin Isolated from Aquatic Animals"
Yamano Y., Ematsu K., Kurimoto H., Maoka T., Wada A.	論文	Marine Drugs 2015, 13, 159-172. "Total synthesis of gobiuxanthin stereoisomers and their application to determination of absolute configuration of natural products: revision of reported absolute configuration of epigobiuxanthin"

Yamano Y., Nishiyama Y, Aoki A., Maoka T., Wada A.	論文	Tetrahedron 2017, 73, 2043-2052. "Total synthesis of lycopene-5,6-diol and gamma-carotene-5',6'-diol stereoisomers and their HPLC separation"
Yamano Y., Sasaki H., Wada A.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2017, 65, 940-944. "Versatile Amine-Promoted Mild Methanolysis of 3,5-Dinitrobenzoates and Its Application to the Synthesis of Colorado Potato Beetle Pheromone"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Lycopeneの新規酸化代謝物, lycopene-5,6-diol立体異性体の全合成	2015年10月	第41回反応と合成の進歩シンポジウム
新規チャンネルロドプシンの開発	2016年3月	日本薬学会第136年会
マウス生体内における新規フコキサンチン代謝物の同定と抗炎症作用	2016年6月	第30回カロテノイド研究談話会
Siphonaxanthinの合成研究	2016年11月	第42回反応と合成の進歩シンポジウム
Myxolおよびdeoxymyxol立体異性体の全合成とキラルHPLC分析による天然物の立体配置の決定	2017年9月	第31回カロテノイド研究談話会
III 学会等および社会における主な活動		
1983年1月～現在に至る	日本薬学会会員	
1986年1月～現在に至る	日本ビタミン学会会員	
1995年1月～現在に至る	日本カロテノイド研究会会員	
2002年4月～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2014年10月～現在に至る	近畿化学協会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 中央分析室	職名 准教授	氏名 竹内 敦子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年9月～2017年12月  2008年4月～2017年12月  2002年4月～2010年12月  1981年4月～2017年12月	<p>分析化学III（新カリ）（分担）を担当した。薬学研究で生体分子を解析するために必要な分析法を習熟させることを目的として講義を行った。</p> <p>分析化学III（旧カリ）から構造解析学(分担)、薬学英語入門I、薬学英語入門IIの講義を担当した。分析化学III（旧カリ）-構造解析学では、生体分子を解析する方法としての質量分析法を習熟させることを目的として講義を行った。3年次前・後期で担当する薬学英語入門I・IIでは、医療や薬学などを中心とする自然科学の分野で必要とされる英語の基礎的な知識を修得し、同時に理系英語の初歩的な技能と運用能力を養成することを目的として講義を行った。</p> <p>実習としては、2002年から2007年度まで有機化学系実習II、2008年度から現在まで有機化学系III実習を担当した。質量分析計の前での測定を実演したり、自ら作成したポスターを使って質量分析に対する理解を深めるための努力をするとともに、国家試験を意識した解説も行った。</p> <p>毎年数名のゼミ生ならびに大学院生の指導を行った。質量分析を通して、研究の目的、実験結果の考え方を把握し、さらなる研究意欲を培わせることを心がけて指導を行った。また、プレゼンテーションについても、わかりやすく聞き手に伝えるかをポイントにおいて指導した。大学院講義では、学生が研究に応用できるような質量分析に関する最近の話題について講義した。</p>
2 作成した教科書、教材、参考書		質量分析法の原理や基礎的内容を学習するための図式化などを取り入れたプリント教材を作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Takarada T, Nishida A, Takeuchi A, Lee T, Takeshima Y, Matsuo M.	論文	Brain Dev. 2015 "Resveratrol enhances splicing of insulin receptor exon 11 in myotonic dystrophy type 1 fibroblasts."
Nishida A, Oda A, Takeuchi A, Lee T, Awano H	論文	Brain Dev. 2016 "Staurosporine allows dystrophin expression by skipping of nonsense-encoding exon."
Nishida A, Yasuno S, Takeuchi A, Awano H, Lee T, Niba ETE, Fujimoto T, Itoh K, Takeshima Y, Nishio H, Matsuo M	論文	Histochem Cell Biol. 2016 "HEK293 cells express dystrophin Dp71 with nucleus-specific localization of Dp71ab."
Takarada T, Rochmah MA, Harahap NIF, Shinohara M, Saito T, Saito K, Lai PS, Bouike Y, Takeshima Y, Awano H, Morioka I, Iijima K, Nishio H, Takeuchi A	論文	Brain Dev. 2017 "SMA mutations in SMN Tudor and C-terminal domains destabilize the protein."
Ar Rochmah M, Harahap NIF, Niba ETE, Nakanishi K, Awano H, Morioka I, Iijima K, Saito T, Saito K, Lai PS, Takeshima Y, Takeuchi A	論文	Brain Dev. 2017 "Genetic screening of spinal muscular atrophy using a real-time modified COP-PCR technique with dried blood-spot DNA."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
New strategy for analysis of the splicing regulatory factors using high-resolution mass spectrometry	2016.08.	21st International Mass SpectrometryY Conference
Clinical evaluation of prostaglandin D2 and E2 metabolites in urine	2016.08.	21st International Mass SpectrometryY Conference

エクソン認識を制御するRNA結合蛋白質解析法の構築と遺伝子疾患治療薬開発への応用	2016. 1	第66回日本薬学会近畿支部総会・大会
SMN遺伝子の変異が蛋白質の安定性に及ぼす影響	2017. 3.	日本薬学会第138年会
スプライシングを制御するRNA結合蛋白質の解析法の構築	2017. 5	第65回質量分析総合討論会
III 学会等および社会における主な活動		
1981年～2009年	日本ビタミン学会会員	
1981年～	日本薬学会会員	
2001年～	日本質量分析学会会員	
2004年～	日本医用マススペクトル学会会員	
2005年～	American Society for Mass Spectrometry会員	
2006年7月	第33回BMS (Biological Mass Spectrometry) コンファレンス実行委員	
2010年7月	第37回BMS (Biological Mass Spectrometry) コンファレンス実行委員	
2013年7月	第40回BMS (Biological Mass Spectrometry) コンファレンス実行委員長	
2013年～	BMS研究会世話人	
2014年～	日本医用マススペクトル学会評議員	
2015年7月	第42回BMS (Biological Mass Spectrometry) コンファレンス実行委員	
2017年7月	第44回BMS (Biological Mass Spectrometry) コンファレンス実行委員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 英語第一研究室	職名 准教授	氏名 赤井 朋子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
英語	1992年～現在に至る	<p>1年生、2年生を対象に英語の総合的な運用能力（「読む」「書く」「聞く」「話す」）の養成を目的とした授業を行う。具体的な授業内容は科目や年度によって異なり、教科書も様々なものを使用してきたが、例えば、自然科学に関連した語彙力を強化するもの、評論文の読解力をのばすもの、速読に重点を置いたもの、英文法の復習に重点を置くもの、音声教材を用いたリスニング力強化を目指すもの、英作文の力を養成するもの等がある。</p> <p>2013年度から導入された選択必修制の英語の授業（2年生）においては、病院での簡単な英会話や、医療に関する英文の講読を行っている。習熟度別に授業が行われる科目（1年生）においては、英語を得意としない学生さんたちを対象にわかりやすい解説と、理解度をチェックしながらの双方向的な授業を心がけている。いずれの科目においても、会話や読解、問題解決等、様々な機会において、ペア・ワークやグループ・ワークを積極的に活用している。</p> <p>英語の担当コマ数は、例年、前期6コマ、後期6コマである。</p>
総合文化演習	1995年～現在に至る	<p>2年生を対象に演習形式の授業を行う。映画や演劇に関するゼミとイギリス文化に関するゼミを担当。作品に関するディスカッションや文献購読などの演習を行い、その上で、学生の研究発表とレポート作成を指導する。2002年度からスモール・グループ・ディスカッション方式も取り入れ、特定の課題についてすべての学生がディスカッションに参加できるように工夫している。また、演劇や映画を通して人間や文化に対する理解を深め、グローバル社会に欠かせない、文化の多様性に対する寛容性を養うことも視野に入れている。そして、互いの意見を尊重しながら問題解決につなげていくコミュニケーションのとりかたをゼミ生が習得できるように心がけている。</p>

早期体験学習	2005年～現在に至る	新入生の早期体験学習が円滑に行われるように様々な形で学生のサポートを行っている。特に、2005年度（早期体験学習トライアル）、2009年度、2013年度、2017年度には新入生の担任としてクラス授業を行い、体験学習後のプレゼンテーションの指導や、報告書原稿の添削等を行っている。また、学生の学習先である病院や薬局を訪問したり、学生の引率を行ったりもしている。
2 作成した教科書、教材、参考書 授業のプリントを作成	1992年～現在に至る	例えば、2013年度～の英語V、VIにおいては、学生が予習しやすいように、各章毎に予習プリントを作成し配布している。他の科目においても、適宜、補助的な教材や問題集をプリントとして作成し、活用している。時には、アメリカの医療情報サイトなどを利用した積極的な自学自習を学生に促すために、それに関連したプリントを作成し授業を行うこともある。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「総合文化演習」の報告集を作成	2002年～2011年	各年度末に、その年度の「総合文化演習」の授業内容報告を執筆。また、受講した学生のレポートも合わせて掲載。
4 その他教育活動上特記すべき事項 入学予定者のための英語教育  クラス担任  英語学習に関する学生実態調査の実施	2003年～現在に至る  2005年～現在に至る  2013年	推薦入試による入学予定者に、あらかじめ問題集を送付し、返送されてきた学生の解答に目を通した上で、3月にそれに関する解説の授業を行っている。  クラス担任として、種々の関係業務に従事。  新カリキュラム1年目の学年である2年次生を対象に英語学習に関する意識調査を行った。本学の英語教育および英語の学習全般に関する詳細なアンケートを作成し、2年次生全員に配布して回答を回収。その集計結果とそれに関する考察を10ページ程度の報告書にまとめた。

習熟度別英語科目のとりまとめ役	2013年～現在に至る	習熟度別英語科目担当の先生方（非常勤講師）と、毎年、テキスト選定や授業の運営等についてミーティングを重ねている。本学の場合、学生間で英語の学力に大きな差が見られるので、教員同士の連携やコミュニケーションをはかることにより、多様な学生への効果的な対応に取り組んでいる。
"A Visit to the Hospital"（英語台本）の活用	2017年	"A Visit to the Hospital"という英語で書かれた短い劇の台本（Patrice Pavis作、未刊行、作者の承諾済）をグループ・ワークにより読む授業を行った。2017年度に授業の一部を使って行っただけであるが、受講生の反響は大きかった。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
赤井 朋子	著書（共著）	『イギリス文化事典』（丸善出版、2014年）252-53.
赤井 朋子	著書（共著）	『ロンドンの劇場文化－英国近代演劇史－』（朝日出版社、2015年）113-140.
赤井 朋子	著書（共著）	『ステージ・ショウの時代』（森話社、2015年）278-304.
赤井 朋子	研究ノート	Libra 2013, 13, 1-26. 「チャールズ・コ克蘭の『この恵みの年！』－イギリス1920年代のレビューに関する覚え書き－」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
「1910年代ロンドンのヴァラエティ劇場－坪内士行の見たレビュー」（口頭発表）	2013年6月	日本演劇学会全国大会

「ロンドン・コリシームーヴァラエティ劇場時代」 (口頭発表)	2013年7月	英米文化学会分科会
「ヴァラエティ劇場時代のロンドン・コリシームー寄席と劇場の関係」 (口頭発表)	2013年11月	英米文化学会第142回例会
「検閲と規範—ノエル・カワード作 <i>This Was a Man</i> (1926) について—」 (口頭発表)	2015年6月	日本演劇学会全国大会
“Cultural Transfer between London and Takarazuka: the Imitation and Adaptation of Musical Revue in 1920s Japan” (oral presentation)	Aug. 2017	Association for Asian Performance 17th Annual Conference
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
「ロンドンの劇場文化—英国近代演劇史—」 (ワークショップ)	2015年9月	英米文化学会大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1992年4月～現在	日本英文学会、日本シェイクスピア協会会員	
2000年4月～現在	日本演劇学会会員	
2004年4月～現在	日本比較文化学会会員	
2004年6月～2008年6月	日本演劇学会幹事	
2006年8月～現在	国際演劇学会会員	
2010年4月～2011年8月	IFTR Osaka実行委員 (working group coordinator)	
2011年8月～現在	英米文化学会会員	
2017年3月～現在	Association for Asian Performance会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 准教授	氏名 波多江 崇
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2012年4月～現在 2012年4月～現在 2012年4月～現在 2013年4月～現在 2014年9月～現在 2014年9月～現在 2015年4月～現在 2015年4月～現在 2018年4月～現在	4年生を対象に「実務実習事前教育」を担当している。 6年生を対象に「処方解析学・演習」を担当している。 6年生を対象に「総合薬学講座」を担当している。 2年生を対象に「機能形態学」を担当している。 3年生を対象に「医療統計学ⅡA」を担当している。 3年生を対象に「調剤学Ⅱ」を担当している。 4年生を対象に「OTCヘルスケア論」を担当している。 1～3年生を対象に「アクティブ・ラボ」を担当している。 4年生を対象に「地域医療・プライマリケア論」を担当している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2011年～現在 2017年～現在	生涯教育企画委員 地域連携サテライトセンター運営委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
波多江崇, 田中智啓, 猪野彩, 田内義彦, 竹下治範, 辰見明俊, 濱口常男	論文	医薬品情報学, Vol.18, No. 4 (2017) 289-294. 日本人を対象とした食後血糖値上昇に対する難消化性デキストリンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス
波多江崇, 石田好宏, 伊東真知, 大島沙紀, 藤森可純, 猪野彩, 田内義彦, 竹下治範, 辰見明俊, 森口紗里, 濱口常男	論文	, 日本地域薬局薬学会誌, Vol.4, No. 1 (2016) 16-22. 日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩酸塩およびN-アセチルグルコサミンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス
波多江崇, 長谷川由佳, 白川晶一, 内海美保, 猪野彩, 竹下治範, 辰見明俊, 田内義彦, 濱口常男	論文	医薬品相互作用研究, Vol.39, No. 1 (2015) 37-43. フィジカルアセスメントに対する薬局薬剤師の意識および活用状況に関する実態調査
波多江崇【編著】、竹下治範、竹永由紀子【著】	著書	薬学生・薬剤師のための添付文書徹底活用術 - Q&Aで学ぶ適正使用10事例 -, 薬事日報社, 2016年10月.
波多江崇	著書	薬事統計の実践 —理論と事例, たくさんの演習— (第2版), 京都廣川書店, 2017年9月.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
育て中の母親からの相談から見えてきた薬局における服薬指導の問題点	2015年・6月	第18回日本医薬品情報学会総会・学術大会
子どもの薬の疑問に対する解決方法として母親が薬局を選ばない理由の一考察	2016年・9月	日本社会薬学会第35年会
行政・薬局・大学の共働による地域住民への減塩教室の試み	2017年・3月	セルフメディケーション推進協議会学術フォーラム2016

子育て中の母親が持つ子供の薬に対する疑問とその解決方法に関する調査	2017年・9月	日本社会薬学会第36年会
NDBオープンデータを用いた乳幼児における抗ヒスタミン薬の処方実態調査	2018年・3月	日本薬学会第138年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010年4月～2012年1月	郡山薬剤師会 理事	
2010年4月～2012年1月	福島県薬剤師会地域医療・分業対策委員会 委員	
1995年～現在に至る	日本薬学会 会員	
1995年～現在に至る	日本薬理学会 会員	
1997年～現在に至る	日本解剖学会 会員	
2003年～現在に至る	日本薬剤師会 会員	
2014年5月～2016年3月	兵庫県薬剤師会 薬局・薬剤師を活用した健康情報拠点推進事業等特別委員会 委員	
2006年～現在に至る	日本社会薬学会 会員	
2014年～現在に至る	日本社会薬学会 編集委員	
2009年～現在に至る	日本医療薬学会 会員	
2009年～現在に至る	日本病院薬剤師会 会員	
2009年～現在に至る	日本薬局学会 会員	
2010年～現在に至る	日本注射薬臨床情報学会 会員	
2010年～現在に至る	相互作用研究会 会員	
2013年～現在に至る	日本地域薬局薬学会 会員	
2017年～現在に至る	日本社会薬学会 関西支部 副支部長	
2018年～現在に至る	日本社会薬学会 幹事	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 衛生化学研究室	職名 准教授	氏名 中川 公恵
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） (1) 本学薬学部学生への教育	1997年4月-現在に至る	学部学生に衛生薬学系実習の指導を行っている。 1) 実習開始時に実習内容の詳細な説明を行い、器具の取り扱いを含めて実習内容を周知させてから実習を行わせている。事前に実習内容の予習をさせておき、予習ノート（プリント）を確認している。 2) 実習結果をまとめて班ごとに討議させた後、実験結果についての質疑応答を行い、結果や問題点などについて考えさせ、その日の実習内容を理解させている。 3) 本学で2年に一度行われている学生による実習評価では、平均以上の評価を得ておりわかりやすく十分に学習できていると好評である。
	1997年4月-現在に至る	学部学生の卒業研究の指導を行っている。 1) 学生に実験に対する目的意識を持たせるため、研究内容の説明を行うとともに関連する論文を読ませてまとめさせている。 2) 定期的に研究内容をまとめさせ、発表させることで論理的な考え方や表現力を訓練させている。 3) 卒業発表に向けて結果をまとめさせ、発表スライド及び原稿を作製させて発表させるとともに、卒業論文を書かせている。
	2008年4月-現在に至る	学部学生に衛生薬学II（2013年までは衛生薬学III）の講義を行っている。 教科書の内容に加え、国家試験に重要なポイント等を含めてまとめたプリントを配布し、学生が重要点を理解しやすいように工夫して講義を行っている。
	2011年4月-現在に至る	学部学生に衛生薬学III（2013年までは衛生薬学IV）の講義を行っている。

		教科書の内容に加え、国家試験に重要なポイント等を含めてまとめたプリントを配布し、学生が重要点を理解しやすいように工夫して講義を行っている。
(2) 本学薬学研究科大学院生への教育研究指導	2008年4月-現在に至る	<p>大学院薬学研究科修士課程の学生に生命科学特論講義を、博士課程の学生に生物系創薬学特論の講義を行っている。また、研究室に所属する大学院生に対して研究指導を行っている。</p> <p>1) 講義は、最新のデータを交えながら、専門外の学生にも理解しやすいように背景説明も含めて分かりやすく解説している。動画などを用いたパワーポイントを使うことにより理解しやすくなるよう工夫している。</p> <p>2) 学生に論理的な思考力と表現力が身に付くように、定期的に自分の研究内容をまとめて発表させ、研究室で討論を行い、研究内容の進展状況や問題点を把握し、解決策を自ら提案出来るよう指導している。</p> <p>3) 学生には、少なくとも年一回は学会発表できるように指導している。</p>
2 作成した教科書、教材、参考書  『New衛生薬学』（廣川書店、岡野登志夫、山崎裕康 編集、2009）	2009（平成21）年12月10日	第7章疾病の予防とは、第8章感染症の現状とその予防（pp. 289-354）
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等  特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項  共同研究委員会委員 実務実習運営委員会委員 動物実験施設運営委員会委員 ベストティーチャー賞 動物実験委員会委員 学生就職委員会委員	<p>2009年4月1日-2013年3月31日</p> <p>2010年4月1日-2012年3月31日</p> <p>2012年4月1日-現在に至る</p> <p>2013年</p> <p>2014年10月1日-2016年3月31日</p> <p>2015年4月1日-2017年3月31日</p>	<p>大学内の共同研究に関する申請に携わっている。</p> <p>5年次生の実務実習の運営に携わっている。</p> <p>大学内の動物実験施設の運営や規定作成などに携わっている。</p> <p>衛生薬学III（前期）</p> <p>大学内の動物実験の運営や規定作成などに携わっている。</p>

キャリア支援委員会委員	2018年4月1日-現在に至る	
組換えDNA実験安全委員会委員	2015年4月1日-現在に至る	
衛生委員会委員	2015年4月1日-2016年3月31日	
国家試験対策委員会委員	2015年4月1日-現在に至る	
CBT対策委員会委員	2013年4月1日-現在に至る	
健康食品講座企画委員会委員	2017年12月15日-現在に至る	
健康食品領域研修事業委員会委員	2017年12月15日-現在に至る	
地域連携サテライトセンター運営委員会委員	2017年4月1日-現在に至る	
放射線安全管理委員会委員	2015年4月1日-現在に至る	
実務実習評価委員会委員	2018年4月1日-現在に至る	
特別管理産業廃棄物管理責任者	2015年4月1日-現在に至る	
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Nakagawa K, Sawada N, Hirota Y, Uchino Y, Suhara Y, Hasegawa T, Amizuka N, Okamoto T, Tsugawa N, Kamao M, Funahashi N, Okano T	論文	PLoS ONE 2014, 9(8),e104078. "Vitamin K2 Biosynthetic Enzyme, UBIAD1 Is Essential for Embryonic Development of Mice"
Funahashi N, Hirota Y, Nakagawa K, Sawada N, Watanabe M, Suhara Y, Okano T	論文	Biochem Biophys Res Commun, 2015; 460: 238-44. "YY1 positively regulates human UBIAD1 expression."
Hirota Y, Nakagawa K, Sawada N, Okuda N, Suhara Y, Uchino Y, Kimoto T, Funahashi N, Kamao M, Tsugawa N, Okano T	論文	PLoS One, 2015; 10: e0125737. "Functional Characterization of the Vitamin K2 Biosynthetic Enzyme UBIAD1. "

Hirota Y, Nakagawa K, Mimatsu S, Sawada N, Sakaki T, Kubodera N, Kamao M, Tsugawa N, Suhara Y, Okano T.	論文	Biochem Biophys Res Comm 2017; 483: 359-65 "Nongenomic effects of 1 $\alpha$ ,25-dihydroxyvitamin D3 on cartilage formation deduced from comparisons between Cyp27b1 and Vdr knockout mice."
Kamao M, Hirota Y, Suhara Y, Tsugawa N, Nakagawa K, Okano T, Hasegawa H.	論文	Analytical Sciences 2017; 33: 863-867. "Determination of Menadione by Liquid Chromatography-Tandem Mass Spectrometry Using Pseudo Multiple Reaction Monitoring. "
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
脳神経系におけるビタミンK2合成酵素UBIAD1の機能解析	2016年・3月	日本薬学会第136年会
ビタミンK2合成酵素UBIAD1の脳神経系における機能解析	2016年・6月	日本ビタミン学会第68回大会
脳神経特異的ビタミンK2合成酵素UBIAD1欠損マウスの表現型解析	2017年・3月	日本薬学会第137年会
脳神経特異的ビタミンK2合成酵素UBIAD1欠損マウスの脳機能解析	2017年・6月	日本ビタミン学会第69回大会
Tamoxifen誘導型全身性ビタミンK変換酵素 (UBIAD1) 遺伝子欠損マウスの表現型解析	2017年・10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会
III 学会等および社会における主な活動		
1996年6月-現在に至る	日本薬学会会員	
1997年 3月-現在に至る	日本ビタミン学会会員	

1997年 5月-現在に至る	日本骨代謝学会会員
2000年 6月-2012年3月	日本生化学会会員
2003年 6月-現在に至る	日本癌学会会員
2008年 4月-現在に至る	神戸薬科大学生協 理事
2008年 4月-現在に至る	日本骨粗鬆症学会会員
2009年4月～現在に至る	日本薬学会薬理系薬学部会若手世話人
2017年11月～現在に至る	日本ビタミン学会代議員
2018年4月～現在に至る	脂溶性ビタミン総合研究委員会委員
2018年4月～現在に至る	Journal of Nutritional Science and Vitaminology (JNSV) 編集委員
2016年4月～現在に至る	日本薬学会学術編集委員
2018年8月～2022年3月	日本薬学会環境・衛生部会 BPB Reports編集委員会委員委員
2016年4月～現在に至る	兵庫県COEプログラム推進事業有識者会議構成員
2016年10月～現在に至る	姫路市環境審議会委員

## 専任教員の教育・研究業績

所属 臨床薬学研究室	職名 准教授	氏名 池田 宏二
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
薬学入門	2015年4月～	アスピリンの実臨床における使用方法について
薬物治療学V	2015年4月～	腎・泌尿器疾患の病態と薬物治療について
実務実習事前教育	2014年4月～	服薬指導の方法、注射薬の調剤について
処方解析学	2015年4月～	糖尿病、内分泌疾患の病態と薬物治療について
総合薬学講座	2015年11月～	腎・泌尿器疾患の病態と薬物治療について
2 作成した教科書、教材、参考書		各講義用に独自にスライドとプリントを作製
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 特になし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Ogata T, Naito D, Nakanishi N, Hayashi YK, Taniguchi T, Miyagawa K, Hamaoka T, Maruyama N, Matoba S, Ikeda K, Yamada H, Oh H, Ueyama T	原著論文	Proc Natl Acad Sci U S A. 2014;111(10):3811-6

Hoshino A, Ariyoshi M, Okawa Y, Kaimoto S, Fukai K, Iwai-Kanai E, Ikeda K, Ueyama T, Ogata T, Matoba S	原著論文	Proc Natl Acad Sci U S A. 2014;111(8):3116-21
Akakabe Y, Koide M, Kitamura Y, Matsuo K, Ueyama T, Matoba S, Yamada H, Miyata K, Oike Y, Ikeda K (corresponding author)	原著論文	Nat Commun., 2013;4:2389
Hoshino A, Mita Y, Okawa Y, Ariyoshi M, Iwai-Kanai E, Ueyama T, Ikeda K, Ogata T, Matoba S	原著論文	Nat Commun. 2013;4:2308
Koide M, Ikeda K (corresponding author), Akakabe Y, Kitamura Y, Ueyama T, Matoba S, Yamada H, Okigaki M, Matsubara H	原著論文	Proc Natl Acad Sci U S A. 2011;108(23):9472-7
2. 学会発表 (平成27年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
Neuregulin-4 ameliorates adipocyte dysfunction associated with obesity by regulating adipose tissue angiogenesis.	2017年・11月	American Heart Association Scientific Session
Vascular senescence-messaging secretome induces premature senescence in adipocytes and impairs systemic metabolic homeostasis.	2016年・8月	European Society of Cardiology Congress
Signaling crosstalk between endothelial cell and mature adipocyte regulates adipose tissue angiogenesis and homeostasis.	2015年・12月	第38回日本分子生物学会年会 Cold Spring Harbor Asia Session
III 学会等および社会における主な活動		
1994年6月～現在に至る	日本内科学会会員	
1994年6月～現在に至る	日本循環器学会会員	

池田

2006年4月～現在に至る	日本腎臓学会会員
2009年4月～現在に至る	日本高血圧学会会員
2008年4月～現在に至る	日本血管生物医学会会員
2013年4月～現在に至る	日本医学教育学会会員
2015年10月～現在に至る	日本薬理学会会員
2015年10月～現在に至る	日本生理学会会員
2015年11月～現在に至る	日本肥満学会会員

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学基礎教育センター	職名 准教授	氏名 竹仲 由希子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 有機化学実習の講義と実験指導 有機化学演習の講義 有機化学Iの講義 生薬化学の講義	2002年1月～2017年 2006年4月～現在に至る 2008年10月～2016年 2017年4月～現在に至る	基礎的な実験操作をパワーポイントを用いた事前の講義で詳しく説明し、イメージしやすくしている。 毎回小テストをおこない、学生の理解度を確認しながら進めている。 まとめおよび練習問題のプリントを配布し、学生が学習内容を整理しやすくしている。毎回小テストをすることにより、分からない箇所を学生に認識させる。 天然由来の化合物を骨格毎に生合成経路も含めてまとめたプリントを配布している。講義では、生薬化学や有機化学で学んだことの復習もかねながら、色々な観点から構造式をとらえられるようにしている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項 チューター学生に対する指導	2005年4月～2008年3月	
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Le Hoang Duy, Takenaka Y., Hamada N., Mizushina Y., Tanahashi T.	論文	<i>J. Nat. Prod.</i> , 2014, 77, 1404-1412. "Polyketides from the Cultured Lichen Mycobionts of Vietnamese <i>Pyrenula</i> sp."

Kozaki S., Takenaka Y., Mizushina Y., Yamaura T., Tanahashi T.	論文	<i>J. Nat. Med.</i> , 2014, 68, 421-426. "Three acetophenones from <i>Acronychia pedunculata</i> "
Takefumi Onodera, Yukiko Takenaka, Sachiko Kozaki, Takao Tanahashi, and Yoshiyuki Mizushina	論文	<i>Int. J. Oncol.</i> 2016, 48 (3), 1145-1154. "Screening of Mammalian DNA Polymerase and Topoisomerase Inhibitors from <i>Garcinia mangostana</i> L. and Analysis of Human Cancer Cell Proliferation and Apoptosis"
Duy Hoang Le, Katsumi Nishimura, Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Takao Tanahashi	論文	<i>J. Nat. Prod.</i> 2016, 79 (7), 1798-1807. "Polyprenylated Benzoylphloroglucinols with DNA Polymerase Inhibitory Activity from the Fruits of <i>Garcinia schomburgkiana</i> "
Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Nobuo Hamada, Takao Tanahashi	論文	<i>Heterocycles</i> 2017, 94 (9), 1728-1735, doi:10.3987/com-17-13704. "A cytotoxic pyranonaphthoquinone from cultured lichen mycobionts of <i>Haematomma</i> sp. "
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Sesquiterpene derivatives from cultured lichen mycobionts of <i>Diorygma</i> sp.	2015年8月	63rd International Congress and Annual Meeting of the Society for Medicinal Plant and Natural Product Research
<i>Garcinia oblongifolia</i> の樹皮に含まれるキサントン類について	2015年9月	日本生薬学会第62回年会
<i>Fraxinus rhynchophylla</i> の果実の成分研究	2016年3月	日本薬学会第136回年会
<i>Garcinia mangostana</i> の葉部の成分研究	2016年3月	日本薬学会第136回年会
ベトナム産地衣類より単離培養した地衣菌の代謝物の多様性	2016年7月	日本地衣学会第15回大会
III 学会等および社会における主な活動		
2010年1月～2011年12月	日本地衣学会評議員	
2014年1月～2015年12月	日本地衣学会監事、評議員	
2016年1月～2017年12月	日本地衣学会庶務幹事	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 医療薬学研究室	職名 准教授	氏名 佐々木 直人
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年10月～2017年3月 2016年10月～現在 2017年11月 2016年10月～現在 2016年10月～現在	3年次生の薬物治療学Ⅱを担当した。臨床医としての経験を生かした講義を行っている。 4年次生の実務実習事前教育を担当している。臨床医としての経験を生かした教育を行っている。 6年次生の総合薬学講座を担当している。国家試験対策のポイントを示しながら、分かりやすく講義している。 6年次生の処方解析学・処方解析演習を担当している。病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義している。 学部学生および大学院生に実験操作、実験ノート作成、研究発表などの指導を行っている。また、学生自身が目的意識をもって研究を進められるように指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
Sasaki N, Yamashita T, Kasahara K, Takeda M, Hirata K.	論文	<i>Current Pharmaceutical Design</i> . 21:1107-1117, 2015. "Regulatory T cells and tolerogenic dendritic cells as critical immune modulators in atherogenesis."
Yodoi K, Yamashita T, Sasaki N, Kasahara K, Emoto T, Matsumoto T, Kita T, Sasaki Y, Mizoguchi T, Sparwasser T, Hirata K.	論文	<i>Hypertension</i> . 65:889-895, 2015. "Foxp3+ regulatory T cells play a protective role in angiotensin II-induced aortic aneurysm formation in mice."
Matsumoto T, Sasaki N, Yamashita T, Emoto T, Kasahara K, Mizoguchi T, Hayashi T, Yodoi K, Kitano N, Saito T, Yamaguchi T, Hirata K.	論文	<i>Arterioscler Thromb Vasc Biol</i> . 36:1141-1151, 2016. "Overexpression of CTLA-4 prevents atherosclerosis in mice."
Sasaki N, Yamashita T, Kasahara K, Fukunaga A, Yamaguchi T, Emoto T, Yodoi K, Matsumoto T, Nakajima K, Kita T, Takeda M, Mizoguchi T, Hayashi T, Sasaki Y, Hatakeyama M, Taguchi K, Washio K, Sakaguchi S, Malissen B, Nishigori C, Hirata K.	論文	<i>Arterioscler Thromb Vasc Biol</i> . 37:66-74, 2017. "UVB exposure prevents atherosclerosis by regulating immunoinflammatory responses."
Hayashi T, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Emoto T, Amin HZ, Yodoi K, Matsumoto T, Kasahara K, Yoshida N, Tabata T, Kitano N, Fukunaga A, Nishigori C, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	<i>J Am Heart Assoc</i> . 6(9):e007024, 2017. "Ultraviolet B Exposure Inhibits Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice by Expanding CD4+Foxp3+ Regulatory T Cells."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Foxp3+ regulatory T cells inhibit the development of atherosclerosis by regulating immunoinflammatory responses	2017年7月	第49回日本動脈硬化学会総会
アンジオテンシンII誘導性マウス大動脈瘤モデルを用いた、紫外線照射による大動脈瘤抑制効果の検討	2017年7月	第49回日本動脈硬化学会総会
紫外線照射による動脈硬化抑制効果の検討	2017年7月	第39回日本光医学・光生物学会
紫外線照射による心筋梗塞後の心不全抑制効果の検討	2017年9月	第45回日本臨床免疫学会総会
Ultraviolet B exposure prevents atherosclerotic cardiovascular disease by regulating immunoinflammatory responses	2017年12月	第46回日本免疫学会学術集会

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2000年5月～現在	日本内科学会会員（2005年9月～現在：日本内科学会認定内科医、2015年12月～現在：日本内科学会総合内科専門医）
2000年5月～現在	日本循環器学会会員（2008年4月～現在：日本循環器学会認定循環器専門医）
2008年6月～現在	日本動脈硬化学会会員
2008年12月～現在	日本免疫学会会員
2011年8月～現在	日本血管生物医学会会員
2012年5月～現在	American Heart Association会員
2015年5月～現在	日本臨床免疫学会会員
2016年11月～現在	日本薬学会会員

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬理学研究室	職名 准教授	氏名 八巻 耕也
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2002.4.1 - 2003.4.1 - 2006.3.31 2006.4.1 - 2009.3.31 2006.4.1 - 2011.3.31 2007.4.1 - 2007.4.1 - 2009.4.1 - 2013.4.1 - 2014.4.1 -	薬理学実習（兼担） 情報リテラシー助手 薬理学Ⅱ（兼担） 臨床薬理学特論（兼担） 薬理学Ⅰ 薬学総合講座（兼担） 基礎薬学（C B T）演習（兼担） 薬学入門（兼担） 医薬品毒性学（兼担） 講義においては自作のプリントやプレゼンテーションを作成し、学生の理解が深まるように努力した。また、講義中も適宜、学生に反応を確認したり、問いかけを行うことにより、学生が講義を理解しているかを把握するように努めた。 2008年度の薬理学Ⅱ、2012年度の薬理学Ⅰの講義では、授業評価を基にした「ベストティーチャー賞(学内賞)」を受賞した。
2 作成した教科書、教材、参考書		講義を行うにあたり、自作のプリントやプレゼンテーションを作成し利用した。

<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p>		<p>学術論文 八巻 耕也, 上田 昌史, 上田 久美子, 江本 憲昭, 水谷 暢明, 池田 宏二, 八木 敬子, 田中 将史, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 北河 修治 薬学雑誌., 2016, 136, 1051-1064. “基礎から臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の学習効果”</p> <p>学術論文 八巻 耕也, 池田 宏二, 上田 久美子, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 和田 昭盛, 小山 淳子, 児玉 典子, 北河 修治 薬学雑誌., 2017, 137, 1285-1299. “分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導入が生み出す学習意欲と学習効果”</p>
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p>	<p>2005. 4. 1 - 2006. 4. 1 - 2007. 3. 31 2007. 4. 1 -</p>	<p>高校での出張講義 チューター（成績不良な学生への学習支援） 実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップのタスクフォース 高校、大学（正規の講義以外）、卒後の薬剤師のための教育にも可能なかぎり参画している。</p>
<p>II 研究活動</p>		
<p>1. 著書・論文等</p>		
<p>氏名</p>	<p>種別</p>	<p>内容</p>
<p>Yamaki K., Nakashima T., Miyatake K., Ishibashi Y., Ito A., Kuranishi A., Taguchi A., Morioka A., Yamamoto M., Yoshino S.</p>	<p>論文</p>	<p>Immunol Res. 2014, 58, 106-17. "IgA attenuates anaphylaxis and subsequent immune responses in mice: possible application of IgA to vaccines."</p>
<p>Yamaki K., Yoshino S.</p>	<p>論文</p>	<p>Int Immunopharmacol. 2014, 18, 217-24. "Remission of food allergy by the Janus kinase inhibitor ruxolitinib in mice."</p>

Yamaki K., Miyatake K., Nakashima T., Morioka A., Yamamoto M., Ishibashi Y., Ito A., Kuranishi A., Yoshino S.	論文	Immunopharmacol Immunotoxicol. 2014, 36, 316-28. "Intravenous IgA complexed with antigen reduces primary antibody response to the antigen and anaphylaxis upon antigen re-exposure by inhibiting Th1 and Th2 activation in mice."
Yamaki K., Yoshino S.	論文	Monoclon Antib Immunodiagn Immunother. 2015, 34, 423-31. "Establishment of a Mouse Anti-ovalbumin IgE Monoclonal Antibody That Induces FcεRII (CD23)-dependent Activation Without FcεRI-Dependent Activation."
Yamaki K., Yoshino S.	論文	J. Immunol. Methods, 2016, 428, 58-68. "A new, rapid in vivo method to evaluate allergic responses through distinctive distribution of a fluorescent-labeled immune complex: Potential to investigate anti-allergic effects of compounds administered either systemically or topically to the skin."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
皮膚における蛍光免疫複合体の斑点状の分布 (ASDIS) を指標とする新規マウスアレルギーモデル	2016 年 9 月	第 50 回日本実験動物技術者協会総会
IgE 免疫複合体のアレルギー反応依存的な皮膚への斑点状の分布	2016 年 11 月	第 130 回日本薬理学会近畿部会
皮膚への免疫複合体の斑点状の分布を指標とした IgG 依存的アレルギーモデル (G-ASDIS) の確立とそれを利用した抗アレルギー物質の探索	2017 年 3 月	日本薬学会 第 138 年会
III 学会等および社会における主な活動		
特になし		

専任教員の教育・研究業績

所属	薬学基礎教育センター	職名	准教授	氏名	児玉 典子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年～現在に至る	抗生物質学・感染制御学（微生物学・生化学含）の国家試験対策としてCBT演習（2013年から基礎薬学演習と変更）や薬学総合講座の講義をスライド及び要約プリントを配布して行う。			
	2009年～現在に至る	3年生前期開講科目の抗生物質学を担当し、オフィスアワーなど開催して学習支援を行う。2014年からは後期開講科目の感染制御学に変更し、統合的科目（感染微生物・感染機構・発症・治療・予防）として位置付け、考える授業を行う。			
	2008年～現在に至る	3年生通年開講科目の薬学英語入門Ⅰ・Ⅱを担当する。2011年からは生命科学を題材としたオリジナルテキストを用いて、大学での専門科目の復習及び統合能力を向上させるために英語を介した生命科学を学ぶ授業（内容言語統合型学習：CLIL）を行う。また授業に協調学習を積極的に導入し、TBL法からジグソー法を活用した学習効果を検討中である。			
	2009年～現在に至る	1年生後期開講科目の生化学Ⅰ（糖質）を担当し、他の専門教科への橋渡しの授業を行う。2015年からは1年前期開講となる。			
	2008年～現在に至る	薬学基礎教育センターにて留年生の学習及び生活指導を行う。			
	2008年～現在に至る	薬学基礎教育センターにてPESS（学生の学生による薬学学習支援活動）制度の企画・実施を行う。			
	2009年～2010年	薬学基礎教育センターにてTOEIC初級勉強会（500～600点目標）や英語でニュースを読むなどの勉強会を開催する。			
	2009年～現在に至る	薬学基礎教育センターにて学習カウンセリングを行う。			
2013年～現在に至る	薬学教育センターにて、入学時のプレースメント（化学、生物、物理）を実施するとともに、1年後期終了後のリプレースメントテスト（生物）の作成及び実施を1年生対象に行い、学生の学力レベルを統計的に明らかするとともに、入学区分による学生の学習能力を追跡調査を行う。				

2 作成した教科書、教材、参考書	2012年3月  2016年3月  2016年9月	HUMAN READER 生命科学英語 -life and disease-  HUMAN READER 生命科学英語 -life and disease- 改訂版  感染制御学 I (細菌感染症・ウイルス感染症・寄生虫感染症) 授業テキスト
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 4 その他教育活動上特記すべき事項	2015年3月  2009年10月～現在 2010年10月～現在 2010年12月～2014年12月 2012年 4月～現在 2013年9月～現在	日本薬学会 (第135年会) シンポジウム 講演 キャリアカウンセラー資格取得 (CCE, Inc. 認定 GCDF-Japan) ゲシュタルト療法研修修了資格 (日本心理療法士協会) TA心理カウンセラー2級資格取得 (日本心理療法協会) 認定心理士資格取得 (日本心理学会) 睡眠健康指導士上級 (日本睡眠教育機構認定)
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kodama N., Tanaka M., Tatumi A., Mizutani N., Fuzinami A., Ikehata M., Kawanishi K., Koyama J., Hogue, WR., Takeuchi A.	研究ノート	Libra 2014, 14, 29-61. "薬学系統合教科の理解を促進する構成主義的内容言語統合型学習 (CLIL) 法"
Kodama N., Koyama J.	研究ノート	Libra 2015, 15, 41-48. "神戸薬科大学初年次教育における生命科学の理解を目指した知識構成型ジグソー法の試み"
Kodama N., Tanaka M., Tatumi A., Mizutani N., Fuzinami A., Hosokawa M., Hogue, WR., Koyama J., Takeuchi A.	研究ノート	Libra 2016, 16, 1-15. "チーム基盤型学習 (TBL) 法と学生の学習動機に及ぼす影響"
Kodama N., Koyama J.	総説	YAKUGAKUZASSHI, 2016, 136 (3), 381-388. "初年次教育における統合教科の学習を促進するファクターとしてのジグソー法の試み"
Kodama N., Koyama J.	研究ノート	Libra 2017, 17, 1-14. "初年次教育における反転授業とジグソー法を組み合わせたアクティブ・ラーニングの試み"

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
初年次教育における統合教科の学習を促進するファクターとしてのジグソー法の試み	2015年3月	日本薬学会（第135年会）口頭発表
初年次教育における反転授業とジグソー法を組み合わせたアクティブ・ラーニングの試み	2016年3月	日本薬学会（第136年会）ポスター発表
神戸薬科大学における知識構成型ジグソー法を用いた協調学習の実践と課題ージグソー法の成果と学習意欲・授業評価の関連性を考察するー	2016年9月	日本薬学教育学会（第1年会）ポスター発表
KJ法を用いた協調学習が学生の学習意欲及び授業意欲に及ぼす影響	2017年3月	日本薬学教育学会（第2年会）ポスター発表
神戸薬科大学薬学基礎教育センターにおける適切な自律性支援の検討ー学習意欲研究における学習の動機づけと自己決定感との関連ー	2017年9月	日本薬学教育学会（第2年会）ポスター発表
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

灘中  
専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 准教授	氏名 灘中 里美
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） (1) 本学薬学部学生への教育	2008年4月-現在に至る	<p>学部学生に分子生物学の講義を行っている。</p> <p>1) 担当している分野の進歩は著しいので、講義担当のコアカリの SB0s を満たすように努めながら、講義に関連する内容における最近の発見や注目されている事項（新しい遺伝子医薬品の開発例や病因の解明など）についてプリントを作成し、適宜配付している。</p> <p>2) ベーシックな分子生物学的知識を習得する課目であるが、できるだけ医療に関連するよう解説し、高学年で習う臨床系の科目の理解につながる基盤をつくってもらえるように努めている。</p> <p>3) 1回の講義では、なるべくテーマを絞り、1つのテーマに関して単回で終了するように心掛けている</p> <p>4) 講義した内容が薬剤師国家試験にどのように出題されているかを知ってもらうために、過去に出題された国家試験の問題を10～20問選んでプリントで配布して解説を行い、これらの問題に関連したものを定期試験に出題している。</p> <p>5) 講義内容を深く理解してもらうために、文章問題を演習として取り入れている。また、昨今の国家試験に対応できる能力を養うため、定期試験ではマーク式問題だけでなく思考力を問う文章問題を出題している。</p>
	2007年4月-現在に至る	<p>学部学生に生物学系の実習指導を行っている。</p> <p>1) 実習前の導入講義では、講義で習った基礎知識を復習するとともに、実習内容が医学・薬学の領域で実際に活用されていることが想像できるように努めている。また、コンパクトにまとめて30分以内で説明が終了するように心掛けている。</p> <p>2) 実習時間後に学生個々と教員が実習内容について質疑応答を行い、その日に行った実習を理解できるようにしている。</p>

<p>(2) 本学大学院生への教育</p>	<p>2007年4月-現在に至る</p>	<p>学部学生に卒業研究の指導を行っている。</p> <p>1) 受け身の講義と違い、参加型の実習であるので、学生自身が問題解決していけるようなトレーニングを行えるよう心掛けている。具体的には、学生のレベルに合った課題を与え、実験目的や方法を説明した後は、各自で日常の実験計画を立ててもらい、学生自身の力で課題を解決していくようなスタイルをとっている。学生だけでは目標到達が難しい場合はサポートするが、目標をクリアできない場合においても、答えのない課題に対してアプローチしていくプロセスを経験してもらうように心掛けている。</p> <p>2) 論理的な考え方や表現力が身に付くように、定期的に研究内容を学生にまとめさせ、発表するためのサポートを行っている。</p> <p>3) 卒業研究I, II で行った研究活動の成果をまとめる卒業論文の作成、および研究成果を発表する際のプレゼンテーションの指導を行っている。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p>	<p>2007年4月-現在に至る</p>	<p>大学院特論（生化学特論）の講義を担当している。研究活動を通して知り得た最新の知識を講義で紹介できるよう努めている。</p>
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p>	<p>2011年4月-現在に至る</p>	<p>生物学系II実習（生化学実習）テキスト</p>
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p>	<p>2008年4月-現在に至る</p>	<p>分子生物学II 補助プリント</p>
<p>特になし</p>		
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p>		
<p>II 研究活動</p>		
<p>1. 著書・論文等</p>		
<p>氏名</p>	<p>種別</p>	<p>内容</p>
<p>Taniguchi M, Nadanaka S, Tanakura S, Sawaguchi S, Midori S, Kawai Y, Yamaguchi S, Shimada Y, Nakamura Y, Matsumura Y, Fujita N, Araki N, Yamamoto M, Oku M</p>	<p>論文</p>	<p>Cell Struct. Funct. 2015, 40(1), 13-30. "TFE3 is a bHLH-ZIP-type transcription factor that regulates the mammalian Golgi stress response."</p>
<p>Nadanaka S, Kinouchi H, Kitagawa H.</p>	<p>論文</p>	<p>Biochem. Biophys. Res. Commun. (2016) 480, 234-240. "Histone deacetylase-mediated regulation of chondroitin 4-O-sulfotransferase-1 (Chst11) gene expression by Wnt/<math>\beta</math>-catenin signaling."</p>

Nadanaka, S., Kinouchi, H., Kitagawa, H.	論文	J. Biol. Chem. (2018) 293, 444-465 "Chondroitin sulfate-mediated N-cadherin/ $\beta$ -catenin signaling is associated with basal-like breast cancer cell invasion."
Nadanaka, S., Kitagawa, H.	論文	Biochim. Biophys. Res. Commun. (2018) 1862, 791-799 "Exostosin-like 2 regulates FGF2 signaling by controlling the endocytosis of FGF2."
Miyata, S., Nadanaka, S., Igarashi, M., Kitagawa, H.	論文	Front. Integr. Neurosci. (2018) 12: 3 Structural Variation of Chondroitin Sulfate Chains Contributes to the Molecular Heterogeneity of Perineuronal Nets.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ヘパラン硫酸の合成異常が神経発生と行動に与える影響についての解析	2015/5/16	第62回日本生化学会近畿支部例会
神経細胞の分化過程におけるコンドロイチン硫酸の合成制御機構	2015. 12.1-4	BMB2015
Dysregulated GAG Biosynthesis Affects Inhibitory Interneuron Proliferation During Neural Development and Causes Behavioral Disorders	2016. 1. 14-16	The 3rd International Symposium on Glyco-Neuroscience
神経細胞の分化を調節するコンドロイチン硫酸の動的な生合成制御機構	2016.09.25-27	第89回日本生化学会大会（仙台）
ヘパラン硫酸の合成異常が神経発生と行動に与える影響についての解析	2016.09-01~03	第35回日本糖質学会年会（高知）
III 学会等および社会における主な活動		
入会している学会	日本分子生物学会	
	日本生化学会	
	細胞生物学会	
	糖質学会	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 放射線管理室	職名 准教授	氏名 安岡 由美
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2013年～現在に至る 2009年～現在に至る 2010年, 2014年, 2018年 1990年～現在に至る 1991年～現在に至る 1991年～現在に至る 2010年～現在に至る	放射化学：放射線に関する基礎知識 放射線管理学：放射線に関する総合的理解 早期体験学習：問題意識を持ち早期体験学習への積極性の育成 物理化学系実習(放射線実習)：放射性物質の安全取扱い（2012年より見学実習担当） ゼミ生の教育：環境放射能・公衆衛生 放射線業務従事者教育訓練：法令を順守と放射性物質の取り扱い法 実務実習事前教育:放射性医薬品の取り扱いについて
2 作成した教科書、教材、参考書	2007年～現在に至る	物理化学系実習(放射線実習) テキスト
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tajika, Y., Yasuoka, Y., Nagahama, H., Suzuki, T., Homma, Y., Ishikawa, T., Tokonami, S., Mukai, T., Janik, M., Sorimachi, A., Hosoda M.,	論文	Journal of Radioanalytical and Nuclear Chemistry 2013, 295(3), 1709-1714. "Radon concentration of outdoor air: measured by an ionization chamber for radioisotope monitoring system at radioisotope institute".
Kobayashi, Y., Yasuoka, Y., Omori, Y., Nagahama, H., Sanada, T., Muto, J., Suzuki, T., Homma, Y., Ihara, H., Kubota, K., Mukai, T.	論文	Journal of Environmental Radioactivity 2015, 146, 110-118. "Annual variation in the atmospheric radon concentration in Japan".
Hayashi, K., Yasuoka, Y., Nagahama, H., Muto, J., Ishikawa, T., Omori, Y., Suzuki, T., Homma, Y., Mukai, T.,	論文	Journal of Environmental Radioactivity 2015, 139, 149-153. "Normal seasonal variations for atmospheric radon concentration: A sinusoidal model."
Tanaka, A., Minami, N., Yasuoka, Y., Iimoto, T., Omori, Y., Nagahama, H., Muto, J., Mukai, T.	論文	Radiation Protection Dosimetry 2017, 177, 324-330. "Accurate measurement of indoor radon concentration using a low-effective volume radon monitor."
Goto, M., Yasuoka, Y., Nagahama, H., Muto, J., Omori, Y., Ihara, H., Mukai, T.	論文	Radiation Protection Dosimetry 2017, 174, 412-418. "Anomalous changes in atmospheric radon concentration before and after the 2011 northern Wakayama Earthquake (Mj 5.5)."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
連続測定におけるラドン濃度測定器の比較	2016年6月	日本保健物理学会第49回研究発表会発表
活性炭型ラドン検出器と液体シンチレーションカウンタによる空气中ラドン濃度決定	2016年10月	第66回日本薬学会近畿支部大会

アイソトープ実験施設の排気モニタによる東北地方太平洋沖地震 (Mw9.0) に先行する大気中ラドン濃度変動の検討	2017年3月	日本薬学会第137年会
バブリング法による水中ラドン濃度測定について	2017年3月	第18回「環境放射能」研究会
活性炭型ラドン検出器による屋内ラドン濃度測定の検討	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1990年～現在に至る	日本薬学会会員	
1990年～現在に至る	日本アイソトープ協会	
1990年～現在に至る	日本保健物理学会会員	
2001年～現在に至る	日本放射線安全管理学会会員	
2002年11月～現在に至る	放射線医学総合研究所 客員協力研究員	
2006年～現在に至る	日本地球化学会会員	
2009年～現在に至る	日本温泉科学会	
2011年9月～現在に至る	日本地震学会	
2011年4月～2012年3月	日本放射線安全管理学会 メンタルケア委員会 委員	
2011年9月～2013年3月	日本保健物理学会 専門研究会「暮らしの放射線Q&A対応委員会委員」	
2011年9月11日	神戸市消防局 感謝状	
2011年11月1日	平成23年度主任者部会年次大会ポスター賞	
2014年7月～現在に至る	岡山県 環境放射線等測定技術委員会委員	
2016年10月～現在に至る	ISO/TC147(水質) /SC3 (放射線測定) 国内審議委員会委員	
2017年10月12日	日本アイソトープ協会 平成29年度放射線安全取扱部会表彰 放射線安全取扱部会功労表彰	

## 専任教員の教育・研究業績

所属	機能性分子化学研究室	職名	准教授	氏名	田中 将史
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2007年～現在 2008年～現在 2017年～現在 2012年～2014年 2016年～現在 2014年～2016年 2014年・16年	物理化学系実習（2年次後期） 薬学英语入門I（3年次前期） 生物物理化学（3年次前期） 薬学入門（1年次前期、兼任） 物理化学Ⅲ（2年次後期、兼任） 物理化学Ⅳ（3年次前期） 物理系基礎創薬学特論（大学院）		
2	作成した教科書、教材、参考書				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4	その他教育活動上特記すべき事項				
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Takase H., Tanaka M.*, Miyagawa S., Yamada T., Mukai T.		論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 2014, 444 (1): 92-97. "Effect of Amino Acid Variations in the Central Region of Human Serum Amyloid A on the Amyloidogenic Properties"		

Takase H., Furuchi H., Tanaka M.*, Yamada T., Matoba K., Iwasaki K., Kawakami T. Mukai T.	論文	Biochim. Biophys. Acta 2014, 1841 (10): 1467-1474. "Characterization of Reconstituted High-Density Lipoprotein Particles Formed by Lipid Interactions with Human Serum Amyloid A"
Tanaka M.*, Hosotani A., Tachibana Y., Nakano M., Iwasaki K., Kawakami T., Mukai T.	論文	Langmuir 2015, 31 (46): 12719-12726. "Preparation and Characterization of Reconstituted Lipid-Synthetic Polymer Discoidal Particles"
Takase H., Tanaka M.*, Yamamoto A., Watanabe S., Takahashi S., Nadanaka S., Kitagawa H., Yamada T., Mukai T.	論文	Amyloid 2016, 23 (2): 67-75. "Structural Requirements of Glycosaminoglycans for Facilitating Amyloid Fibril Formation of Human Serum Amyloid A"
Tanaka M.*, Nishimura A., Takeshita H., Takase H., Yamada T., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids 2017, 202: 6-12. "Effect of Lipid Environment on Amyloid Fibril Formation of Human Serum Amyloid A"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
アポE由来ペプチドを基盤とする脂質ナノディスクの腫瘍細胞への集積性評価	2015年3月	日本薬学会第135年会
SAA-HDLモデル粒子の作製および脂質存在下でのアミロイド線維形成評価	2015年8月	第3回日本アミロイドーシス研究会学術集会
合成高分子を用いたディスク型脂質ナノ粒子の作製と物性評価	2016年3月	日本薬学会第136年会
AAアミロイドーシス発症に及ぼすグリコサミノグリカン硫酸基の影響	2016年5月	第63回日本生化学会近畿支部例会

合成高分子を用いたHDL模倣ナノ粒子の作製と生体イメージング応用の検討	2016年7月	第26回バイオ・高分子シンポジウム
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
	日本薬学会正会員	
	日本生化学会正会員	
	日本膜学会正会員	
	日本ペプチド学会正会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	医療統計学研究室	職名	准教授	氏名	森脇 健介
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）				
	臨床研究分野での教育活動	2008-2010年	神戸大学大学院医学研究科 医療人GP クリニカルリサーチエキスパート特修プログラムのもとでレクチャーやセミナー、研修の企画立案等の教育活動に従事。（統計解析セミナーの実施、事例に基づく臨床研究教育プログラムの開発、教育DVDの開発、米国GCRC研修企画）		
	診療情報管理分野での教育活動	2010-2014年	診療情報管理士の資格対策責任者として、通常講義に加え、エクストラの対策講座の企画・実施、Eラーニングシステムの開発・運用、学外実習の取りまとめを行った。（担当科目：医療情報学、医療統計学、国際疾病分類論、診療情報管理論、診療情報管理論、診療情報管理演習、医療情報演習、医療福祉施設基礎実習）		
	医療統計学・医療技術評価分野での教育活動	2014年-	薬剤師に求められるベーシックな統計学の教育（統計学I・II）に加え、CROや製薬企業など臨床開発業界あるいは基礎・臨床研究の分野で活躍できる人材育成を視野に入れたアドバンス教育（医療統計学I・IIB・医薬経済学）に従事。		
2	作成した教科書、教材、参考書				
	臨床研究の方法論とマネジメント	2009年10月	3. 臨床研究の実際（統計解析の基礎） 3-1. データマネジメントI (p103-116), 3-2. データマネジメントII (p117-122), 3-3. 基本統計量と仮説検定 (p123-140) 統計解析ソフトSTATAの操作方法について解説。データマネジメントや基本的な統計解析の実施方法について解説。		
	スタンダード 薬学シリーズ第9巻 薬学と社会(第3版)	2010年9月	第7章薬剤経済学SB029代表的な症例をもとに、薬物治療を経済的な観点から解析できる(知識・技能)部分を執筆。		
	ヘルスケアサイエンスのための医薬経済学用語集 ISPOR BOOK OF TERMS 日本語版	2010年4月	企画・編集: ISPOR用語集翻訳委員会国際医薬経済学・アウトカム研究学会 (ISPOR) により編纂された用語集—原題 “Health Care Cost, Quality, and Outcomes — ISPOR BOOK OF TERMS” の日本語版であり、主に公衆衛生学関連の用語部分の翻訳を担当。		
	詳説薬剤経済学—限られる社会資源から最高の医療を—	2011年8月 (初版) 2013年8月 (2版) 2017年3月 (3版)	薬学部生を対象とした教科書であり、医療経済評価の分析・シミュレーションの手法について、具体的な事例を用いながら解説した。		

<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p> <p>Kimura S, Takahashi HE , Yamamoto N, Sakuma M, Aoki K, Tojo T, Ishihara M, Moriwaki K, Endo N</p> <p>Aoki K, Sakuma M, Moriwaki M, Kimura S, Yamamoto N, Kawashima T, Takahashi H.E., Endo N</p>	<p>2012年9月</p> <p>2013年8月</p>	<p>Module-based interprofessional education is useful in learning for prevention of secondary fracture after hip fracture in pre- and post-qualification. FFN Global Congress 2012. 9. 6-8. Berlin, Germany.</p> <p>Workshops for inter-professional collaboration improve the quality of community-based health and social care in preventing secondary fracture after hip fracture.FFN Global Congress 2013. 8. 29-31. Berlin, Germany.</p>
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p>		
<p>II 研究活動</p>		
<p>1. 著書・論文等</p>		
<p>氏名</p>	<p>種別</p>	<p>内容</p>
<p>Moriwaki K, Mouri M, Hagino H.</p>	<p>論文</p>	<p>Cost-effectiveness analysis of once-yearly injection of zoledronic acid for the treatment of osteoporosis in Japan. Osteoporosis International 2017 in press</p>
<p>Moriwaki K, Noto S.</p>	<p>論文</p>	<p>Economic evaluation of osteoporosis liaison service for secondary fracture prevention in postmenopausal osteoporosis patients with previous hip fracture in Japan. Osteoporosis International 2016 28(2):621-632</p>
<p>Yoshimura M, Moriwaki K, Noto S, Takiguchi T.</p>	<p>論文</p>	<p>A model-based cost-effectiveness analysis of osteoporosis screening and treatment strategy for postmenopausal Japanese women. Osteoporosis International 2016 28(2):643-652</p>
<p>Fukuda H, Moriwaki K.</p>	<p>論文</p>	<p>Cost-effectiveness analysis of safety-engineered devices. Infection Control &amp; Hospital Epidemiology 2016 37(9):1012-21</p>
<p>Shiroiwa T, Fukuda T, Ikeda S, Takura T, Moriwaki K.</p>	<p>論文</p>	<p>Development of an Official Guideline for the Economic Evaluation of Drugs/Medical Devices in Japan. Value in Health 2017 20(3):372-378</p>

2. 学会発表（平成27年度に行った学会発表）		
演題名	発表年・月	学会名
エクセルを用いた確率的感度分析の実践	2017年12月	国際薬剤経済アウトカム研究学会（ISPOR）日本部会 賛助会員向け企画ワークショップ. 招待講演（東京）
骨粗鬆症治療におけるTreat to Targetと費用対効果. シンポジウム：骨粗鬆症におけるtreat to target	2017年5月	第90回日本整形外科学会学術総会. 招待講演（仙台）
費用対効果の視点から見た骨粗鬆症治療. PARTNER “高齢者”の全身管理を考える	2017年4月	武田薬品工業Webセミナー
悪性腫瘍に対する医療技術の費用対効果評価の手法と課題	2017年3月	JMIRI シンポジウム「Medical data science day」. 招待講演（東京）
Cost-effective thresholds of $\Delta$ NTCP for the use of proton beam therapy	2017年3月	4th GI-CoRE Medical Science and Engineering Symposium Model-based Approach: NTCP & TCP. 招待講演（北海道）
III 学会等および社会における主な活動		
平成17年9月～	臨床経済学会・ISPOR日本部会（評議員：平成27年4月～）	
平成18年5月～	International Society for Pharmacoeconomics and Outcomes Research	
平成22年4月～	日本骨粗鬆症学会	

専任教員の教育・研究業績

所属	微生物化学研究室	職名	准教授	氏名	中山 喜明
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)		2014年より2016年	「生物学系Ⅱ実習」(3年次後期)を分担した。微生物の取扱い、検出、同定についての基本的技能などを指導した。		
		2015年より現在	「アクティブラボ」(1-3年次通年)を分担した。低学年次の研究室未配属学生に対して微生物化学研究室で行なっている研究について、体験学習を行った。		
		2015年より現在	「薬学入門」(1年次前期)を分担した。生物系薬学に関する基礎的講義を実施した。SGDやピア評価により能動的学習の導入を実践した。		
		2016年より現在	「微生物化学実習」(2年次後期)を分担した。微生物の取扱い、検出、同定についての基本的技能などを指導した。		
		2017年より現在	「免疫学」(2年次後期)を分担した。		
(2) 本学薬学部学生への研究指導		2014年より現在	研究室に配属された学部学生に対して、研究指導を実施した。		
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育		2013年, 2017年	「生命科学特論」を分担。大学院生に対して、講義を実施した。		
(4) 他大学での講義		2015年	京都大学大学院薬学研究科「基盤生物化学概論・生命科学概論講義」を分担した。		
2 作成した教科書、教材、参考書			該当なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			学術論文 八巻 耕也, 上田 昌史, 上田 久美子, 江本 憲昭, 水谷 暢明, 池田 宏二, 八木 敬子, 田中 将史, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 北河 修治 薬学雑誌., 2016, 136, 1051-1064. “基礎から臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の学習効果”		

		<p>学術論文              八卷 耕也, 池田 宏二, 上田 久美子, 土生 康司, 中山 喜明,              武田 紀彦, 森脇 健介, 和田 昭盛, 小山 淳子, 児玉 典子, 北河 修治              薬学雑誌., 2017, 137, 1285-1299.              “分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニツッペーパー導入が              生み出す学習意欲と学習効果”</p>
4 その他教育活動上特記すべき事項	<p>2016年より現在                  2018年6月14日</p>	<p>実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップのタスクフォース                  兵庫県立小野高校への出張授業「薬学とは」</p>
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Nakayama, Y., Nakamura, N., Tsuji, D., Itoh, K., Kurosaka, A.	著書	“Genetic Diseases Associated with Protein Glycosylation Disorders in Mammals” Genetic Disorders, Maria Puiu (Ed.), ISBN: 978-953-51-08866-3, InTech (2013)
Nakayama, Y., Wada, A., Inoue, R., Terasawa, K., Kimura, I., Nakamura, N., Kurosaka, A.	論文	“A rapid and efficient method for neuronal induction of the P19 embryonic carcinoma cell line.” Journal of Neuroscience Methods, 227, 100-6. (2014)
Nakayama, Y., Nakamura, N., Kawai, T., Kaneda, E., Takahashi, Y., Miyake, A., Itoh, N., Kurosaka, A.	論文	“Identification and expression analysis of zebrafish polypeptide $\alpha$ -N-acetylgalactosaminyltransferase Y-subfamily genes during embryonic development.” Gene Expression Patterns : GEP. 16(1), 1-7. (2014)
Masuda Y., Nawa D., Nakayama Y., Konishi M., Nanba H.	論文	“Soluble $\beta$ -glucan from Grifola frondosa induces tumor regression in synergy with TLR9 agonist via dendritic cell-mediated immunity.” Journal of Leukocyte Biology. 98(6), 1015-1025. (2015)

Nakayama, Y., Masuda, Y., Ohta, H., Tanaka, T., Washida, M., Nabeshima, Y., Miyake, A., Itho, N., Konishi, M.	論文	“1. Fgf21 regulates T-cell development in the neonatal and juvenile thymus.” Scientific Reports. 7(1)310. (2017)
2. 学会発表 (平成27年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
Galnt17/Wbscr17 knockout mice shows decreased growth and hyperprolactinemia	2015年9月	Glyco2015
胸腺におけるFgf21の役割	2015年12月	BMB2015
不飽和脂肪酸負荷により誘導されるFgf21の脂質代謝機構の解析	2016年5月	生化学会近畿支部会
FGF21は胸腺細胞の成熟化を促進する	2016年5月	生化学会近畿支部会
III 学会等および社会における主な活動		
2004年8月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2012年8月～現在に至る	日本糖質学会会員	
2017年11月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 臨床心理学研究室	職名 准教授	氏名 中島 園美
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年4月～現在に至る	「社会心理学」対人関係における様々な理論や実験を概説し、自己と他者の考えや行動への理解が深まることを目的とした。さらに、それらの理論を、しっかり自分にひきつけて考えることを目的とし、理論に関連する学生自身のエピソード、それに基づく自己分析や自分の課題などを小レポートとして書いて提出することを求め、学生の主体的・能動的な学習態度を引き出すという参加型授業も導入した。小レポートについては、次回の授業にて学生にフィードバックを行い、小レポートへの積極的な関与を高めたり、お互いの考えがシェアできるようにした。
	2012年4月～現在に至る	「総合文化演習」大学生の発達支援教育プログラムとして、将来のビジョンを獲得することを目的としたソリューション・フォーカスト・アプローチを導入した表現療法を実施している。さらに、疾患に関連する映画を用いたグループ発表を行い、患者や患者の家族への理解や生と死、医療のあり方について考えを深めた。また毎回SGDと小レポートを導入し、自己表現力や言語化能力を養った。プレゼンテーション力を高めるために、学生にグループ発表と個人での発表の2回経験できるプログラムにしている。その際、学生が到達目標を明確に理解できるように、ルーブリックを作成し、学生自身で達成度を評価できるようにした。それによって、自分の課題を発見することを目指した。
	2015年4月～2017年8月	「臨床心理学」医療人として、患者と患者の家族への共感を基盤としたコミュニケーション能力を養うために、各疾患毎に心理的特徴を中心に概説し、望ましい関わり方を提示した。さらに、チーム医療の一員として多職種の中で適切なコミュニケーションが発揮できるように連携の留意点も解説した。さらに講義内容が医療現場で実践できるように、ケースを設定して、ロールプレイ、SGDを導入し、最後に自身のロールプレイを振り返り、考察や今後の自身の課題を小レポートにまとめることを求めた。次回の授業にて数名分の小レポートを読み上げてコメントをし、小レポートへの積極的な関与を高めたり、より多くの適切な対応例を知ることができるようにした。
	2015年9月～現在に至る	「人の行動と心理」全人的医療を遂行できる医療人を養成するために、患者と家族の心理社会的側面を理解したり、医療現場でのコミュニケーション力の基盤を形成することを目指し、1年次に「人の行動と心理」、2年次の前期で「医療コミュニケーション」、後期で「医療コミュニケーション演習」と体系的・段階的なカリキュラムとなっている。まず、1年次での「人の行動と心理」では、人の行動と心理のメカニズムやプロセスを学び、患者や家族の心理的な問題をアセスメントし適切に援助するための基盤を形成する内容となっている。授業の後半は、コミュニケーション・トレーニングである「アサーション」ワークを導入した。内容は、学生の身近な問題をケースとして取り上げ、自分の考えや気持ちを、相手の立場や気持ちも考慮しながら、適切な言葉で伝え、相互尊重の関係を築くことのできるコミュニケーション・スキルの獲得を目的とした構成にしている。そして、次回の授業において、学生のリポートの中のいくつかを取り上げフィードバックを行い、同級生の適切な表現をモデリングできるよう意図している。

	2016年4月～現在に至る	「医療コミュニケーション」1年次の「人の行動と心理」で学んだことを基盤として、2年次の本授業では、医療人として、患者と患者の家族への共感的なコミュニケーションを実践できるように、各疾患毎に心理的特徴を中心に説明し、望ましい関わり方を提示した。さらに、チーム医療の一員として多職種の中で適切なコミュニケーションが発揮できるように連携の留意点も解説した。授業の後半では、コミュニケーショントレーニング「アサーション」の「傾聴」ワークを導入し、ロールプレイ、SGDを用いている。最後に自身のロールプレイを振り返り、考察や今後の自身の課題を小レポートにまとめることを求めた。次回の授業にて数名分の小レポートを読み上げてコメントをし、小レポートへの積極的な関与を高めたり、より多くの適切な対応例を知ることができるようにした。
	2016年10月～現在に至る	「医療コミュニケーション演習」「医療コミュニケーション」で学んだことを基盤とした患者や家族への支援や医療チームのメンバーへの対応する実践力を獲得するために、臨床事例を設定し、小グループで、ロールプレイ、シナリオ作り、SDGを行った。小グループでの活動を通して、チームでの問題発見・解決能力を養うことも意図している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2013年9月	「教育プログラムとしてのコラージュ療法－誘発コラージュ法と認知物語療法を導入した試み－」日本心理臨床学会第32回秋季大会 大会シンポジウム発表 口頭発表 抄録集111, 2013
	2013年10月	「コラージュ療法に認知物語アプローチを導入した教育プログラム開発研究－コラージュ作品を用いてのグループ・ディスカッションの効果－」日本コラージュ療法学会第5回大会 一般演題 口頭発表 抄録集24-25, 2013
4 その他教育活動上特記すべき事項	2015年10月	第70回リカレントセミナー 講演「薬剤師のためのコーチング - コーチングスキルを用いて患者さんとのコミュニケーション力をアップしよう」 -
	2016年6月	平成28年度喫煙者の「禁煙教育」講演「認知行動アプローチで禁煙ワーク」場所：神戸薬科大学
	2016年6月	第1回健康サポートセミナー 講演「幸福へのヒントを得る心理学」場所：東灘区民センター（うはらホール）8階 会議
	2016年9月	平成28年度 兵庫地区大学月曜懇談会 9月例会 講演「軽度発達障害の特徴と学生支援」場所：神戸薬科大学
	2017年3月	がん哲学学校 in 神戸 第12回メディカル・カフェ 講演「コラージュ・ワーク 自分を見つめるアート」場所：神戸薬科大学
II 研究活動		

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
中島園美	論文	「喘息患者の自己管理不良に影響を及ぼす情動認知-アレキシサイミアと共感性からの検討-」カウンセリング研究 46 (2), 73-82. 2013
中島園美・片岡葉子	論文	「成人アトピー性皮膚炎における「体験型ストレス・マネジメント」アレルギーの臨床 33(2), 62-65. 2013
中島園美	論文	「コラージュ療法に誘発コラージュ法と認知物語療法を導入した教育プログラム開発研究-イメージ変化と認知の変化の事例検討-」コラージュ療法学研究 5(1), 59-70. 2014
中島園美	論文	論文題目「アトピー性皮膚炎患者の精神的ストレス反応に影響を及ぼすコーピングに関する研究-ストレス予防因子とリスク因子としてのコーピング探索-」大阪大学 平成27年度 博士論文 博士(人間科学)学位授与番号
2. 学会発表 (平成25～29年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
重症アトピー性皮膚炎患者に対する寛解導入兼教育入院の心身学的効果：退院6か月後のコーピングの変化	2016年6月	第57回日本心身医学会総会
アサーションを導入したコミュニケーション教育プログラムによる認知と行動の変化-医療コミュニケーション力養成のための基盤的コミュニケーション・プログラムの試み-	2016年8月	第1回日本薬学教育学会大会
成人アトピー性皮膚炎患者の精神的ストレス反応の予防因子とリスク因子のコーピング探索	2016年9月	日本心理臨床学会第35回秋季大会
アトピー性皮膚炎症状にまつわるネガティブ体験がコーピング体験に及ぼす影響-揺るぎ行動と「自責」コーピングに焦点をおいて	2017年9月	日本心理臨床学会第36回秋季大会
薬学生の高齢者とのコミュニケーション力に影響を及ぼす要因の探索-今後の教育プログラム作成への活用と展望 (4) -	2017年8月	第2回日本薬学教育学会大会

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2006年4月～現在に至る	日本心理臨床学会員
2009年4月～現在に至る	カウンセリング学会員
2009年4月～2017年11月	地方独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪はびきの医療センター（旧大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター） 教育入院プログラム「ストレス・マネジメント」心理教育担当、アトピー性皮膚炎患者および家族へのカウンセリング担当
2013年4月～現在に至る	日本コラーゲ療法学会員
2014/10/15	帝塚山学園（帝塚山大学） 講演 教育セミナー「ストレスマネジメント-対人関係を円滑にするコミュニケーション-」
2014/12/14	「重症アトピー性皮膚炎患者への長期的支援としての集団コラーゲ療法-作品と認知物語療法を通して表現された心的世界の検討-」 第62回京都文教コラーゲ療法研究会 講演
2015年12月～現在に至る	日本心身医学会員

専任教員の教育・研究業績

所属 病態生化学研究室	職名 講師	氏名 多河 典子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2006年10月～2016年9月 2009年10月～ 2013年10月～ 2017年4月～ 2009年4月～9月 1987年4月～ 2005年9月～ 2008年～ 1987年4月～ 1987年4月～1990年3月	学部3年生 臨床検査学 I 講義 学部1年生 生化学 I 講義 学部3年生 内分泌学 講義（2コマ） 学部3年生 臨床生化学 講義（科目名変更 旧 臨床検査学 I） 学部1年生 早期体験学習指導 学部4～6年生に卒業研究I・II指導 学部6（旧4）年生 総合薬学講座講義（2（1）コマ） 病態解析治療学特論（病態生化学特論） 1～2コマ 学部3（4）年次生 臨床検査（臨床化学）実習指導 学部4年生 臨床検査総論実習指導
2 作成した教科書、教材、参考書	2006年10月～ 2009年10月～	臨床生化学（臨床検査学 I） 講義プリント 生化学 I 講義用プリント
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2009年～2011年	推薦入学者の宿題作成、質問会で解説を行った。
4 その他教育活動上特記すべき事項	2010. 11. 10, 2011. 11. 11, 2014. 6. 21	出張講義 県立明石南高校、県立姫路南高校、県立小野高校
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tagawa N, Kubota S, Kato I, Kobayashi Y.	論文	J Endocrinol. 2013;218(3):311-20. "Resveratrol inhibits 11β-hydroxysteroid dehydrogenase type 1 activity in rat adipose microsomes."
Kimura M, Shindo M, Moriizumi T, Tagawa N, Fujinami A, Kato I, Uchida Y.	論文	Chem Pharm Bull (Tokyo). 2014;62(6):586-90. "Salusin-β, an antimicrobially active peptide against Gram-positive bacteria."

Tagawa N, Kubota S, Kobayashi Y, Kato I.	論文	Steroids. 2015;93:77-86. "Genistein inhibits glucocorticoid amplification in adipose tissue by suppression of 11 $\beta$ -hydroxysteroid dehydrogenase type 1."
2. 学会発表（平成28年度に行った学会発表）		
演題名	発表年・月	学会名
マウス肝臓におけるエネルギー代謝関連ペプチドadropinの発現について Adropin and Enho expression in mouse liver 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬大 2) 鹿児島大院医歯	2016. 3. 29	日本薬学会第136年会
肥満モデルマウスTSODにおけるghrelinの摂食促進作用について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学 病態生化学研究室 2) 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科心身内科学分野	2016. 4. 25	第89回日本内分泌学会学術総会
肥満モデルマウス肝臓及び視床下部でのadropinの発現について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学 病態生化学研究室 2) 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科心身内科学分野	2016. 10. 7	第37回日本肥満学会
エネルギー代謝関連ペプチドadropinの発現について ○多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学 病態生化学 2) 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科	2016. 12. 3	第56回日本臨床化学会年次学術集会
肥満モデルマウスにおけるエネルギー代謝関連ペプチドadropinの発現について ○多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学 病態生化学 2) 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科	2017. 4. 21	第90回日本内分泌学会学術総会
III 学会等および社会における主な活動		
1986年7月～	日本薬学会会員	

多河

2006年4月～	日本内分泌学会代議員
2014年6月～	日本臨床化学会評議員

## 専任教員の教育・研究業績

所属 臨床薬学研究室	職名 講師	氏名 八木 敬子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） （1）薬学部学生への教育	2006年～現在に至る 2009年～現在に至る 2009年～現在に至る 2011年～現在に至る	「総合薬学講座」6年制課程6年次 「薬物治療学Ⅲ」6年制課程4年次 「実務実習事前教育」6年制課程4年次 「処方解析」6年制課程6年次 視覚的な理解を促すために図表や写真を含めた資料を提示しながら進めている。また、知識を定着させる目的で、国家試験の問題を改変したものを講義終了前に提示し、その内容を解説している。
（2）薬学研究科大学院生への教育研究指導	2013年～現在に至る	「病態解析治療学特論」修士課程
2 作成した教科書、教材、参考書	2006年～現在に至る	最新の知見を含めた独自の配布資料とスライドを作成し毎年更新している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Hayashi D, Yagi K, Song C, Ueda S, Yamanoue M, Topham M, Suzaki T, Saito N, Emoto N, Shirai Y.	論文	Diacylglycerol Kinase alpha is Involved in the Vitamin E-Induced Amelioration of Diabetic Nephropathy in Mice. Sci Rep. 2017 Jun 1;7(1):2597.

Akashi K, Saegusa J, Sendo S, Nishimura K, Okano T, Yagi K, Yanagisawa M, Emoto N, Morinobu A.	論文	Knockout of endothelin type B receptor signaling attenuates bleomycin-induced skin sclerosis in mice. <i>Arthritis Res Ther.</i> 2016 May 21;18(1):113.
Muliawan HS, Nakayama K, Yagi K, Ikeda K, Yagita K, Hirata K, Emoto N.	論文	Stable Somatic Gene Expression in Mouse Lungs Following Electroporation-mediated Tol2 Transposon Delivery. <i>Kobe J Med Sci.</i> 2015 Oct 7;61(2):E47-53.
Satwiko MG, Ikeda K, Nakayama K, Yagi K, Hocher B, Hirata K, Emoto N.	論文	Targeted activation of endothelin-1 exacerbates hypoxia-induced pulmonary hypertension. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2015 Sep 25;465(3):356-62.
Van Hung T, Emoto N, Vignon-Zellweger N, Nakayama K, Yagi K, Suzuki Y, Hirata K.	論文	Inhibition of vascular endothelial growth factor receptor under hypoxia causes severe, human-like pulmonary arterial hypertension in mice: potential roles of interleukin-6 and endothelin. <i>Life Sci.</i> 2014 Nov 24;118(2):313-28.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
III 学会等および社会における主な活動		
1991年6月～現在に至る	日本小児科学会会員	
1998年4月～現在に至る	日本薬理学会会員	
2009年4月～現在に至る	日本薬学会会員	
2010年4月～現在に至る	日本高血圧学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬剤学研究室	職名 講師	氏名 上田 久美子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 特になし		
2 作成した教科書、教材、参考書 薬物動態学Ⅱプリント冊子作成	2011.4	講義用プリント冊子を作成し、毎年改定、修正した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「薬学教育」誌上にて報告 第2回日本薬学教育学会にて発表 平成28年度神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラム成果報告会にて報告	2017.12 2017.9 2017.6	上田久美子、寺岡麗子、八巻耕也、土生康司、宮田興子、北河修治。薬学教育、2017、doi: 10.24489/jjphe.2017-012。”チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み” 上田久美子、八巻耕也、土生康司、寺岡麗子、宮田興子、北河修治。”チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み” 北河修治、上田久美子、八巻耕也、土生康司、寺岡麗子、宮田興子”チーム基盤型学習（TBL）を用いた分野横断統合演習の構築”
4 その他教育活動上特記すべき事項 特になし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Ueda K, Masuda A, Fukuda M, Tanaka S, Hosokawa M, Iwakawa S	論文	Drug Metab. Pharmacokinet. 2017, 32, 301-310. "Monophosphorylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells."

Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S	論文	Biol Pharm Bull. 2017, 40, 2199-2204. "Different schedule-dependent effects of epigenetic modifiers on cytotoxicity by anticancer drugs in colorectal cancer cells."
Tanaka S, Hosokawa M, Matsumura J, Matsubara E, Kobori A, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol Pharm Bull. 2017, 40, 1320-1325. "Effects of zebularine on invasion activity and intracellular expression level of let-7b in colorectal cancer cells."
Hosokawa M, Saito M, Nakano A, Iwashita S, Ishizaka A, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Oncol Lett. 2015, 10(2), 761-767. "Acquired resistance to decitabine and cross-resistance to gemcitabine during the long-term treatment of human HCT116 colorectal cancer cells with decitabine."
Ueda K, Hosokawa M, Iwakawa S.	論文	Biol Pharm Bull. 2015, 38(8), 1113-9. "Cellular uptake of decitabine by equilibrative nucleoside transporters in HCT116 cells."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Monophosphorylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells	2017. 12	日本薬物動態学会第32回年会
ヒト大腸がん細胞株HCT116細胞によるデシタビンのリン酸化に及ぼす抗がん剤の影響	2017. 5	日本薬剤学会第32回年会
ヒト大腸がん細胞株HCT116細胞における浸潤能及び遊走能に及ぼすニトロベンジルチオイノシンの影響	2017. 3	日本薬学会第137年会
ヒト大腸がん細胞株 HCT116細胞における抗がん剤共存下でのデシタビンの細胞内取り込みに及ぼすdCK、ENT1の影響	2016. 3	日本薬学会第136年会
ヒト大腸がん細胞株HCT116細胞におけるデオキシシチジン取り込みに対するデオキシシチジンキナーゼノックダウンの影響	2015. 11	第25回日本医療薬学会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

上田久美子

2006年 4月～2017年 3月	一般社団法人 薬学教育協議会 病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 委員
2009年 4月～2011年 3月	日本薬学会 ファルマシア トピックス専門小委員

## 専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 講師	氏名 三上 雅久
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） (1) 学部学生への教育	2007年4月～現在に至る	学部1年次生に対して「生化学II」（2014年度新入生までは、学部2年次前期に開講）の講義を、また学部2年次に対して「生化学III」の講義を行っている。「生化学II」では、タンパク質・酵素について、できるだけ日常の話題や疾患との関連性を織り交ぜながら解説している。「生化学III」では、エネルギー代謝と恒常性の維持について、補助プリント等を用意して、体系的に理解してもらえよう努めている。また、学生からの質問に対して個別対応にとどまらず、後の講義やオフィスアワーなどで学生全体にフィードバックしている。 CBTや国家試験への対策として、関連する過去問の解説を実施し、その一部を定期試験に出題することで、学生の理解度の把握に努めている。学生評価アンケート（2年に一度）では、平均以上の評価を得ている。
	2008年9月～2011年3月	学部3年次生（約70名の少人数クラス）に対して、「薬学英语入門II」の講義を行った。既存の薬学英语のテキストや学術論文から抜粋した資料を用い、英文内容の背景ならびに概要の理解に重点をおいた。講義毎に、前回の講義で取り扱った頻出専門用語や注意すべき発音などについて確認テストを実施した。担当期間中に実施された2回の学生評価アンケートにおいて、いずれもベストティーチャー賞を受賞した。
	2000年4月～現在に至る	学部3年次生に対して、生物学系II実習（2014年度より生物学系I実習に、2017年度より生化学実習に名称変更）の実施を担当している。限られた時間の中で、当該分野の必須項目を満たし、自ら考えながら実習を行えるような実習プログラムを組み立てている。実習項目についても、最新の医療や遺伝子操作技術の進展と同調したものにするために、随時改訂している。実習時間の最後に、少人数のグループごとに質疑応答を行い、実習内容と講義や国家試験との関連性を意識させる指導を心がけている。
		学部学生の卒業研究に対する指導を行っている。与えられたテーマに対して、自ら積極的に取り組む姿勢を身につけさせることに重点を置いている。定期的開催される研究室のセミナーでの文献紹介や研究報告などを通じて、携わっている研究分野に対する深い理解と、プレゼンテーション能力や問題解決力の向上を目標に指導している。

(2) 大学院生への研究指導	2000年4月～現在に至る	生化学講座所属の大学院生に対する研究指導ならびに大学院特論（生化学特論、2012年度以降、生命科学特論に改称）の講義を担当している。大学院特論では、糖鎖の生理機能の重要性と正常な機能に異常を来たした代謝異常症について発生学的視点から講義をしている。大学院生に対しては、研究テーマを理解し、主体的に実験計画と組み立てながら課題解決に取り組めるようになることを目標に指導をしている。また、修了までの間に少なくとも1回の学会発表ができるよう、日々の研究指導にあたっている。
2 作成した教科書、教材、参考書 教科書	2015年3月31日発行	第5章 糖質 スタンダード薬学シリーズII 4 生物系薬学I. 生命現象の基礎（東京化学同人，2015）28-34.
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 該当なし。		
4 その他教育活動上特記すべき事項 ベストティーチャー賞受賞	2008年度、2010年度	薬学英语入門II（2008年度および2010年度）
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Mikami T., Kitagawa H.	著書	in Glycoscience: Biology and Medicine (Taniguchi N., Endo T., Hart G.W., Seeberger P.H., Wong C.H., eds) 2014, pp511-517, Springer. "Glycosaminoglycans: their modes of action for a possible new avenue for therapeutic intervention"
Koike T., Mikami T., Shida M., Habuchi O., Kitagawa H.	論文	Sci. Rep. 2015, 5, 8994. "Chondroitin sulfate-E mediates estrogen-induced osteoanabolism"

Shida M., Mikami T., Tamura J., Kitagawa H.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 2017, 487, 678-683. "A characteristic chondroitin sulfate trisaccharide unit with a sulfated fucose branch exhibits neurite outgrowth-promoting activity: Novel biological roles of fucosylated chondroitin sulfates isolated from the sea cucumber <i>Apostichopus japonicus</i> "
Mikami T., Kitagawa H.	総説	Biochim. Biophys. Acta 2013, 1830(10), 4719-4733. "Biosynthesis and function of chondroitin sulfate"
Mikami T., Kitagawa H.	総説	Glycoconj. J. 2017, 34(6), 725-735. "Sulfated glycosaminoglycans: their distinct roles in stem cell biology"
3. その他（講演）		
演題名	発表年・月	学会名
高硫酸化コンドロイチン硫酸による神経突起伸長制御機構の解析	2013年・11月	第39回日本応用酵素協会研究発表会（大阪）
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1997年2月～現在に至る	日本薬学会会員	
1996年4月～現在に至る	日本生化学会会員	
2000年4月～現在に至る	日本糖質学会会員	
1998年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学基礎教育センター	職名 講師	氏名 西村 克己
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2006年4月から	教科書と演習問題を連動させて解説し、理解に役立てるよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2006年4月から	講義内容のレジユメを作成し、適宜配付している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Nishimura K., Horii S., Tanahashi T., Sugimoto Y., Yamada J.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2013, 61 (1), 59-68. 23. "Synthesis and Pharmacological Activity of Alkaloids from Embryo of Lotus, Nelumbo nucifera"

Nishimura K., Fukuyama N., Yasuhara T., Yamashita M., Sumiyoshi T., Yamamoto Y., Yamada K., Tomioka K.	論文	Tetrahedron 2015, 71 (39), 7222-7226. "A short-step synthesis of (+)- $\beta$ -lycorane by asymmetric conjugate addition cascade"
Sugimoto Y., Nishimura K., Itoh A., Tanahashi T., Nakajima H., Oshiro H., Sun S., Toda T. Yamada J.	論文	J. Pharm. Pharmacol. 2015, 67, 1716-1722. "Serotonergic mechanisms are involved in antidepressant-like effects of bisbenzylisoquinolines liensinine and its analogs isolated from the embryo of Nelumbo nucifera Gaertner seeds in mice"
Le D. H., Nishimura K., Tanahashi T.	論文	Natural Product Communications 2016, 11 (7), 949-952. "Alkaloids from the Tuber of Stephania cf. rotunda"
Le D. H, Nishimura K., Takenaka Y., Mizushima Y., Tanahashi T.	論文	J. Nat. Prod. 2016, 79 (7), 1798-1807. "Polyprenylated Benzoylphloroglucinols with DNA Polymerase Inhibitory Activity from the Fruits of Garcinia schomburgkiana"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
DNA polymerases inhibitory polyprenylated benzoylphloroglucinols from the fruits of Garcinia schomburgkiana	2015・8	Inaugural Symposium of the Phytochemical Society of Asia
$\alpha$ -アレクトロン酸の合成研究	2015・10	第65回日本薬学会近畿支部総会・大会
単離培養地衣菌Graphis sp. NH9933012の産生する新規スピロケタール化合物の合成と立体化学	2016・3	日本薬学会第136年会
III 学会等および社会における主な活動		

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 講師	氏名 辰見 明俊
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年4月～2013年3月 2014年4月～現在に至る 2008年4月～現在に至る 2013年4月～現在に至る 2018年4月～現在に至る 2012年4月～現在に至る 2010年4月～2013年3月 2010年4月～現在に至る 2011年1月～現在に至る 2011年4月～現在に至る 2012年4月～現在に至る 2011年4月～現在に至る	6年制3年次の「薬学英語入門」を担当した。 6年制3年次の「調剤学Ⅰ」を分担した。 6年制4年次の「実務実習事前教育」を分担した。 6年制4年次の「社会保障制度と薬剤経済」を分担した。 6年生4年次の「処方解析Ⅰ」を分担した。 6年制4、5年次「海外薬学研修」の講義を分担した。 6年制5年次の「IPW演習」を分担した。 6年制5年次の「病院実習」および「薬局実習」を分担した。 6年制5年次の「卒業研究Ⅰ」および6年次の「卒業研究Ⅱ」を分担した。 6年制6年次の「総合薬学講座」を分担した。 6年制6年次の「総合薬学講座（特別講座）」を分担した。 6年制6年次の「処方解析学」および「処方解析演習」を分担した。 補助プリントの作成や視覚教材の利用により理解を深めるよう工夫している。 医療の進歩や制度の変更に対応した最新情報の提供に努めている。 また、病院薬剤師としての経験を活かし、教科書だけでは得られない知識や技能の教授に努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		特になし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし

4 その他教育活動上特記すべき事項 薬学教育者・薬剤師へのFD活動	2008年11月～現在に至る	タスクフォースとして、薬剤師のためのワークショップin近畿に協力。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
波多江 崇, 長谷川 由佳, 白川 晶一, 内海 美保, 猪野 彩, 竹下 治範, 辰見 明俊, 田内 義彦, 濱口 常男	論文	医薬品相互作用, 2015, 39(1), 37-43. "フィジカルアセスメントに対する薬局薬剤師の意識および活用状況に関する実態調査"
波多江 崇, 石田 好宏, 伊東 真知, 大島 沙紀, 藤森 可純, 猪野 彩, 田内 義彦, 竹下 治範, 辰見 明俊, 森口 紗里, 濱口 常男	論文	日本地域薬局薬学会誌, 2016, 4(1), 16-22. "日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩酸塩およびN-アセチルグルコサミンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス"
Akitoshi Tatsumi, Masaya Okada, Yoshihiro Inagaki, Sachiyo Inoue, Tsuneo Hamaguchi, Seigo Iwakawa	論文	Biol. Pharm. Bull. 2016, 39(8), 1364-1369. "Differences in Esterase Activity to Aspirin and <i>p</i> -Nitrophenyl Acetate among Human Serum Albumin Preparations"
波多江 崇, 田中 智啓, 猪野 彩, 田内 義彦, 竹下 治範, 辰見 明俊, 濱口 常男	論文	医薬品情報学, 2017, 18(4), 289-294. "日本人を対象とした食後血糖値上昇に対する難消化性デキストリンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
チーム基盤型学習 (TBL) を学習手段とした薬学系統合教科の理解を促進する効果的な内容言語統合型学習 (CLIL) 法の検討	2014・3	第134回日本薬学会年会

ICTラウンド実施による肺炎ガイドラインの遵守率と治療効果の調査	2014・9	第24回日本医療薬学会年会
心不全患者に対するEPA製剤の拡張機能に及ぼす影響	2015・11	第25回日本医療薬学会年会
日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩酸塩およびN-アセチルグルコサミンの効果：二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス	2016・3	日本薬学会第136年会
拡張不全患者に対するキサランチンオキシダーゼ阻害剤の有用性	2016・9	第64回日本心臓病学会学術集会
III 学会等および社会における主な活動		
1997年1月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
2001年3月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2008年4月～現在に至る	日本薬学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 講師	氏名 猪野 彩
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年4月～現在に至る 2011年4月～現在に至る 2011年4月～現在に至る 2014年4月～現在に至る 2017年～	4年次生の実務実習事前教育を分担した。 4年次生の薬事関係法規・薬事制度にて毒物及び劇物取締法、医療保険関係法規の講義を分担した。 6年次生の処方解析学，処方解析演習を分担した。 3年次生の調剤学 I の講義を分担した。 2年次生の医療コミュニケーション演習を分担した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
波多江 崇，田中智啓，猪野 彩，田内義彦，竹下治範，辰見明俊，瀨口常男	論文	日本人を対象とした食後血糖上昇に対する難消化性デキストリンの効果：二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス，医薬品情報学，18(4)67-72，2017

波多江 崇, 石田好宏, 伊東真知, 大島沙紀, 藤森可純, 森口沙里, 猪野 彩, 竹下治範, 辰見明俊, 田内義彦, 瀧口常男	論文	日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩酸塩およびN-アセチルグルコサミンの効果：二重盲検プラセボ対照ランダム比較試験のメタアナリシス, 日本地域薬局学会誌, 4(1), 2016
三木有咲, 波多江 崇, 猪野 彩, 井上知美, 上野隼平, 笠谷君代, 近藤亜美, 坂口知子, 佐々木信子, 田内義彦, 竹下治範, 辻 華子, 中川素子, 野口 栄, 長谷川由佳, 水田恵美, 矢羽野早代, 山根雅子, 瀧口常男	論文	子育て中の母親を対象とした調査にみる薬局薬剤師の職能認知と薬局薬剤師の課題, 社会薬学, 34 (1) 24-33, 2015
波多江 崇, 長谷川由佳, 白川昌一, 内海美保, 猪野 彩, 竹下治範, 辰見明俊, 田内義彦, 瀧口常男	論文	フィジカルアセスメントに対する薬局薬剤師の意識および活用状況に関する実態調査, 医薬品相互作用研究, 39(1), 2015
三木有咲, 波多江 崇, 猪野 彩, 井上知美, 上野隼平, 笠谷君代, 近藤亜美, 坂口知子, 佐々木信子, 田内義彦, 竹下治範, 辻華子, 中川素子, 野口 栄, 長谷川由佳, 水田恵美, 矢羽野早代, 山根雅子, 瀧口常男	論文	子育て中の母親を対象とした調査にみる薬局薬剤師の職能認知と薬局薬剤師の課題, 社会薬学, 34 (1) 24-33, 2015
2. 学会発表 (平成27年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響	2016年3月	日本薬学会第136年会
PTP包装からの錠剤の押し出し方法の調査	2016年3月	日本薬学会第136年会
III 学会等および社会における主な活動		
2002年～現在に至る	日本病院薬剤師会 会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 医薬細胞生物学研究室	職名 講師	氏名 西山 由美
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1986年～2008年6月 2010年8月～現在に至る	2年次生の生薬化学実習（2017年からは細胞生物学実習）を担当している。実習開始時の講義ではパワーポイントを使って、実験の目的や実験内容について説明し、実験終了時には、結果について考察するなどのディスカッションを行い理解を深めるようにしている。また、実験中は各実習機を見回り、手技が正しく安全に行われているかチェックし、正しい器具の取り扱いなどを習得してもらうようにしている。
	2011年4月～現在に至る	2年次生（2012年からは1年生）の生薬学を担当している。生薬に関する基本的なことから始め、薬としての生薬について理解を深めてもらえるようにしている。国家試験やC B T試験に必要な知識を習得しながら、生薬に興味を持てるように標本を用意して講義を行っている。
	2014年9月～2017年3月	2年次生の後期（2016年度は前期）の生薬化学の後半部分を担当していた。生薬由来の医薬品の内、特にアルカロイド化合物を中心に講義を行った。重要な医薬品が多いので、国家試験やC B T試験に必要な知識を中心に、興味を持ちやすい内容から始め、化合物の構造式やその特徴・作用を暗記ではなく、化学的に見れるような力をつけていけるように心掛けた。
	2014年4月～現在に至る	4年次生（前期）の漢方医学（2014, 2015年度は4コマ、2016年度からは7コマ）を担当している。これまで学んできた西洋医学とは概念が異なるので、その部分を意識して説明している。近年は、漢方薬も多く処方されるようになったことや、利用を希望する人も増えてきているので、漢方に関する基本的な知識や汎用される漢方薬を中心に講義し、またCBT試験や国家試験の問題に対応できるように工夫している。
	2017年9月～現在に至る	3年次生（後期）の薬学英語入門Ⅱを担当している。英語で書かれた専門的な文章をただ訳すだけでなく、図や資料使いながら内容を深く理解することを目標としている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2013年8月～現在に至る	生薬学の講義で用いる冊子を作成した。書き込み式なので、生薬について自分でまとめながら、勉強出来るようにしている。余白を使って、教科書に載っていないことなどを書き込み、生薬について自分だけのまとめのノートになるように使ってもらいたいと考えている。

	2015年8月～2017年3月	生薬化学の講義で用いる冊子を作成した。書き込み式で、重要な化合物を自分でまとめて勉強できるようにしている。余白を利用して、教科書の内容を自分でまとめて書いたり、教科書に載っていないことなども書き込んで、自分のまとめのノートとなるように使ってもらいたいと考えて作成した。
	2015年4月～現在に至る	漢方医学の講義で用いる冊子を作成した。テキストには多くの情報があり、漢方医学のことを学ぶにはじっくり読むのが一番だが、馴染みのない単語や内容が多いことから、簡単に内容をまとめた冊子を作成した。ただし、冊子だけでは不十分なので、冊子とテキストの両方で勉強して欲しいと考えている。冊子には、国家試験やCBTの問題集も入れて、少なくともどんな内容を勉強し理解しないとイケないかを考えてもらうことにした。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Nishiyama Y., Ishida Y., Yoshino T., Moriyasu M., Kato A., Mathenge S. G., Juma F. D. ChaloMutiso P. B.	論文	Shoyakugaku-zasshi 2014, 68(1), 20-22. "Isoquinoline alkaloids from Monanthotaxis trichocarpa"
西山由美、石原由美子、山田南雄、土反伸和、守安正恭、中谷典義、渡邊恵美子、佐々木泰介	論文	生薬学雑誌 2014, 68(2), 88-92. 「清宮寿桃丸の抗酸化活性に関する研究」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
アボルフィンアルカロイドの鎮痛作用と構造活性相関	2017年・3月	日本薬学会137年会 仙台

降香のヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対する抗腫瘍活性成分の探索 2	2017年・3月	日本薬学会137年会 仙台
アカネ根のヒト卵巣がん細胞に対する抗腫瘍活性成分の探索	2017年・3月	日本薬学会137年会 仙台
ヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対するタクシャの抗腫瘍活性成分の探索	2017年・9月	日本生薬学会64回年会 千葉
大黃の認知症治療薬としての有効性の検討	2017年・9月	日本生薬学会64回年会 千葉
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
研究って・・・？ なんだか難しそう	2016年・1月 2017年・1月	兵庫県立西宮恋等学校 リサーチII 「課題研究入門・学術講演会」
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1986年7月～現在に至る	日本生薬学会会員	
1986年12月～現在に至る	日本薬学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属	中央分析室	職名	講師	氏名	都出 千里
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1996～2010	有機化学系III実習（旧 機器分析学実習および有機化学系II実習） 学生実習の円滑な進行を促すための準備をおこない、実習講義をおこない実習室で学生の指導に当たる。また、実習内容についての討議を学生と行い理解を深めさせた。		
		2003, 2005, 2006	情報リテラシー 講義の円滑な進行のためのサポートを行った。		
		2010～	構造解析学I（分担）担当分野をわかりやすくするためにパワーポイント、補充プリントを用いて講義を行っている。		
		2017～	有機化学演習（B 4クラス）担当分野の説明を分かりやすくするために補助プリントを用いて講義を行っている。		
		2018～	情報リテラシー（分担）では担当範囲を分かりやすくするためパワーポイントを用いた講義を行っている。また、補講時間を設け、授業だけでは課題が終わらない学生に指導している。		
		2018～	構造解析学II（分担）で担当分野の説明を分かりやすくするためにパワーポイントや補助プリントを作成したり、実際のスペクトルの測定なども行っている。		
		1996～	毎年数名のゼミ生の実験指導を行い、学年末にはプレゼンテーションのためのまとめ方、発表の方法などの指導を行った。		
2	作成した教科書、教材、参考書	2010～2012	分析化学III(分担)NMRやESRの原理を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。		
		2013～	構造解析学I(分担)NMRやESRの原理を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。		
		2018～	構造解析学I I(分担)NMRでの構造解析を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				

4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Yamano Y., Tode C., Wada A., Ito M.	論文	Yuki Gosei Kagaku Kyokaiishi, 2015, 73, 161-170. "Biomimatic type syntheses via regio controlled oxirane-ring cleavage"
Tode C., Sugiura M.	著書	Food and Nutritional Components in Focus: Vitamin A and Carotenoids (RSC Publishing, 2012) .250-260.
Tode C., Takeuchi A., Iwakawa S., Tatsumi A., Sugiura M.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2009, 57, 653-656. "Hydrogen-Deuterium (H-D) Exchange Reaction of Warfarin in D2O Solution"
Tode C., Maoka T., Sugiura M.	論文	J. Sep. Sci. 2009, 32, 3659-3663. "Application of LC-NMR to analysis of carotenoids in foods"
Tokunaga T., Okamoto M., Tanaka K., Tode C., Sugiura M.	論文	Anal. Chem. 2010, 82, 4293-4297. "Chiral liquid chromatography-circular dichroism NMR for estimating separation conditions of chiralHPLC without authentic samples."
2. 学会発表 (平成29年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
固体NMRで見るロキソプロフェンナトリウム製剤の経時変化	平成29年3月	第137回日本薬学会
III 学会等および社会における主な活動		
1993年12月～	日本薬学会会員	
1995年～	日本カロテノイド学会会員	
2006年～	日本核磁気共鳴学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 生命有機化学研究室	職名 講師	氏名 沖津 貴志
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2006年4月～2017年3月	3年次配当の有機化学系Ⅲ実習の指導を行った。少人数での実習並びにグループディスカッションを行い、またこれまでの講義で学んだことと実習内容とをリンクさせることで有機化学の理解度の向上に努めた。
	2009年4月～2010年9月	1年次配当の情報リテラシーの講義において進行度の遅い学生のサポートを行った。
	2011年4月～2012年9月	2年次配当の化学系基礎演習Ⅰの講義を行った。自作の小テストを毎回行い、学生の習熟度に合わせて解説することで理解度の向上に努めた。
	2013年9月～現在に至る	2年次配当の有機化学演習の講義を行っている。これまで受講した講義内容ではあるが、基礎的などころから復習した上で問題を解いてもらい、適宜学生に黒板に答案を書いてもらうことで理解度の確認に繋げ、双方向の講義となるように努めている。
	2014年9月～現在に至る	1年次配当の有機化学Ⅱの講義を行っている。基本事項を板書、解説した上で講義後半に問題を解いてもらい、理解を深める工夫を行っている。一般的な規則を理解できれば有機化学は暗記科目ではないことを学生に認識してもらえよう、教科書の章末問題から厳選した良問を解くように指導している。
	2017年4月～現在に至る	3年次配当の機器分析学実習の指導を行っている。実習を行うにあたって理解していて欲しい内容を盛り込んだ「プレテスト」を実習前に実施し、実習をより能動的・積極的に行えるように工夫した。また、これまでの「有機化学系Ⅲ実習」のSGDを引き続き行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		有機化学演習のテキストの取り纏めを担当し、毎年改訂を行っている。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Okitsu T., Yumitate S., Sato K., In Y. Wada A.	論文	Chem. Eur. J. 2013, 19(16), 4992-4996. "Substituent Effect of Bis(pyridines)iodonium Complexes as Iodinating Reagents: Control of the Iodocyclization-Oxidation Process"
Wang S., Munro R. A., Shi L., Kawamura I., Okitsu T., Wada A., Kim S.-Y., Jung K.-H., Brown L. S., Ladizhansky V.	論文	Nature Methods 2013, 10(10), 1007-1012. "Solid-state NMR spectroscopy structure determination of a lipid-embedded heptahelical membrane protein"
Okitsu T., Nakata K., Nishigaki K., Michioka N., Karatani M., Wada A.	論文	J. Org. Chem. 2014, 79(12), 5914-5920. "Iodocyclization of Ethoxyethyl Ethers to Ynamides: An Immediate Construction to Benzo[b]furans"
Okitsu T., Ogasahara M., Wada A.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2016, 64(8), 1149-1153. "Convergent Synthesis of Dronedarone, an Antiarrhythmic Agent"
Okitsu T., Kobayashi K., Kan R., Yoshida Y., Matsui Y., Wada A.	論文	Org. Lett. 2017, 19(17), 4592-4595. "3-Methylene-4-amido-1,2-diazetidone as a Formal 1,4-Dipole Precursor: Lewis Acid-Catalyzed Nucleophilic Addition with Silylated Nucleophiles"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Substitution effect of bis(pyridines)iodonium complexes as iodinating reagents	2013年6月	14th Tetrahedron Symposium

3-メチレン-4-アミド-1,2-ジアゼチジンの求核的開環反応	2014年11月	第40回反応と合成の進歩シンポジウム
Iodonium-mediated dearomative cyclization/Diels-Alder tandem of a chiral ynamide toward diastereoselective construction of bridgehead-spiro system	2015年12月	Pacificchem 2015
シリル基を配向基とするプロパルギルグリシン類のヨード環化反応	2016年11月	第42回反応と合成の進歩シンポジウム
イナミドのヨード環化反応を利用した中員環エーテルの即時合成	2017年11月	第43回反応と合成の進歩シンポジウム
3. その他（講演）		
演題名	発表年・月	学会名
ヨード環化反応を基軸とする複素環合成	2016年3月	創薬基盤化学研究 若手セミナー 第14回特別講演会
窒素共役型多重結合の特性を生かした複素環合成法の開発	2016年6月	第2回近畿薬学シンポジウム：化学系の若い力
レチノイン酸を母核とするRXRアゴニストの探索	2016年10月	日本レチノイド研究会第27回学術集会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2001年4月～現在に至る	日本薬学会会員	
2006年4月～現在に至る	日本カロテノイド研究会会員	

沖津

2007年4月～現在に至る	有機合成化学協会会員
2009年4月～現在に至る	日本ビタミン学会会員
2011年4月～現在に至る	ヨウ素学会会員
2011年4月～2014年3月	日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員
2013年4月～現在に至る	日本レチノイド学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 病態生化学研究室	職名 講師	氏名 藤波 綾
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1995年～現在に至る  2004, 2007～2009年 2011年～現在に至る  2015年～現在に至る	臨床生化学実習（旧臨床検査実習） 学生実習の円滑な進行を促すための準備を行い、実習中は実習室で指導にあ たっている。また、実験終了時には、結果について考察するなどのディスカッ ションを行い理解を深めるようにしている。  情報リテラシー 講義の円滑な進行のためのサポートを行った。  薬学英語入門II 3年次生に対して、生命科学の分野で必要とされる基礎的な英語の知識を習得 しながら、それまでの専門科目の講義内容をも復習できるように講義を行って いる。  薬物治療学 I（旧臨床検査学II）  3年次生に対して、血液に関する臨床検査の項目と意義、異常値に対する見方 などを講義している。
2 作成した教科書、教材、参考書	2014年12月 2016年3月	臨床検査における免疫測定法：自己抗体検査法  Human Reader -life and disease-第2版（京都廣川書店）
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2016年8月	第1回日本薬学教育学会 ポスター発表
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
藤波 綾, 太田 光熙	著書	臨床検査における免疫測定法：自己抗体検査法 p220-224 免疫測定法：基礎から先端まで（小林典裕・上田宏・三宅司郎・荒川秀俊編）講談社 2014.12.20
Ohta M, Fujinami A, Kobayashi N, Amano A, Ishigami A, Tokuda H, Suzuki N, Ito F, Mori T, Sawada M, Iwasa K, Kitawaki J, Ohnishi K, Tsujikawa M, Obayashi H.	論文	Nutr Res. 2015; 35(7):618-25. "Two chalcones, 4-hydroxyderricin and xanthoangelol, stimulate GLUT4-dependent glucose uptake through the LKB1/AMP-activated protein kinase signaling pathway in 3T3-L1 adipocytes.
Hasegawa Y, Kim SR, Hatae T, Ohta M, Fujinami A, Sugimoto K, Kim KI, Imoto S, Tohyama M, Kim SK, Ikura Y, Kudo M.	論文	Dig Dis. 2015; 33(6): 715-20. "Usefulness of Cytokeratin-18M65 in Diagnosing Non-Alcoholic Steatohepatitis in Japanese Population. "
児玉典子、川西和子、田中将史、藤波 綾	著書	Human Reader -life and disease-第2版（京都廣川書店） 2016.3
Imoto S, Kim SR, Amano K, Iio E, Yoon S, Hirohata S, Yano Y, Ishikawa T, Katsushima S, Komeda T, Fukunaga T, Chung H, Kokuryu H, Horie Y, Hatae T, Fujinami A, Kim SK, Kudo M, Tanaka Y.	論文	Dig Dis. 2017;35(6):531-40. "Serum IFN- $\lambda$ 3 Levels Correlate with Serum Hepatitis C Virus RNA Levels in Symptomatic Patients with Acute Hepatitis C. "
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
脂肪細胞とマクロファージの共培養系におけるMCP-1の分泌動態	2016年・9月	第89回日本生化学会大会
2型糖尿病患者および妊娠糖尿病患者における血清中AIF-1濃度	2016年・12月	第56回日本臨床化学会年次学術集会
自然発症2型糖尿病モデルマウスにおける西洋ニンジン摂取の効果	2017年・3月	日本薬学会第137年会
脂肪細胞とマクロファージの共培養系におけるTNF-alphaの分泌動態および高血糖、肥大化の影響	2017年・12月	ConBio2017

3. その他		
演題名	発表年・月	講演内容
健康食品とポリフェノール	2015年・2月	第13回神戸薬科大学健康食品講座
ポリフェノールの多彩な魅力 ーポリフェノールの王様 アシタバカルコンを通してー	2017年・7月	第18回神戸薬科大学健康食品講座
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1995年8月～現在に至る	日本臨床化学会会員	
1996年1月～現在に至る	日本薬学会会員	
2001年1月～現在に至る	日本生化学会会員	
2016年4月～現在に至る	初年次教育学会会員	
2016年4月～現在に至る	日本薬学教育学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	医薬品情報学研究室	職名	講師	氏名	土生 康司
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2013. 10～現在		CBT対策委員、実施委員	
		2013. 10～現在		実務実習事前教育委員会委員	
		2014. 4～現在		医薬品情報学（4年生前期）	
		2014. 4～現在		薬学入門（1年生前期）	
		2014. 4～現在		情報リテラシー（1年生前期）	
		2014. 6～2017		薬剤設計学II（旧機能性製剤学）（4年前期、2コマ）	
		2015. 4～現在		実務実習運営委員会委員	
2 作成した教科書、教材、参考書		2017. 4		医薬品情報学（廣川書店）執筆、講義陽プリント冊子作成	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		2016. 8		薬学統合学習の構築～臨床薬学－薬理学－有機化学の橋渡し教育を目指して～水谷 暢明、土生 康司、宮田 興子 第1回薬学教育学会.	
		2017. 7		医薬品情報 様々な情報源、その選択と活用 土生 康司 第17回薬剤師のためのイブニングセミナー	
		2017. 9		薬学統合学習の構築 第2報 — 臨床薬学-薬理学-有機化学の橋渡し教育を目指して 土生 康司、水谷 暢明、宮田 興子 第2回薬学教育学会.	
		2017. 10		医薬品、サプリメントの 特徴にあった情報活用を考える 土生 康司 サプリメントフォーラム2017	
4 その他教育活動上特記すべき事項		2013. 10～現在		情報委員会委員	
		2014. 4～2017. 3		大学広報委員会委員	

	2015.4～現在 2016.4～2018.3 2018.4～現在	個人情報保護委員会委員 図書委員会委員 動物実験委員会委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Yamamoto H, Habu Y, Yano I, Ozaki J, Kimura Y, Sato E, Shida A, Fukatsu S, Matsubara K.	ノート (査読有)	Comparison of the effects of azole antifungal agents on the anticoagulant activity of warfarin. Biol Pharm Bull., 37: 1990-1993 (2014).
八巻耕也, 上田昌史, 上田久美子, 江本憲昭, 水谷暢明, 池田宏二, 八木敬子, 田中将史, 土生康司, 中山喜明, 武田紀彦, 森脇健介, 北河修治	ノート (査読有)	基礎から臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の学習効果 薬学雑誌 136, 1051-1064 (2016).
八巻耕也, 池田宏二, 上田久美子, 土生康司, 中山喜明, 武田紀彦, 森脇健介, 和田昭盛, 小山淳子, 児玉典子, 北河修治	ノート (査読有)	分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導入が生み出す学習意欲と学習効果 薬学雑誌 137, 1285-1299 (2017).
上田久美子, 寺岡麗子, 八巻耕也, 土生康司, 宮田興子, 北河修治	ノート (査読有)	チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み 薬学教育 doi: 10.24489/jjphe.2017-012 (2017).
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
小児における抗菌薬投与時の下痢発現の要因	平成27年3月	日本薬学会第135年会
初年次生に対する分野横断的統合型教育科目「薬学入門」の学習効果	平成28年3月	日本薬学会第136年会
大阪赤十字病院における免疫抑制・化学療法によるHBV再活性化対策の現状と課題	平成28年3月	日本薬学会第136年会

プレドニゾロン使用時のB型肝炎再活性化の対策と実施状況	平成29年3月	日本薬学会第137年会
薬学統合学習の構築～臨床薬学－薬理学－有機化学の橋渡し教育を目指して～	平成28年8月	第1回日本薬学教育学会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003. 4～現在	日本医療薬学会会員	
2013. 10～現在	日本医薬品情報学会会員	
2014. 11～現在	日本薬学会会員	
2003. 4～現在	日本病院薬剤師会会員	
2010. 4～現在	日本薬剤師会会員	
2008. 10～2013. 9	日本病院薬剤師会がん薬物療法認定薬剤師	
2013. 3～2014. 3	第35回日本病院薬剤師会近畿学術大会実行委員	
2007. 1～現在	日本医療薬学会認定薬剤師	
2012. 4～2018. 4	認定実務実習指導薬剤師	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 機能性分子化学研究室	職名 講師	氏名 前田 秀子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年4月～現在に至る	1年生に「情報リテラシー」（前期）の講義をPower Pointを使用して行った。 ワープロソフトやプレゼンテーションソフトで課題を作成した。
	2009年4月～現在に至る	1年生に「基礎化学実習」（後期）を教えた。 毎回、課題の提出をさせ、終了時に実験ノートの提出を行った。
	2015年10月～現在に至る	1年生に「無機・錯体化学」（後期）を教えた。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2007年10月～2009年1月	神戸大学の非常勤講師として、1年生に化学実験を教えた。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Maeda H., Kita T., Iiduka T., Tsuhako M., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull. 2013, 28, 6-9. "Phosphorylation of Citrulline with cyclo-Triphosphate in Aqueous Solution"

Maeda H., Ogawa Y., Nakayama H.	論文	J. Incl. Phenom. Macrocycl. Chem. 2014, 78, 217-224 "Inclusion complex of melatonin with modified cyclodextrins"
Maeda H., Tanaka R., Nakayama H.	論文	SpringerPlus 2015, 4:218 "Inclusion complex of trihexyphenidyl with natural and modified cyclodextrins"
Maeda H., Moriwaki A., Nariyai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull. 2016, 32, 5-9. "Two sites phosphorylation of salicin with disodium diphosphonate in aqueous solution"
Maeda H., Iga Y., Nakayama H.	論文	J. Incl. Phenom. Macrocycl. Chem. 2016, 86, 337-342. "Characterization of inclusion complexes of betahistine with $\beta$ -cyclodextrin and evaluation of their anti-humidity properties"
2. 学会発表 (平成27年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
トリヘキシフェニジルのシクロデキストリンによる包接能評価	2014. 09. 11	第31回シクロデキストリンシンポジウム
シクロデキストリンによるベタヒスチンメシル酸塩の吸湿性の改善	2016. 03. 27	日本薬学会第136年会
Phosphorylation of arbutin with cyclo-triphosphate in aqueous solution	2016. 09. 26	The 9th International Symposium on Inorganic Phosphate Materials (ISIPM-9)
シクロデキストリンによるエトドラクの包接能評価	2017. 03. 27	日本薬学会第137年会

前田

ヒドロキシプロリンの保湿性向上を目指したシクロ三リン酸塩によるリン酸修飾	2017. 08. 25	第26回無機リン化学討論会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010年10月～現在に至る	日本無機リン化学会学会誌編集委員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 講師	氏名 河内 正二
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年4月～現在 2011年1月～現在 2011年4月～現在 2012年4月～現在 2012年4月～現在 2012年4月～現在 2014年4月～現在 2015年4月～現在 2016年4月～現在 2018年4月～現在	4年次の「実務実習事前教育」を分担した。 5年次の「卒業研究Ⅰ」および6年次の「卒業研究Ⅱ」を分担した。 5年次の「病院実習」および「薬局実習」を分担した。 4、5年次の「海外薬学研修」の講義を分担した。 6年次の「処方解析学・演習」を分担した。 6年次の「総合薬学講座」を分担した。 3年次の「調剤学Ⅰ」を分担した。 1年次の「早期体験学習（救命救急訓練）」を分担した。 4年次の「安全管理医療」を分担した。 4年次の「処方解析学Ⅰ」を分担した。 臨床現場での経験を活かして最新の情報を提供することを心がけている。講義に使用する資料は、図表や写真画像および動画を多く取り入れ、学生が理解し、知識が定着するよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年4月～現在 2017年4月～現在に至る	神戸大学附属中学校と連携したがん教育プログラムの推進に参画した。 タスクフォースとして、薬剤師のためのワークショップに協力している。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
Kawauchi S, Nakamura T, Miki I, Inoue J, Hamaguchi T, Tanahashi T, Mizuno S.	論文	J Pharmacol Sci. 2014; 124: 180-191. "Downregulation of CYP3A and P-glycoprotein in the secondary inflammatory response of mice with dextran sulfate sodium-induced colitis and its contribution to cyclosporine A blood concentrations"
Kawauchi S, Nakamura T, Yasui H, Nishikawa C, Miki I, Inoue J, Horibe S, Hamaguchi T, Tanahashi T, Mizuno S.	論文	Int J Med Sci. 2014; 11: 1208-1217. "Intestinal and Hepatic Expression of Cytochrome P450s and mdrla in Rats with Indomethacin-Induced Small Intestinal Ulcers"
河内正二	トピックス	ファルマシア. 2014; 150: 916. 「新規抗凝固薬はワルファリンの代替となり得るか？」
Horibe S, Matsuda A, Tanahashi T, Inoue J, Kawauchi S, Mizuno S, Ueno M, Takahashi K, Maeda Y, Maegouchi T, Murakami Y, Yumoto R, Nagai J, Takano M.	論文	Life Sci. 2015; 124: 31-40. "Cisplatin resistance in human lung cancer cells is linked with dysregulation of cell cycle associated proteins"
Kawauchi S, Nakamura T, Horibe S, Tanahashi T, Mizuno S, Hamaguchi T, Rikitake Y.	論文	Biopharm Drug Dispos. 2016; 37: 522-532. "Down-regulation of hepatic CYP3A1 expression in a rat model of indomethacin-induced small intestinal ulcers"
2. 学会発表（平成27年度に行った学会発表）		
演題名	発表年・月	学会名
腸疾患時の肝臓および小腸における薬物代謝機能変動に関する研究	2015年10月	第65回日本薬学会近畿支部総会・大会
循環器系疾患およびその治療薬の転倒に及ぼす影響に関する検討	2015年11月	第25回日本医療薬学会年会
アドシルカ <sup>®</sup> 錠の粉碎後の安定性に関する試験	2016年1月	第37回日本病院薬剤師会近畿学術大会

シルデナフィル製剤の粉砕後の安定性に関する検討	2016年1月	第37回日本病院薬剤師会近畿学術大会
インドメタシン誘発小腸粘膜障害モデルにおける小腸と肝臓でのCYPsおよびmdr1a の発現変動機序の検討	2017年3月	日本薬学会第137年会
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
心臓移植時の不整脈管理が免疫抑制剤の薬物動態に及ぼす影響	2017年8月	兵庫県薬剤師会・病院薬剤師会連携1周年記念大会 分科会4 大学と臨床現場とを繋ぐ研究－臨床現場の課題解決を目指して－
III 学会等および社会における主な活動		
2005年4月～現在	日本病院薬剤師会	
2005年4月～現在	日本医療薬学会	
2009年4月～現在	日本薬学会	
2010年4月～現在	日本薬剤師会	
2017年4月～現在	兵庫県登録販売者試験委員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 講師	氏名 竹下 治範
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2014年～	6年生を対象に「処方解析学・演習」を担当している。『処方解析学』の講義において、学生が関節リウマチ、その他の免疫疾患の理解をしやすいように臨床的な写真及び動画をたくさん取り入れる工夫を行った。
	2014年～	6年生を対象に「処方解析学・演習」を担当している。『処方解析学』の講義において、学生が胃潰瘍をはじめ、その他の酸関疾患の理解をしやすいように臨床的な写真及び最新の知見をたくさん取り入れよりレベルの高い知識をえられるように工夫を行った。
	2014年～	4年生を対象に「実務実習事前教育」を担当している。『実務実習事前教育』においては、5年次に行われる長期実務実習（病院・薬局）にスムーズに取り組めるよう、臨床現場で求められる知識・技能・態度の指導を行い特に挨拶や身だしなみ教育についても力をいれている。
	2014年～	『実務実習事前教育』において、輸液の種類と適応、輸液療法について、実薬を用いるとともに計算問題等も作成して、実務実習に先立つ知識をえられるような工夫を行った。また、医療安全の分野では学生が医療事故インシデントを楽しく理解できるようなSDGの運用に努めた。
	2014年～	6年生を対象に「総合薬学講座」を担当している。『総合薬学講座』の授業では、病院薬剤師業務や、注射薬、輸液療法について授業を行った。
	2014年～	3年生を対象に「調剤学Ⅱ」を担当している。『調剤学Ⅱ』の授業では、オムニバスでその他の教員と分担している。私の分担は、注射薬の調剤（計数・無菌調製）、代表的な輸液と適応、栄養輸液など現場の経験をもとに写真を多く取り入れ、最新のトピックスを交えて興味をもてるように工夫を行った。
2017年～	3年生を対象に「医療倫理演習」を担当している。	

<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p> <p>『コンパス 調剤学』改定第2版（南江堂，2015）</p> <p>薬学生・薬剤師のための 添付文書徹底活用術 （薬事日報社，2016）</p> <p>グラフィックガイド 薬剤師の技能 －理論まるごと実践へ－（京都廣川書店，2009）</p>	<p>2015年3月31日</p> <p>2016年10月1日</p> <p>2009年</p>	<p>2011年には日局が第16局となった。2014年には薬事法が「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」と大幅に改正され、薬剤師法も改正された。2012年の診療報酬改定では「病棟薬剤業務実施加算」が新設された。また、2015から新薬学教育モデル・コアカリキュラムがの教育がスタートするなど薬剤師を取り巻く環境がめまぐるしく変わることに対応して改訂された。</p> <p>薬剤師の業務で起こり得る10の事例について、可能な限り添付文書やインタビューフォームで解決する方法を紹介し、薬学生・薬剤師が臨床現場で解決していけるようなヒントを与える構成となっている。</p>
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p>		
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p>		
<p>II 研究活動</p>		
<p>1. 著書・論文等</p>		
<p>氏名</p>	<p>種別</p>	<p>内容</p>
<p>竹下治範，井上知美，高瀬尚武，波多江 崇，室井延之，濱口常男</p>	<p>論文</p>	<p>副腎皮質ステロイド軟膏剤の適正使用に向けたFinger-tip unitによる服薬指導の実態調査と製剤学的使用性の評価，医薬品情報学，18(4)48-54，2017</p>
<p>波多江 崇，田中智啓，猪野 彩，田内義彦，竹下治範，辰見明俊，濱口常男</p>	<p>論文</p>	<p>日本人を対象とした食後血糖上昇に対する難消化性デキストリンの効果：二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス，医薬品情報学，18(4)67-72，2017</p>
<p>波多江 崇，石田好宏，伊東真知，大島沙紀，藤森可純，森口沙里，猪野 彩，竹下治範，辰見明俊，田内義彦，濱口常男</p>	<p>論文</p>	<p>日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩酸塩およびN-アセチルグルコサミンの効果：二重盲検プラセボ対照ランダム比較試験のメタアナリシス，日本地域薬局学会誌，4(1)，2016</p>

三木有咲, 波多江 崇, 猪野 彩, 井上知美, 上野隼平, 笠谷君代, 近藤亜美, 坂口知子, 佐々木信子, 田内義彦, 竹下治範, 辻 華子, 中川素子, 野口 栄, 長谷川由佳, 水田恵美, 矢羽野早代, 山根雅子, 濱口常男	論文	子育て中の母親を対象とした調査にみる薬局薬剤師の職能認知と薬局薬剤師の課題, 社会薬学, 34 (1) 24-33, 2015
波多江 崇, 長谷川由佳, 白川昌一, 内海美保, 猪野 彩, 竹下治範, 辰見明俊, 田内義彦, 濱口常男	論文	フィジカルアセスメントに対する薬局薬剤師の意識および活用状況に関する実態調査, 医薬品相互作用研究, 39(1), 2015
2. 学会発表 (平成27年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響	2016年3月	日本薬学会第136年会
PTP包装からの錠剤の押し出し方法の調査	2016年3月	日本薬学会第136年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2001年から現在	日本薬学会会員	
2003年から現在	日本病院薬剤師会会員	
2005年から現在	日本医療薬学会会員	
2007年から現在	日本薬剤師会会員	
2007年から現在	日本リウマチ学会会員	
2008年から現在	日本薬剤師研修センター認定薬剤師 第08-30718号	
2008年から現在	日本薬剤師研修センター認定 実務実習指導薬剤師 実習指導08102621号	
2008年から現在	日本病院薬剤師会 生涯研修履修認定 第6504号	
2009年から現在	日本医療薬学会認定薬剤師 第09-0035号	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品化学研究室	職名	講師	氏名	武田 紀彦
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2015年10月～現在	3年次の「医薬品化学実習」を担当している。医薬品合成を実施し、基本的な化学反応を理解してもらうように努めている。未知検体においては様々な定性試験から得られた官能基の情報をもとに、未知検体の正しい構造へ導ける論理的思考を養うように心がけている。			
	2015年4月～現在	1年次の「薬学入門（分担）」の有機化学の部分を担当している。「これから習う有機化学」を意識しながら、NSAIDsを題材に講義をしている。薬物分子における官能基の役割や性質、どのように効果を示すのか、有機化学の視点を中心に説明するように心がけている。またスモールグループディスカッションを行うことで、薬は有機化合物であり、有機化学、物理化学、薬理学、薬剤学など様々な学問と関連していることを理解してもらうように意識している。			
	2017年9月～現在	3年次の「医薬品化学（分担）」の「代謝系に作用する医薬品、抗がん剤、感染症治療薬」を担当している。医薬品における構造式の重要性とその意味、官能基が果たす役割、薬理効果を示すその理由などを中心に説明している。薬剤名による単なる記憶ではなく、医薬品の構造式をみれば、どのような薬理作用を持ち、その投与方法、溶解度や酸性・塩基性などの物理的性質がイメージできる学問であることを意識してもらうように心がけている。			
	2017年9月～現在	3年次の「有機化学演習 B6」を担当している。これまで習った講義内容の総まとめであるが、すべての内容がつながり、より深く理解してもらう目的で、学生には適宜反応機構や解答などを板書してもらう。学生がわからない箇所、大事なポイントは特に丁寧に説明し、少しでも理解が深まるように意識しながら講義をしている。			
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Sato S., Takeda N., Miyoshi T., Ueda M., Miyata O.	論文	Eur. J. Org. Chem., 2015, 3899-3904. "Vicinal Functionalization of <i>N</i> -Alkoxyenamines: Tandem Umpolung Phenylation/Nucleophilic Addition Reaction Sequence"
Sato S., Takeda N., Ueda M., Miyata O.	論文	Synthesis, 2016, 48, 882-892. "Sequential [3,3]-Sigmatropic Rearrangement/Nucleophilic Arylation of <i>N</i> -(Benzoyloxy)enamides towards the Preparation of Cyclic $\beta$ -Aryl- $\beta$ -amino Alcohols"
Nandi R. K., Takeda N., Ueda M., Miyata O.	論文	Tetrahedron Lett., 2016, 57, 2269-2272. "Nucleophilic $\beta$ -Alkenylation of <i>N</i> -Alkoxyenamines: An Umpolung Strategy for the Preparation of $\beta$ , $\gamma$ -Unsaturated Ketones"
Takeda N., Ueda M., Mori N., Miyoshi T., Shimoda M., Uno Y., Kitagawa H., Emoto N., Mukai T., Miyata O.	論文	Heterocycles, 2017, 94, 750-762. "Fluorescence Quenching Induced by Sequential Addition-Aromatization of A BODIPY-Containing Dienylimine with Thiols"
Takeda N., Futaki E., Kobori Y., Ueda M., Miyata O.	論文	Angew. Chem. Int. Ed. 2017, 56, 16342-16346. "Nucleophilic Arylation of <i>N,O</i> -Ketene Acetals with Triaryl Aluminum Reagents: Access to $\alpha$ -Aryl Amides through an Umpolung Process"
2. 学会発表 (平成27年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
極性転換反応を利用した簡便な $\alpha$ -置換アミド類合成法の開発	2017年3月	日本薬学会第137年会

$N$ -（アシルオキシ）エナミドの [3, 3]-シグマトロピー転位反応の開発	2017年8月	第37回有機合成若手セミナー 「明日の有機合成を担う人のために」
メチルケトン類の立体選択的 $\alpha$ -フェニル化反応の開発	2017年8月	第37回有機合成若手セミナー 「明日の有機合成を担う人のために」
$N, O$ -ケテンアセタールの求核的アリール化反応の開発	2017年9月	第34回有機合成化学セミナー
$N$ -アルコキシラクタムの求核付加-環縮小反応の開発	2017年11月	第43回反応と合成の進歩シンポジウム
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003年～現在に至る	日本薬学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬品物理化学研究室	職名 講師	氏名 佐野 紘平
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		
(1) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)	2016年～現在	物理化学系実習 (2年次後期) 化合物の加水分解反応速度、表面張力の測定に関する実習等を担当。
	2016年～現在	物理化学Ⅲ (2年次後期) (分担、6コマ) 溶液の性質および電気化学に関する講義を担当、e-ラーニングを実施。
	2016年～現在	アクティブラボ (1～3年次通年) 1～3年次の学部学生に対して、物理化学関連の実験指導を実施。
	2017年～現在	薬学入門 (1年次前期) 物理系薬学に関する基礎的講義を実施。
	2017年～現在	アイソトープ演習 (3、4年次前期) (分担、6コマ) 放射線取扱主任者試験 (国家試験) の資格取得を目指し、問題演習を実施。
(2) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)	2016年～現在	研究室に配属された学部学生に対して研究指導を実施。 担当学生計2名が学会優秀発表賞を受賞。
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育	2016年～現在	大学院生に対して、講義および研究指導を実施。
(4) 他大学での講義	2017年7月14日	京都大学大学院薬学研究科の大学院生にセラノスティックス分子プローブに関する講義を実施。
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし
4 その他教育活動上特記すべき事項		該当なし
II 研究活動		

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kohei Sano, Takahito Nakajima, Peter L. Choyke, Hisataka Kobayashi	論文	<i>ACS Nano</i> , <b>7</b> :717-724 (2013) Markedly enhanced permeability and retention effects induced by photo-immunotherapy of tumors.
Kohei Sano, Yuriko Iwamiya, Tomoaki Kurosaki, Mikako Ogawa, Yasuhiro Magata, Hitoshi Sasaki, Takashi Ohshima, Minoru Maeda, Takahiro Mukai	論文	<i>Journal of Controlled Release</i> , <b>194</b> :310-31 (2014) Radiolabeled $\gamma$ -polyglutamic acid complex as a nano-platform for sentinel lymph node imaging.
Kengo Kanazaki, Kohei Sano, Akira Makino, Tsutomu Homma, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	<i>Scientific Reports</i> , <b>6</b> :33789 (2016) Polyoxazoline multivalently conjugated with indocyanine green for sensitive in vivo photoacoustic imaging of tumors.
Kohei Sano, Manami Ohashi, Kengo Kanazaki, Akira Makino, Ning Ding, Jun Deguchi, Yuko Kanada, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	<i>Bioconjugate Chemistry</i> , <b>28</b> :1024-1030 (2017) Indocyanine green-labeled polysarcosine for in vivo photoacoustic tumor imaging.
Kohei Sano, Yuko Kanada, Kengo Kanazaki, Ning Ding, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	<i>Journal of Nuclear Medicine</i> , <b>58</b> :1380-1385 (2017). Brachytherapy with intratumoral injections of radiometal-labeled polymers that thermo-responsively self-aggregate in tumor tissues.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
熱応答凝集性ポリマーを基盤とした小線源療法用薬剤の開発 (優秀発表賞受賞)	2017年・10月	第11回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム
熱応答凝集性ポリマーを母体とする新規内用放射線治療薬剤の腫瘍集積性評価 (優秀ポスター賞受賞)	2017年・10月	第67回 日本薬学会近畿支部総会・大会
がんの核医学診断を目的としたコンドロイチン硫酸被覆自己組織化ナノ粒子の開発 (優秀ポスター賞受賞)	2017年・10月	第67回 日本薬学会近畿支部総会・大会

放射標識熱応答凝集性ポリマーを用いる新規内用療法の開発 (優秀発表賞受賞)	2017年・3月	日本薬学会 第137年会
Brachytherapy using <sup>90</sup> Y-labeled thermo-responsive polymers that self-aggregate in tumor tissues	2016年・6月	63rd the Society of Nuclear Medicine
3. その他 (講演等)		
演題名	発表年・月	学会名
水溶性ポリマーを母体とするがんの診断・治療用プローブの開発 (日本薬学会物理系薬学部会奨励賞受賞)	2017年3月	日本薬学会 第137年会
III 学会等および社会における主な活動		
2003年～現在	日本薬学会会員	
2006年～現在	日本分子イメージング学会会員	
2008年～現在	日本核医学会会員	
2016年～現在	日本DDS学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属	エクステンションセンター	職名	講師	氏名	鎌尾 まや
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2004.4～2017.3 2017.4～	<p>担当する「衛生薬学系実習」において書き込み式実験プロトコルを導入し、受講前の事前学習を促進した。</p> <p>担当する「実践薬学」および「健康食品」において、薬剤師を対象としたグループディスカッション形式の研修への参加を必修化し、生涯研修の意義の啓蒙に勤めた。</p>		
2	作成した教科書、教材、参考書	2004.4～2017.3 2007.4～2017.3	<p>神戸薬科大学衛生薬学系実習書</p> <p>書き込み式実験プロトコル（プリント）</p>		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2018.3	神戸薬科大学薬剤師生涯研修支援事業であるシンポジウムにおける10年間の受講者調査（日本薬学会第138年会）		
4	その他教育活動上特記すべき事項		なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	

鎌尾まや (分担執筆)	著書	<p>ビタミンKと疾患—基礎の理解と臨床への応用 (医薬ジャーナル社) 2014. 12 (平成26年)</p> <p>ビタミンK同族体の化学的測定法および物理化学的構造決定法について蛍光検出HPLC法およびLC-MS/MS法を中心に解説するとともに、ビタミンK同族体の血中濃度について健常者における血中濃度、疾患やその他の因子との関連性、さらにビタミンK同族体の組織中濃度について概説した。</p> <p>分担部分：第2章第2節 ビタミンKの分析          分担執筆者：鎌尾まや          pp. 31-9          編者：岡野登志夫</p>
Hirota Y, Tsugawa N, Nakagawa K, Suhara Y, Tanaka K, Uchino Y, Takeuchi A, Sawada N, <u>Kamao M</u> , Wada A, Okitsu T, Okano T	論文	<p>Menadione (vitamin K<sub>3</sub>) is a catabolic product of oral phylloquinone (vitamin K<sub>1</sub>) in the intestine and a circulating precursor of tissue menaquinone-4 (vitamin K<sub>2</sub>) in rats. <i>J. Biol. Chem.</i>, 288(46), 33071-80, 2013 (平成25年)</p> <p>小腸でビタミンK<sub>1</sub>から側鎖が切断されたビタミンK<sub>3</sub>が産生し、血液中を循環することにより、組織中でのビタミンK<sub>2</sub>産生の材料として用いられることを証明した。</p> <p>本人担当部分：ビタミンK濃度の測定</p>
Hirota Y, Nakagawa K, Sawada N, Okuda N, Suhara Y, Uchino Y, Kimoto T, Funahashi N, <u>Kamao M</u> , Tsugawa N, Okano T	論文	<p>Functional characterization of the vitamin K<sub>2</sub> biosynthetic enzyme UBIAD1. <i>PLoS ONE</i>, 10(4), e0125737, 2015 (平成27年)</p> <p>ビタミンK<sub>2</sub>産生酵素UBIAD1の発現系を用いて活性測定条件を検討し、至適条件をpH8.5~9.0、DTT ≧0.1mMと決定した。UBIAD1は一般的な基質と考えられているgeranyl geranyl pyrophosphateのみならず、イソプレレン単位数の少ないgeranyl pyrophosphateやfarnesyl pyrophosphateも基質として認識することを明らかにした。また、menAやUbiAファミリーで保存されている領域に変異を導入すると酵素活性が消失することから、当該領域は酵素活性の発現に必須の部位であることを明らかにした。</p> <p>本人担当部分：ビタミンK濃度の測定</p>

Tsugawa N, Uenishi K, Ishida H, Ozaki R, Takase T, Minekami T, Uchino Y, <u>Kamao M</u> , Okano T	論文	Association between vitamin D status and serum parathyroid hormone concentration and calcaneal stiffness in Japanese adolescents: sex differences in susceptibility to vitamin D deficiency. J. Bone Miner. Metab., 34(4), 464-74, 2016 (平成28年) 日本人思春期男女を対象として血清ビタミンD代謝物濃度や骨密度について調査した。25-hydroxyvitamin D濃度は男子より女子で低い傾向を示し、男子では30%、女子では47%がビタミンD不足領域であった。また、踵骨骨密度に与える影響はカルシウム摂取量よりビタミンD摂取量の方が強く、思春期においてビタミンD摂取が骨密度の向上に有用であることを示した。また、25-hydroxyvitamin D濃度が50 nmol/Lを保つために必要なビタミンD摂取量を、男子では12 $\mu$ g、女子では14 $\mu$ gと推定した。 本人担当部分：ビタミンD濃度の測定とデータ解析
<u>Kamao M</u> , Hirota Y, Suhara Y, Tsugawa N, Nakagawa K, Okano T, Hasegawa H	論文	Determination of Menadione by Liquid Chromatography-Tandem Mass Spectrometry Using Pseudo Multiple Reaction Monitoring. Anal. Sci., 33(7), 863-867, 2017 (平成29年) 疑似的なmultiple reaction monitoring (MRM)を用いたLC-MS/MS法により、従来定量が困難であった側鎖を持たないビタミンKであるmenadione (MD)の定量法を確立した。本法によるMDおよび重水素化MDの検出限界は40 pgあるいは2 pgであり、日内変動、日差変動は5.4-8.2%と良好な値を示した。本法により尿中、血漿中、細胞あるいは培地抽出物中のMDの定量が可能であった。 本人担当部分：研究デザイン、測定およびデータ解析
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
培養細胞におけるメナジオン（ビタミンK <sub>3</sub> ）とその抱合体の生成	2013 (平成25) .5	日本ビタミン学会第65回大会, 東京
ビタミンD受容体遺伝子欠損マウスの性機能の解析	2014 (平成26) .9	フォーラム2014 衛生薬学・環境トキシコロジー, 筑波
25-Hydroxyvitamin D 1 $\alpha$ -Hydroxylase (CYP27B1)遺伝子欠損マウスにおける性機能の解析	2015 (平成27) .9	フォーラム2015 衛生薬学・環境トキシコロジー, 神戸

ビタミンD受容体欠損マウスの生殖機能不全に及ぼす高カルシウム食の影響	2016 (平成28) .6	日本ビタミン学会第68回大会, 富山
ビタミンD受容体およびビタミンD活性化酵素遺伝子欠損マウスの生殖機能低下に及ぼすカルシウム補充の影響	2017 (平成29) .3	日本薬学会第137回大会, 仙台
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010.7~2013.7	日本薬学会環境・衛生部会新人賞選考委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬理学研究室	職名	講師	氏名	泉 安彦
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 本学薬学部学生への教育(講義)		2017年～現在	薬理学Ⅱ(2年次後期)		
		2018年～現在	薬理学Ⅳ(3年次前期) (分担4コマ)		
		2018年～現在	医薬品毒性学(4年次前期) (分担4コマ)		
		2017年～現在	総合薬学講座(6年次後期)		
(2) 本学薬学部学生への教育(実習)		2017年～現在	薬理学実習 (3年次後期)		
		2017年～現在	卒業研究Ⅰ、Ⅱ(4年次、5年次)研究室に配属された学部学生に対して研究指導を実施。		
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育		2018年～現在	病態薬理生化学特論(後期)		
(4) 他大学での講義		2017年11月2, 9, 30日, 12月7日	京都大学薬学部にて薬理学Ⅰの講義を実施。		
		2017年12月25日	京都大学薬学部にて薬理学Ⅲの講義を実施。		
		2017年12月1日	京都大学大学院薬学研究科にて基礎医療薬科学特論Ⅱの講義を実施。		
2 作成した教科書、教材、参考書			該当なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			該当なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項			該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					

氏名	種別	内容
Wakita S, Izumi Y, Nakai T, Adachi K, Takada-Takatori Y, Kume T, Akaike A.	論文	Staurosporine induces dopaminergic neurite outgrowth through AMP-activated protein kinase/mammalian target of rapamycin signaling pathway. Neuropharmacology. 77:39-48, 2014.
Izumi Y, Ezumi M, Takada-Takatori Y, Akaike A, Kume T.	論文	Endogenous dopamine is involved in the herbicide paraquat-induced dopaminergic cell death. Toxicol Sci. 139:466-478, 2014.
Izumi Y, Kondo N, Takahashi R, Akaike A, Kume T.	論文	Reduction of Immunoreactivity against the C-terminal region of the intracellular $\alpha$ -synuclein by exogenous $\alpha$ -synuclein aggregates: possibility of conformational changes. J Parkinsons Dis. 6:569-579, 2016.
Masaki Y, Izumi Y, Matsumura A, Akaike A, Kume T.	論文	Protective effect of Nrf2-ARE activator isolated from green perilla leaves on dopaminergic neuronal loss in a Parkinson's disease model. Eur J Pharmacol. 798:26-34, 2017.
Izumi Y, Wakita S, Kanbara C, Nakai T, Akaike A, Kume T.	論文	Integrin $\alpha 5 \beta 1$ expression on dopaminergic neurons is involved in dopaminergic neurite outgrowth on striatal neurons. Sci Rep. 7:42111, 2017.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
化合物ライブラリーから見出したNrf2-ARE経路活性化物質の細胞保護作用機序の解明	2016年6月	第129回日本薬理学会近畿部会
Positive allosteric modulators of the $\alpha 7$ nicotinic acetylcholine receptor suppress microglial activation.	2016年7月	第39回日本神経科学大会

食品からのNrf2-ARE経路活性化物質の探索およびその神経保護作用	2017年3月	第90回日本薬理学会年会
パーキンソン病における移植治療効果向上を目指したドーパミン神経突起伸長の試み	2017年3月	日本薬学会第137年会
チョコレートからの Nrf2-ARE 経路活性化物質の単離・同定	2017年8月	次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2017
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003年1月～現在	日本薬理学会	
2005年2月～現在	日本神経科学学会	
2008年4月～現在	日本薬学会	
2013年4月～現在	日本薬理学会 学術評議員	

専任教員の教育・研究業績

所属 生命分析化学研究室	職名 講師	氏名 大山 浩之
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年4月～現在	担当する分析化学系実習では、講義で学んだ原理・原則などについて実習を通してより理解を深くし、安全かつ円滑に実験を遂行するための手法や技術の指導に努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Oyama H., Yamaguchi S., Nakata S., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2013, 85(10), 4930-4937. "Breeding" diagnostic antibodies for higher assay performance: a 250-fold affinity-matured antibody mutant targeting a small biomarker"
Oyama H., Tanaka E., Kawanaka T., Morita I., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2013, 85(23), 11553-11559. "Anti-idiotypic scFv-enzyme fusion proteins: A clonable analyte-mimicking probe for standardized immunoassays targeting small biomarkers"
大山浩之（分担執筆）	著書	「免疫測定法～基礎から先端まで」生物化学的測定研究会編、講談社、東京、2014

Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2015, 87(24), 12387-12395. "Gaussia luciferase as a genetic fusion partner with antibody fragments for sensitive immunoassay monitoring of clinical biomarkers"
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Banzono E., Ishii K., Kubo S., Watanabe Y., Hirai A., Kaede C., Ohta M., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2017, 89(1), 988-995. "One-shot in vitro evolution generated an antibody fragment for testing urinary cotinine with more than 40-fold enhanced affinity"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
高親和力抗エストラジオール変異scFvの創製とその親和性成熟機構の解析	2015年10月	第55回日本臨床化学会年次学術集会
試験管内親和性成熟による実用抗体の創製：低分子バイオマーカーを例に	2015年11月	生物化学的測定研究会第20回学術シンポジウム
抗コルチゾールscFvの親和性成熟における部位特異的変異の効果	2016年3月	日本薬学会第136年会
抗 $\Delta^9$ -テトラヒドロカンナビノール一本鎖Fvフラグメントの作製と試験管内親和性成熟	2017年7月	日本法中毒学会第36年会
高親和力を保持した抗エストラジオールscFv最少変異体調製の試み	2017年9月	日本分析化学会66年会
III 学会等および社会における主な活動		
2004年4月～現在	日本薬学会会員	
2006年6月～現在	日本分析化学会会員	
2010年4月～現在	日本臨床化学会会員	
2013年4月～現在	生物化学的測定研究会会員	
2017年6月～現在	日本法中毒学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬剤学研究室	職名 助教	氏名 細川 美香
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
薬学部学生への教育 実習	2009～2014年	神戸薬科大学薬学部4年生に実務実習事前教育 前期(薬剤学関連実習)、実務実習事前教育 後期（処方せんと調剤・鑑査）の指導を行った。
薬学部学生への教育 実習	2009年～現在に至る	薬剤学研究室（卒業研究I, II）に配属された学生に（5,6年生）、研究の指導を行い、また研究したことをまとめ、発表できるように指導した。
薬学部学生への教育 実習	2014年～現在に至る	神戸薬科大学薬学部3年生に薬剤学・製剤学実習の指導を行った。
薬学部学生への教育 薬学英語入門	2013年～現在に至る	神戸薬科大学薬学部3年生に薬学英語入門の指導を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書 特になし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2017年9月	第2回日本薬学教育学会大会にて、以下の発表を行った。 演題名「神戸薬科大学の薬学英語入門での学力向上に導くジグソー法の検討—コーディングによる質的分析から学生の意識を可視化する—」
4 その他教育活動上特記すべき事項	2017年	神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムへ参画し、プログラム：ジグソー法を活用した「薬学英語入門Ⅰ、Ⅱ」の授業改善を代表者として実施した。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Tanaka S, Hosokawa M, Yonezawa T, Hayashi W, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2015, 38, 435-440. "Induction of epithelial-mesenchymal transition and down-regulation of miR-200c and miR-141 in oxaliplatin-resistant colorectal cancer cells"
Tanaka S, Hosokawa M, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2015, 38, 1272-1279. "Effects of decitabine on invasion and exosomal expression of miR-200c and miR-141 in oxaliplatin-resistant colorectal cancer cells"
Hosokawa M, Saito M, Nakano A, Iwashita S, Ishizaka A, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Oncol. Lett. 2015, 10, 761-767. "Acquired resistance to decitabine and cross-resistance to gemcitabine to gemcitabine during the long-term treatment of human HCT116 colorectal cancer cells with decitabine"
Tanaka S, Hosokawa M, Matsumura J, Matsubara E, Kobori A, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40, 1320-1325. "Effects of zebularine on invasion activity and intracellular expression level of let-7b in colorectal cancer cells"
Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40, 2199-2204. "Different schedule-dependent effects of epigenetic modifiers on cytotoxicity by anticancer drugs in colorectal cancer cells"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
HPLC-UV 法による deoxycytidine kinase (dCK) 活性及び cytidine deaminase (CDA) 活性の同時定量法の検討	2016年3月	日本薬学会 第136年会
ヒト大腸がん細胞の細胞内活性酸素レベルに及ぼすデシタビンと抗がん薬併用の影響	2016年5月	日本薬剤学会 第31年会
大腸がん細胞におけるデシタビンに対する獲得耐性と自然耐性の機構の比較	2016年10月	第66回 日本薬学会近畿支部総会・大会
ヒト大腸がん細胞株SW620細胞におけるデシタビン長期処置による耐性の獲得	2017年3月	日本薬学会 第137年会

Simultaneous determination of gemcitabine metabolites produced by deoxycytidine kinase and cytidine deaminase using a reversed-phase HPLC-UV method	2017年11月	日本薬物動態学会第32回年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2004年～現在に至る	日本薬学会会員	
2005年～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2007年～現在に至る	日本薬剤学会会員	
2008年～現在に至る	日本薬物動態学会会員	
2016年～現在に至る	日本薬学教育学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 微生物化学研究室	職名 助教	氏名 増田 有紀
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
微生物学実習	2010年10月～現在	学部2年次後期に、微生物実習を行っている。学生の理解度を向上させるため、少人数でのディスカッションを実施している。また、操作（特に無菌操作）の一つ一つの意味について理解を深めるために、実習開始時に説明に加えてデモンストレーションを行っている。
情報リテラシー	2014年4月～現在	学部1年次前期に、情報リテラシーの講義の一部として、パワーポイントを用いたプレゼンテーションの作成について指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
なし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Masuda Y., Ohta Y., Morita Y., Nakayama Y., Miyake A., Itoh N., Konishi M.	論文	Biol. Pharm. Bull., 2015, 38, 687-693. "Expression of Fgf23 in activated dendritic cells and macrophages in response to immunological stimuli in mice."
Masuda Y., Nawa D., Nakayama Y., Konishi M., Nanba H.	論文	J. Leukoc. Biol., 2015, 98, 1015-1025. "Soluble $\beta$ -glucan from <i>Grifola frondosa</i> induces tumor regression in synergy with TLR9 agonist via dendritic cell-mediated immunity."

Kato S., Masuda Y., Konishi M., Oikawa T.	論文	J. Pharm. Biomed. Anal., 2015, 116,101-104. "Enantioselective analysis of D- and L-amino acids from mouse macrophages using high performance liquid chromatography."
Masuda Y, Nakayama Y, Tanaka A, Naito K, Konishi M.	論文	PLoS One., 2017, 12(3):e0173621. "Antitumor activity of orally administered maitake $\alpha$ -glucan by stimulating antitumor immune response in murine tumor."
Nakayama Y., Masuda Y., Ohta H, Tanaka T, Washida M, Nabeshima YI, Miyake A, Itoh N, Konishi M.	論文	Sci. Rep., 2017, 23:7(1):330. "Fgf21 regulates T-cell development in the neonatal and juvenile thymus."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
III 学会等および社会における主な活動		
2003年～現在に至る	日本薬学会会員	
2009年～現在に至る	日本免疫学会会員	
2010年～現在に至る	日本分子生物学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 医療薬学研究室	職名 助教	氏名 堀部 紗世
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
4年生に対する実務事前実習	2013年10月1日～	本学4次生を対象に、事前実務実習を指導している。疑義照会では、現場で働いている先生方とロールプレイおよびグループディスカッションを行い、実際に疑義照会する時の注意点や配慮および薬剤師としての倫理について指導している。
卒業研究	2013年10月1日～	本学5年生および6年生を対象に、卒業研究を指導している。卒業研究を通して、問題を提議しその問題を自己解決する力を養いように指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特になし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特になし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Horibe S, Matsuda M, Tanahashi T, Inoue J, Kawauchi S, Mizuno S, Ueno M, Takahashi K, Maeda Y, Maegouchi T, Murakami Y, Yumoto R, Nagai J, Takano M.	論文	Life Sciences (2015), Vol. 124, p31-40 "Cisplatin resistance in human lung cancer is linked with dysregulation of cell cycle associated proteins."

Horibe S, Tanahashi T, Kawauchi S, Mizuno S, Rikitake Y.	論文	International journal of medical sciences (2016), Vol. 13, p653-63 "Preventative Effects of Sodium Alginate on Indomethacin-induced Small-intestinal Injury in Mice."
Kawauchi S, Nakamura T, Horibe S, Tanahashi T, Mizuno S, Hamaguchi T, Rikitake Y.	論文	Biopharmaceutics & drug disposition (2016), Vol. 37, p522-532 "Down-regulation of hepatic CYP3A1 expression in a rat model of indomethacin-induced small intestinal ulcers."
Horibe S, Kawauchi S, Yasuike S, Mizuno S, Kato I, Rikitake Y.	論文	Journal of Biomedicine (2017), Vol. 2, p101-108 "Anti-inflammatory Effect of JBP485 on Dextran Sulfate Sodium-induced Colitis in Mice."
Terao Y, Fujita H, Horibe S, Sato J, Minami S, Kobayashi M, Matsuoka I, Sasaki N, Satomi-Kobayashi S, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	Biochemical and biophysical research communications (2017), Vol. 486, p811-816 "Interaction of FAM5C with UDP-glucose:glycoprotein glucosyltransferase 1 (UGGT1): Implication of N-glycosylation in FAM5C secretion."
2. 学会発表 (平成28年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
シスプラチン耐性獲得におけるCD44v9の役割	2017年3月	日本薬学会
ラミニンによるアストロサイトの突起伸長の促進	2017年3月	日本薬学会
A549細胞のCDDP耐性獲得機構にはCD44vは関与しない	2017年9月	日本癌学会
シスプラチン耐性獲得にはCD44vを介したxCTの細胞膜上での発現増加が関与する	2017年12月	日本分子生物学会
ラミニンによるアストロサイトの突起形成促進にはジストログリカンと $\alpha$ -シトロフィンを介したAQP4の発現が関与する	2017年12月	日本分子生物学会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

堀部

2000年4月～現在に至る	日本薬学会会員
2001年1月～現在に至る	医療薬学会会員
2008年1月～現在に至る	癌学会会員

## 専任教員の教育・研究業績

所属 製剤学研究室	職名 助教	氏名 湯谷 玲子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2011年4月～2014年12月	4年次前期実務実習事前教育（製剤学関連実習）において、製剤試験法についての指導を行った。また4年次後期実務実習事前教育において、無菌操作の実践の項目を担当した。
	2014年9月～現在	3年次後期薬剤学・製剤学実習において、製剤試験法についての指導を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Yutani R., Kikuchi T., Teraoka R., Kitagawa S.	論文	Efficient delivery and distribution in skin of chlorogenic acid and resveratrol induced by microemulsion using sucrose laurate, Chem. Pharm. Bull., 62, 274-280 (2014)

Kitagawa S., Fujiwara M., Okinaka Y., Yutani R., Teraoka R.	論文	Effects of mixing procedure itself on the structure, viscosity, and spreadability of white petrolatum and salicylic acid ointment and the skin permeation of salicylic acid, Chem. Pharm. Bull., 63, 43-48 (2015)
Yutani R., Teraoka R., Kitagawa S.	論文	Microemulsion using polyoxyethylene sorbitan trioleate and its usage for skin delivery of resveratrol to protect skin against UV-induced damage, Chem. Pharm. Bull., 63, 741-745 (2015)
Yutani R., Komori Y., Tekeuchi A., Teraoka R., Kitagawa S.	論文	Prominent efficiency in skin delivery of resveratrol by novel sucrose oleate microemulsion, J. Pharm. Pharmacol., 68, 46-55 (2016)
Kitagawa S., Yutani R., Kodani R., Teraoka R.	論文	Differences in the rheological properties and mixing compatibility with heparinoid cream of brand name and generic steroidal ointments; effects of surfactants they contain, Results Pharma Sci., 6, 7-14 (2016)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
攪拌操作に伴う白色ワセリンのレオロジー特性の経時的変化	2017年3月	日本薬学会第137年会
Microemulsions using sucrose laurate with various co-surfactants and their application to intradermal delivery of (-)-epicatechin	2017年5月	6th FIP Pharmaceutical Sciences World Congress 2017
他剤との混合に伴うワセリン軟膏からのサリチル酸の経皮吸収性の変化	2017年7月	医療薬学フォーラム2017 第25回クリニカルファーマシーシンポジウム
Effects of mixing with other ointments and creams on rheological properties of salicylic acid ointment and skin permeation of salicylic acid	2017年10月	第11回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム

ワセリンを基剤とする軟膏剤の特性に及ぼす攪拌操作および温度の影響	2017年11月	第27回日本医療薬学会年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2008年～現在に至る	日本薬学会会員	
2011年～現在に至る	日本薬剤学会会員	
2011年～現在に至る	日本化粧品学会会員	
2012年～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2014年～現在に至る	日本油化学会会員	
2015年～現在に至る	日本膜学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 医薬細胞生物学	職名 助教	氏名 山田泰之
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年9月1日～現在に至る	本学2年生を対象に「細胞生物学実習」にて、顕微鏡の使用方法や、動物・植物の組織の観察、重要生薬の観察や鑑定についての指導を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Yamada Y., Shimada T., Motomura Y., Sato F	論文	PLoS One 2017, 12, e0186953 "Modulation of benzyloisoquinoline alkaloid biosynthesis by heterologous expression of CjWRKY1 in <i>Eschscholzia californica</i> cells."
Yamada Y., Yoshimoto T., Yoshida T.S., Sato F.	論文	Frontiers in Plant Science 2016, 7, 1352 "Characterization of the Promoter Region of Biosynthetic Enzyme Genes Involved in Berberine Biosynthesis in <i>Coptis japonica</i> "

Yamada Y., Sato F.	論文	Scientific Report 2016, 6, 31988 “Tyrosine phosphorylation and protein degradation control the transcriptional activity of WRKY involved in benzylisoquinoline alkaloid biosynthesis”
Yamada Y., Motomura Y., Sato F.	論文	Plant & Cell Physiology 2015, 56, 1019-1030 “CjbHLH1 homologs regulate sanguinarine biosynthesis in Eschscholzia californica cells”
Yamada Y., Sato F.	著書	International Review of Cell and Molecular Biology 2013, 305, 339-382 “Transcription Factors in Alkaloid Biosynthesis”
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
イソキノリンアルカロイド生合成系の制御に関わるAP2/ERF転写因子群の探索と機能解析	2017年8月	第35回日本植物細胞分子生物学会（さいたま）大会
イソキノリンアルカロイド生産制御系の構築に向けたCjWRKY1の機能展開	2016年9月	第34回日本植物細胞分子生物学会（上田）大会
イソキノリンアルカロイド生合成系の発現制御に関わるCjWRKY1の翻訳後制御機構の解析	2016年3月	日本農芸化学会2016年度大会
ベルベリン生合成系を制御するCjWRKY1の翻訳後制御	2015年8月	第33回日本植物細胞分子生物学会（東京）大会
ハナビシソウ形質転換培養細胞を用いたCjbHLH1ホモログ, EcbHLH1の機能解析	2014年3月	日本農芸化学会2014年度大会
III 学会等および社会における主な活動		
2008年5月～現在に至る	日本植物細胞分子生物学会会員	
2008年11月～現在に至る	日本農芸化学会会員	
2010年1月～現在に至る	日本植物生理学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属	薬品物理化学研究室	職名	助教	氏名	山崎 俊栄
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年～現在	物理化学実習（2年次後期）（分担） 生体膜モデル粒子への薬物の分配係数の決定を担当		
2	作成した教科書、教材、参考書		該当なし		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Nakamura M., Shibata S., Yamasaki T., Ueno M., Nakanishi I., Matsumoto K., Kamada T., Yamada K., Aoki I.		論文	<i>Am. J. Transl. Res.</i> , 9(10): 4481-91 (2017) Feasibility of magnetic resonance redox imaging at low magnetic field: comparison at 1 T and 7 T.		
Yasui H., Yamamoto K., Suzuki M., Sakai Y., Bo T., Nagane M., Nishimura E., Yamamori T., Yamasaki T., Yamada K., Inanami O.		論文	<i>Cancer Lett.</i> , 390: 160-7 (2017) Lipophilic triphenylphosphonium derivatives enhance radiation-induced cell killing via inhibition of mitochondrial energy metabolism in tumor cells.		

Audran G., Bagryanskaya E., Edeleva M., Marque S. R., Yamasaki T.	論文	<i>RSC Adv.</i> , 7(9): 4993-5001 (2017) Dual-initiator alkoxyamines with an <i>N</i> -tert-butyl- <i>N</i> -(1-diethylphosphono-2,2-dimethylpropyl) nitroxide moiety for preparation of block co-polymers.
Audran G., Brémond P., Joly J. P., Marque S. R., Yamasaki T.	論文	<i>Org. Biomol. Chem.</i> , 14(14): 3574-83 (2016) C-ON bond homolysis in alkoxyamines. Part 12: the effect of the para-substituent in the 1-phenylethyl fragment.
Audran G., Brémond P., Marque S. R., Yamasaki T.	論文	<i>J. Org. Chem.</i> , 81(5): 1981-8 (2016) C-ON Bond Homolysis of Alkoxyamines, Part 11: Activation of the Nitroxyl Fragment,
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
アルコキシアミンの C-ON 結合開裂速度に対する置換基効果の検討 -ラジカル放出薬剤の開発に向けて-	2017年10月	第67回 日本薬学会近畿支部大会
Towards the structural design of piperidine nitroxides for in vivo measurement probe	2014年11月	Joint Conference of APES2014・IES・SEST2014
Rapid and convenient detection of ascorbic acid using a fluorescent nitroxide switch	2014年 9月	SPIN-2014
ニトロキシドによるラジカル反応および消光機構を利用した脂質ラジカル検出手法の開発	2013年12月	第30回 日本薬学会九州支部大会
ピペリジン系ニトロキシドのO2・-に対する反応性評価	2013年10月	SEST2013 第52回電子スピンサイエンス学会年会
III 学会等および社会における主な活動		
2006年 ~ 現在	日本薬学会会員	
2007年 ~ 現在	電子スピンサイエンス学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 薬化学研究室	職名 助教	氏名 高木 晃
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年10月-現在に至る	薬化学研究室に配属された学生の卒業研究指導を行っている。実験で行うことを薬剤師国家試験と関連付けすることで実験にも興味を持てるように工夫している。
	2017年4月-現在に至る	有機化学実習(学部2年生)を分担している。実習時間の終わりにディスカッションを行い、実習の目的と実際に行った手順の理解を促進できるように努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
T. Ikawa, A. Takagi, M. Goto, Y. Aoyama, Y. Ishikawa, Y. Itoh, H. Tokiwa, S. Akai	論文	J. Org. Chem. 2013, 78, 2965-2983. "Regio-complementary Cycloaddition Reactions of Boryl- and Silylbenzynes with 1,3-Dipoles: Selective Synthesis of Benzo-Fused Azole Derivatives"
A. Takagi, T. Ikawa, Y. Kurita, K Saito, K. Azechi, M. Egi, Y. Itoh, H. Tokiwa, Y. Kita, S. Akai	論文	Tetrahedron 2013, 69, 4338-4352. "Generation of 3-Borylbenzynes, Their Regioselective Diels-Alder Reactions, and Theoretical Analysis"

A. Takagi, T. Ikawa, K. Saito, S. Masuda, T. Ito, S. Akai	論文	Org. Biomol. Chem. 2013, 11, 8145-8150. "ortho-Selective Nucleophilic Addition of Amines to 3-Borylbenzynes: Synthesis of Multisubstituted Anilines by the Triple Role of the Boryl Group"
T. Ikawa, R. Yamamoto, A. Takagi, T. Ito, K. Shimizu, M. Goto, Y. Hamashima, S. Akai	論文	Adv. Synth. Catal. 2015, 67, 2287-2300. "2-[(Neopentyl glycolato)boryl]phenyl Triflates and Halides for Fluoride Ion-Mediated Generation of Functionalized Benzynes"
T. Ikawa, S. Masuda, A. Takagi, S. Akai	論文	Chem. Sci. 2016, 7, 5206-5211. "1,3- and 1,4-Benzdiyne equivalents for regioselective synthesis of polycyclic heterocycles"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Theoretical analysis of regioselectivities in cycloaddition reactions of 3-silyl- and 3-borylbenzynes	2015年11月	SKO symposium
銅触媒によるホウ素置換ベンザインの位置選択的三成分カップリング反応	2016年9月	第63回有機金属化学討論会
2-ボリルフェニルノナフラートを前駆体とする温和な条件下でのベンザイン発生とベンゾ縮合環の合成	2016年9月	第46回複素環化学討論会
2-ヒドロキシフェニルボロン酸を前駆体とするベンザイン発生法の開発	2016年10月	第66回日本薬学会近畿支部総会・大会
反応性官能基を有するベンザインの効率的発生法	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会
III 学会等および社会における主な活動		
2009年～現在に至る	日本薬学会会員	
2009年～現在に至る	有機合成化学協会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 特任助教	氏名 内藤 裕子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年4月～  2016年4月～	学部3年次生を対象とした生物学系I実習（生化学実習）を分担している。実習時間の終わりに行うディスカッション等を通し、自らの手で行った実験と様々な講義で得た知識とが結びつき、より理解が深まるよう心がけている。  学部4、5、6年次生に対し、卒業研究の指導を行っている。答えが分からない課題を解決し、その成果を発表していく、という研究活動を通して、作業（実験）遂行能力および思考力の両面から問題解決能力の向上を目指している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Naito-Matsui Y, Takada S, Kano Y, Iyoda T, Sugai M, Shimizu A, Inaba K, Nitschke L, Tsubata T, Oka S, Kozutsumi Y, Takematsu H.	論文	J Biol Chem. 2014, 289(3), 1564-79. "Functional evaluation of activation-dependent alterations in the sialoglycan composition of T cells"

Deng L, Song J, Gao X, Wang J, Yu H, Chen X, Varki N, Naito-Matsui Y, Galán JE, Varki A.	論文	Cell. 2014, 159(6), 1290-1299. "Host adaptation of a bacterial toxin from the human pathogen <i>Salmonella typhi</i> "
Watanabe H, Okahara K, Naito-Matsui Y, Abe M, Go S, Inokuchi J, Okazaki T, Kobayashi T, Kozutsumi Y, Oka S, Takematsu H.	論文	Mol Biol Cell. 2016, 27(13), 2037-50. "Psychosine-triggered endomitosis is modulated by membrane sphingolipids through regulation of phosphoinositide 4,5-bisphosphate production at the cleavage furrow"
Naito-Matsui Y, Davies LR, Takematsu H, Chou HH, Tangvoranuntakul P, Carlin AF, Verhagen A, Heyser CJ, Yoo SW, Choudhury B, Paton JC, Paton AW, Varki NM, Schnaar RL, Varki A.	論文	J Biol Chem. 2017, 292(7), 2557-2570. "Physiological Exploration of the Long Term Evolutionary Selection against Expression of <i>N</i> -Glycolylneuraminic Acid in the Brain"
Gao X, Deng L, Stack G, Yu H, Chen X, Naito-Matsui Y, Varki A, Galán JE.	論文	Nat Microbiol. 2017, 2(12), 1967. "Evolution of host adaptation in the <i>Salmonella typhoid</i> toxin"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Exploring consequences of <i>N</i> -glycolylneuraminic acid overexpression in the brain	2014年11月	Society for Glycobiology (SFG) & Japanese Society of Carbohydrate Research (JSCR) 2014 Joint Annual Meeting
Impact of tissue/animal-specific expression pattern of <i>N</i> -glycolylneuraminic acid	2015年12月	BMB2015 (第38回 日本分子生物学会年会/第88回 日本生化学会大会合同大会)
脳における <i>N</i> -グリコリルノイラミン酸の発現は生体にとって負に働く	2016年5月	第63回 日本生化学会近畿支部例会
6位硫酸化コンドロイチン硫酸欠損マウスにおける統合失調症様症状の発現	2017年7月	第36回 日本糖質学会年会
6位硫酸化コンドロイチン硫酸欠損による神経機能障害	2017年12月	ConBio2017

内藤

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2002年4月～現在	日本生化学会会員
2003年5月～現在（2007年度を除く）	日本免疫学会会員
2004年8月～現在	日本糖質学会会員

## 専任教員の教育・研究業績

所属	薬剤学研究室	職名	特任助教	氏名	田中 章太
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年4月～現在に至る 2016年10月～現在に至る		薬剤学研究室に配属された学生（4,5,6年生）に、卒業研究の指導を行った。 3年生次の薬剤学・製剤学実習を分担した。	
2	作成した教科書、教材、参考書 特になし				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし				
4	その他教育活動上特記すべき事項 特になし				
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Ikehata M, Ogawa M, Yamada Y, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S.		論文		Biol. Pharm. Bull. 37 (1): 67-73, 2014. "Different effects of epigenetic modifiers on the cytotoxicity induced by 5-fluorouracil, irinotecan or oxaliplatin in colon cancer cells."	
Tanaka S, Hosokawa M, Yonezawa T, Hayashi W, Ueda K, Iwakawa S		論文		Biol. Pharm. Bull., 38 (3): 435-440, 2015. "Induction of epithelial-mesenchymal transition and down-regulation of miR-200c and miR-141 in oxaliplatin-resistant colorectal cancer cells."	
Tanaka S, Hosokawa M, Ueda K, Iwakawa S.		論文		Biol. Pharm. Bull., 38 (9): 1272-1279, 2015. "Effects of decitabine on invasion and exosomal expression of miR-200c and miR-141 in oxaliplatin-resistant colorectal cancer cells."	

Tanaka S, Hosokawa M, Matsumura J, Matsubara E, Kobori A, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull., 40 (9): 1320-1325, 2017. "Effects of Zebularine on Invasion Activity and Intracellular Expression Level of let-7b in Colorectal Cancer Cells"
2. 学会発表 (平成27年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
オキサリプラチン耐性を示すヒト大腸がん細胞株HCT116細胞の白金製剤感受性に及ぼすヒストン脱アセチル化酵素阻害薬の影響	2017年10月	第67回 日本薬学会近畿支部総会・大会
ヒト大腸がん細胞株HCT116細胞の遊走能、浸潤能に及ぼすオキサリプラチン長期処置の影響	2017年5月	日本薬剤学会第32年会
ヒト大腸がん細胞株 SW620 細胞及びそのオキサリプラチン耐性細胞の浸潤能に及ぼすmicroRNA let-7b の影響	2016年10月	第66回 日本薬学会近畿支部総会・大会
ヒト大腸がん細胞株のexosome中let-7ファミリーmicroRNA発現量に及ぼすゼブラリンの影響	2015年10月	第66回 日本薬学会近畿支部総会・大会
オキサリプラチン耐性ヒト大腸がん細胞の転移能及びエキソソーム中microRNA 発現レベルに及ぼすデシタピンの影響	2015年3月	日本薬学会 第135年会
III 学会等および社会における主な活動		
2012年～現在に至る	日本薬学会会員	
2012年～現在に至る	日本薬物動態学会会員	
2016年～現在に至る	日本薬剤学会会員	
2016年～現在に至る	日本医療薬学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 臨床薬学研究室	職名 特任助教	氏名 宮川 一也
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Saito T, <b>Miyagawa K</b> , Chen SY, Tamosiuniene R, Wang L, Sharpe O, Samayoa E, Harada D, Moonen JAJ, Cao A, Chen PI, Hennigs JK, Gu M, Li CG, Leib RD, Li D, Adams CM, Del Rosario PA, Bill M, Haddad F, Montoya JG, Robinson WH, Fantl WJ, Nolan GP, Zamanian RT, Nicolls MR, Chiu CY, Ariza ME, Rabinovitch M.	原著論文	Upregulation of Human Endogenous Retrovirus-K Is Linked to Immunity and Inflammation in Pulmonary Arterial Hypertension. <i>Circulation</i> . 2017;136(20):1920-1935.

Chen PI, Cao A, <b>Miyagawa K</b> , Tojais NF, Hennigs JK, Li CG, Sweeney NM, Inglis A, Wang L, Li D, Ye M, Feldman BJ, Rabinovitch M.	原著論文	Amphetamines Promote Mitochondrial Dysfunction and DNA Damage in Pulmonary Hypertension. JCI insight. 2017;2(2):e90427.
Rhodes CJ, Im H, Cao A, Hennigs JK, Wang L, Sa S, Chen PI, Nickel NP, <b>Miyagawa K</b> , Hopper RK, Tojais NF, Li CG, Gu M, Spiekerkoetter E, Xian Z, Chen R, Zhao M, Kaschwich M, Del Rosario PA, Bernstein D, Zamanian RT, Wu JC, Snyder MP, Rabinovitch M.	原著論文	RNA Sequencing Analysis Detection of a Novel Pathway of Endothelial Dysfunction in Pulmonary Arterial Hypertension. Am J Respir Crit Care Med. 2015;192(3):356-66.
Nickel NP, Spiekerkoetter E, Gu M, Li CG, Li H, Kaschwich M, Diebold I, Hennigs JK, Kim KY, <b>Miyagawa K</b> , Wang L, Cao A, Sa S, Jiang X, Stockstill RW, Nicolls MR, Zamanian RT, Bland RD, Rabinovitch M.	原著論文	Elafin Reverses Pulmonary Hypertension via Caveolin-1-Dependent Bone Morphogenetic Protein Signaling. Am J Respir Crit Care Med. 2015;191(11):1273-86.
Diebold I, Hennigs JK, <b>Miyagawa K</b> , Li CG, Nickel NP, Kaschwich M, Cao A, Wang L, Reddy S, Chen PI, Nakahira K, Alcazar MA, Hopper RK, Ji L, Feldman BJ, Rabinovitch M.	原著論文	BMPR2 Preserves Mitochondrial Function and DNA during Reoxygenation to Promote Endothelial Cell Survival and Reverse Pulmonary Hypertension. Cell Metab. 2015;21(4):596-608.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Smooth Muscle Cells Regulate the Capacity for Endothelial Regeneration by Coordinating Notch1 Mediated Metabolism, Histone Acetylation and Gene Regulation In a BMPR2 Dependent Manner.	2016・11	American Heart Association Scientific Session 2016
Contact-Mediated Interaction between Pulmonary Artery Endothelial and Smooth Muscle Cells Promotes a BMPR2- $\beta$ -catenin-Notch1 Signal Causing Hyperpolarization of Endothelial Mitochondria and a Stalk Cell-Like Phenotype.	2015・11	American Heart Association Scientific Session 2015
Endothelin Receptor Antagonism can Increase Cardiac Output after Balloon Pulmonary Angioplasty and Serum Endothelin-1 Levels Predict the Effect of It	2014・3	第78回日本循環器学会

Balloon Pulmonary Angioplasty Improves Clinical Status and Hemodynamics in Patients with Non-operable Chronic Thromboembolic Pulmonary Hypertension in Comparison to Pulmonary Endarterectomy in Operable Patients.	2013・11	American Heart Association Scientific Session 2013
BPA前後における血中ET-1濃度測定とバイオマーカーとしての応用	2013・10	第1回日本肺高血圧学会
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
BMP2 Dependent Vascular Cell Communication Regulates Endothelial Metabolism Linking to Epigenetics	2017・5	PH Academy
Vascular Cell Communication Regulates Cell Metabolism and Cell Fate via BMP2	2017・12	PH Reserch Forum
III 学会等および社会における主な活動		

## 専任教員の教育・研究業績

所属	微生物化学研究室	職名	特任助教	氏名	迎 武紘
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）				
2	作成した教科書、教材、参考書				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4	その他教育活動上特記すべき事項				
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
<u>Mukae, T.</u> , Fujita, W., & Ueda, H.		論文	P-glycoprotein inhibitors improve effective dose and time of pregabalin to inhibit intermittent cold stress-induced central pain. Journal of pharmacological sciences, 2016 May;131(1):64-7. doi: 10.1016/j.jphs.2016.01.002		
Uchida, H., Matsushita, Y., Araki, K., <u>Mukae, T.</u> , & Ueda, H.		論文	Histone deacetylase inhibitors relieve morphine resistance in neuropathic pain after peripheral nerve injury. Journal of pharmacological sciences, 2015 Aug;128(4):208-11. doi: 10.1016/j.jphs.2015.07.040		

<u>Mukae, T.</u> , Uchida, H., & Ueda, H.	論文	Donepezil reverses intermittent stress-induced generalized chronic pain syndrome in mice. Journal of Pharmacology and Experimental Therapeutics, 2015 Jun;353(3):471-9. doi: 10.1124/jpet.114.222414
Matsushita, Y., Araki, K., <u>Mukae, T.</u> , & Ueda, H.	論文	HDAC inhibitors restore C-fibre sensitivity in experimental neuropathic pain model. British journal of pharmacology, 2013 Nov;170(5):991-8. doi: 10.1111/bph.12366
Matsushita, Y., O Omotuyi, I., <u>Mukae, T.</u> , & Ueda, H.	論文	Microglia activation precedes the anti-opioid BDNF and NMDA receptor mechanisms underlying morphine analgesic tolerance. Current pharmaceutical design, 2013;19(42):7355-61
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
新規肥満症化から鍵分子neudesinの寒冷ストレス暴露による発現変化および機能解析	2017年12月7日	第40回日本分子生物学会年会
線維筋痛症モデルにおける独立した疼痛及びモルヒネ鎮痛欠如機構	2017年3月15日	第90回日本薬理学会年会
LPA1 Receptor Signaling as a Therapeutic Target for Fibromyalgia in ICS Model Mice	2016年9月30日	International Association for the Study of Pain 16th
線維筋痛症様病態モデルマウスに対する疼痛治療を目的としたABCトランスポーター阻害剤併用療法の可能性	2016年9月17日	日本線維筋痛症学会第8回学術集会
線維筋痛症治療薬の有効性に影響を及ぼすABCトランスポーター阻害剤併用療法の可能性	2016年9月8日	第38回日本生物学的精神医学会第59回日本神経化学会合同年会

迎

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2016年4月-2017年3月	日本学術振興会特別研究員DC2
2016年9月17-18日	日本線維筋痛症学会第8回学術集会、優秀演題賞
2016年9月8-10日	第38回日本生物学的精神医学会第59回日本神経化学会合同年会、優秀発表賞

## 専任教員の教育・研究業績

所属	薬品物理化学研究室	職名	特任助教	氏名	宗兼 将之
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2018年4月～	薬品物理化学研究室に配属された学生の卒業研究指導を行っている。各実験の実験工程の意味を学生自身に考えてもらうことで、論理的に考える力を養えるように工夫している。		
2	作成した教科書、教材、参考書				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4	その他教育活動上特記すべき事項				
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
M. Munekane, M. Ueda, S. Motomura, S. Kamino, H. Haba, Y. Yoshikawa, H. Yasui, S. Enomoto		論文	Investigation of biodistribution and speciation changes of orally administered dual radiolabeled complex, bis(5-chloro-7-[ <sup>131</sup> I]iodo-8-quinolinolato)[ <sup>65</sup> Zn]zinc, <i>Biological and Pharmaceutical Bulletin</i> , 40(4), 510-515, 2017.		
M. Munekane, S. Motomura, S. Kamino, M. Ueda, H. Haba, Y. Yoshikawa, H. Yasui, M. Hiromura, S. Enomoto		論文	Visualization of biodistribution of Zn complex with antidiabetic activity using semiconductor Compton camera GREI, <i>Biochemistry and Biophysics Reports</i> , 5, 211-215, 2016.		

赤田直樹, 宗兼将之, 猪田敬弘, 神野伸一郎, 本村信治, 廣村信, 榎本秀一	論文	放射性セシウム、ヨウ素およびストロンチウムの代謝・排泄に対するローヤルゼリーの影響, <i>日本栄養・食糧学会誌</i> , 67(5), 237-244, 2014.
S. Kadowaki, M. Munekane, Y. Kitamura, M. Hiromura, S. Kamino, Y. Yoshikawa, H. Saji, S. Enomoto	論文	Development of new zinc dithiosemicarbazone complex for use as oral antidiabetic agent, <i>Biological Trace Element Research</i> , 154(1), 111-119, 2013.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
がんセラノスティックスを目的としたコンドロイチン硫酸被覆リポソームの作製と基礎的評価	2018年6月	第28回金属の関与する生体関連反応シンポジウム
抗糖尿病作用を有する亜鉛錯体の体内動態と化学形態の解析	2016年11月	第55回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会中国四国支部大会
亜鉛錯体の体内動態解析に資する新規核医学イメージング手法の開発	2015年3月	日本薬学会第135年会
Evaluation of zinc complexes' dynamics by using the Gamma-Ray Emission Imaging (GREI)	2013年11月	Xth International Society for Trace Element Research in Human 2013
Visualizing the biodistribution of zinc complexes as promising metal drugs by Gamma-Ray Emission Imaging (GREI)	2013年7月	4th International Symposium on Metallomics 2013
III 学会等および社会における主な活動		
2011年～現在	日本薬学会会員	
2018年～現在	日本分子イメージング学会会員	

## 専任教員の教育・研究業績

所属 製剤学研究室	職名 特任助教	氏名 田中 晶子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 卒業研究	2018年4月～	製剤学研究室に配属された4、5、6年次生に対し、卒業研究の指導を行っている。卒業研究を通して、問題解決能力・プレゼンテーション能力等を養うことができるように指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書 特になし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 特になし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Hitomi Yamasaki, Katsuko Takano, Mayuko Kawakami, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto.	論 文	IEEE Trans Nanobiosci., 2016, 15 (8), 798-803. The enhancement of nasal drug absorption from powder formulations by the addition of sodium carboxymethyl cellulose.
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Akifumi Matsushita, Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論 文	PLoS One, 2016, 11 (9), e0159150. Nasal absorption of macromolecules from powder formulations and effects of sodium carboxymethyl cellulose on their absorption.

Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Yuki Enomura, Tomoki Hori, Rina Shimomura, Chiaki Maeda, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Biol. Pharm. Bull., 2017, 40(2), 212-219. "Nasal Drug Absorption from Powder Formulations: Effect of Fluid Volume Changes on the Mucosal Surface."
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Manami Tomisaki, Mayuko Kawakami, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Eur. J. Pharm. Sci., 2017, 96, 284-289. "Nasal drug absorption from powder formulations: The effect of three types of hydroxypropyl cellulose (HPC)"
Kentaro Takayama, Kenji Mori, Akiko Tanaka, Erina Nomura, Yuko Sohma, Miwa Mori, Akihiro Taguchi, Atsuhiko Taniguchi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto, Naoto Minamino, Mikiya Miyazato, Kenji Kangawa, Yoshio Hayashi	論文	J. Med. Chem., 2017, 60, 5228-5234. "Discovery of a human neuromedin U receptor 1-selective hexapeptide agonist with enhanced serum stability"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Oxytocin の鼻腔内投与：直接移行経路を介した脳内送達の可能性	2017年3月	日本薬学会第137年会
鼻腔内投与後の脳への薬物移行：薬物物性と投与剤形との関係	2017年5月	日本薬剤学会第32年会
鼻腔内投与による生理活性ペプチド CPN-116 の脳内送達	2017年7月	第33回日本DDS学会学術集会
処方最適化による粉末製剤化医薬品の経鼻吸収性の改善 - 製剤添加物による吸収性の精密制御の可能性 -	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会
Transnasal delivery of peptide agonist specific to neuromedin U receptor 2 to the brain for the treatment of obesity	2017年11月	日本薬物動態学会第32回年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010年10月～現在に至る	日本薬学会会員	
2011年3月～現在に至る	日本薬剤学会会員	
2015年3月～現在に至る	日本DDS学会会員	
2017年7月～現在に至る	日本薬物動態学会会員	